

# MIC かながわ

特定非営利活動法人多言語社会リソースかながわ

## 20周年記念誌



多様な息吹が絆となり、未来へ続く共生の軌跡



# 目次

ご挨拶.....1

MIC かながわ現理事長 松野勝民

神奈川県国際文化観光局国際課課長 矢田健二

MIC かながわ元理事長 鶴田光子

MIC かながわの沿革.....5

2002年～2022年

現任者研修テーマ..... 8

2002年～2023年第一回

ニュースレターでたどるこれまでの軌跡.....13

ニュースレターからの抜粋

20周年記念事業イベント

寄せ書き.....104

各言語通訳、コーディネーター、事務局

編集後記

# MIC かながわ設立20周年を迎えて

認定 NPO 法人多言語社会リソースかながわ  
理事長 松野 勝民



1990年代に入り、医療費の未払い問題を中心とした「外国人の医療問題」が社会問題化しました。このことにより、あってはならない「診療拒否」も起こってきました。その多くの外国籍住民は健康保険未加入者であり、高額な医療費の支払いに受診を控える人も多くみられました。うまく受診につながったとしても、今度は言葉の問題がありました。コミュニケーションが取れない中での診療については、多くを語る必要はないでしょう。

地域では「知り合い」ということで頼まれて医療機関に同行していたボランティアも多かったです。しかし、その中から「二度と行きたくない」「怖い」「責任が取れない」等々のネガティブな声が聞こえてきました。一方で2000年10月に県知事あてに「第1期外国籍県民かながわ会議」の提言が出され、その中に「医療通訳の制度化」についての要望がありました。県はそれを受けて2001年4月に「神奈川県医療通訳制度検討委員会」を立ち上げ、私も委員として参加しました。その後、紆余曲折はありながらも2002年8月からモデル事業として初めての通訳派遣がスタートしました。実際の通訳スタッフの派遣は県の方ではノウハウがなく、MIC かながわを立ち上げたことが思い出されます。最初はマンションの部屋を借りて事務所としました。手狭なこともあり事務所ビルの一室に引っ越しました。ようやく事務所らしくなったと記憶しています。それから20年という月日が経ちましたが、日が経つにつれ「この事業は必要不可欠である」という意識も高まり、医療機関を中心とした関係機関からも同様の声が聞かれたことは大きな励みになりました。順調に来ていた通訳派遣も令和に入り「コロナ」という未曾有の困難にぶつかることになりました。通訳スタッフの安全を守りながらの通訳活動は未知の世界でしたが、県との話し合いや理事会等で検討した結果、場所や機器の問題はあるものの電話通訳やICTを活用した通訳活動など、大きな制約の中で出来ることから実施していきました。当然のことながら派遣件数は激減しましたが、その中でも「早く復活してほしい」という声が聞こえてきていました。コロナが落ち着いてきたことにより派遣件数は徐々に増加傾向にあります。今後は対面通訳だけでなく、状況に合わせた対応の必要性も感じています。

「医療を受ける」ということは「生きる権利」に必要なことであり、それは平等でなくてはなりません。歴代の理事長を始めとした理事・監事の皆様、事務局を支えて下さった事務局員・ボランティアの皆様、コーディネーターの皆様、神奈川県国際課を始めとした関係機関の皆様には感謝をしながら、そして通訳スタッフのたゆまない努力に敬意を表して、MIC かながわのモットーである「ことばで支える いのちとくらし」を基本に据え、一人でも多くの日本語を母語としない県民の生活支援をこれからも続けていきたいと思っております。

特定非営利活動法人

# 多言語社会リソースかながわ 設立 20 周年に寄せて

神奈川県国際文化観光局国際課長  
矢田 健二



このたび、特定非営利活動法人多言語社会リソースかながわが設立 20 周年を迎えられたことを、心からお祝い申し上げます。

貴団体は、2002 年に設立されて以来、医療通訳をはじめ、公的機関での通訳や感染症に係る通訳等、神奈川で暮らす外国につながる方々の支援に大きな貢献をしてこられました。

こうした活動により、国際交流基金地球市民賞や保健文化賞をはじめとした数々の賞を受賞されるなど、多方面から高く評価されており、歴代の役員やスタッフの皆様の長年にわたる御尽力に心から敬意を表します。

これまでを振り返りますと、2000 年に「外国籍県民かながわ会議」から県知事に対し、医療通訳の整備の必要性について提言されたことが始まりでした。

県は、提言を受け、医療通訳制度の検討を行い、2002 年に「かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業」を開始することとしましたが、その事業を運営する団体として貴団体が設立されました。

2003 年には、「かながわボランティア活動推進基金 21」を活用した医療通訳派遣システム構築事業を貴団体との協働事業として実施し、基金による事業終了後もシステムを持続可能なものにするため、検討を重ね、行政、協働事業者、医療機関、患者の皆様で支えていく、現在の医療通訳派遣システム事業ができました。

今でこそ、NPO 法人と行政の協働による取組が多く展開されていますが、当時は先進的な取組であり、このシステムを構築できたのは貴団体のお力が大きかったと感じております。

医療通訳の派遣件数は年々増加し、2019 年度には派遣件数が 7,000 件を超えて過去最高となり、多言語支援を必要としている多くの患者の皆様のニーズに添えていただいております。

2020 年度には、新型コロナウイルス感染症の発生により、通訳派遣を一時的に休止し遠隔通訳での支援に切り替えましたが、通信環境の問題や、現場の様子が見えないという対面では起こらなかった課題がある中で、創意工夫を重ねながら、初めての試みにも対応いただきました。また、派遣休止を通じ、医療機関や患者の皆様からの対面通訳のニーズの高さと貴団体の通訳の皆様への信頼の大きさを改めて感じました。

# 20周年にあたって 一鶴の恩返し

認定 NPO 法人多言語社会リソースかながわ  
前理事長 鶴田光子



この8月の20周年記念イベントで私がいただいたテーマは「鶴の一声」でした。そこで今回も「鶴」つながりで、「鶴の恩返し」は日本各地でよく知られている民話です。鶴が命を助けてくれた男性の妻となり、自分の羽で美しい織物を織りあげ、それを売った男性は豊かになるという物語です。

MIC は本当に人材が豊富です。先日久しぶりに MIC のメンバー4人と鎌倉でお花見ランチをし、4人の方の魅力や才能人柄、気迫にあらためて打たれました。

20年間、さまざまな立場のメンバーそして外部の協力者がそれぞれ自分の特徴ある「羽」をもちより「医療通訳」という貴重な美しい織物を織りあげたのだと痛感しました。民話は男性の強欲のため悲劇に終わりますが MIC はこれも奇跡に近いのですが、多少の紆余曲折があっても志をひとつに20年かかって立派な「織物」を作りました。

本当に「組織は人」だと痛感し、その一端に加えていただいたことを深く感謝します。

話は変わりますが「医療通訳」がらみで最近感じたことがあります。昨年12月ちょっと大きな手術を受けました。結果的には経過もよく、日常生活にも支障はないのですが、それでも診断から手術、その後の結果待ちは40年も病院のソーシャルワーカーとして病院に慣れているはずの私にも本当に辛い時間でした。その時つくづく思ったのは「そばにいてくれるひと」「味方になってくれる人」の必要性でした。もちろんMICをはじめ、とても多くの方が支えてくださいましたが、病院という、人を無力化する場所でそばにいて味方になってくれる人がほしかったのです。「家族は？」と思われるでしょうが、家族はしばしば自分の方が動揺してしまったり、患者の思いより自分の思いを通したかったりして助けにならないことがあります。

そう思った時、診察室、それ以前待合室からも一緒にいて、ていねいに患者の言いたいことを聴き取って医師に伝え、患者さんに必要な医師の言葉を正確に返してくれる医療通訳はどんなにか患者さんの力になっているか、言葉がわからなければ一層では？ということでした。20年医療通訳事業に関わってきて、今その重さを感じました。

このような「一緒にいてくれる人」「言いたいこと知りたいことを正確に伝えてくれる人」として言語力と対人援助力を備えた通訳を養成し、育てていく組織を支える人材の確保と育成、待遇の保障は何周年になろうと必要なことと思います。人材はさまざまな経歴、職業、国籍で成り立つといいですね。

これからは、さらに専門家集団であるとともに、一般市民に知られ、共感、賛同を得られる方法を模索してゆきたいです(「朝ドラ」に登場するとか??)

「多文化共生」のワードがメディアにもたびたび登場する今、「医療通訳が多文化共生社会にいる意味」を20周年記念イベントにおける田村太郎氏(一般財団法人 ダイバーシティ研究所代表理事)の言葉で締めくりたいと思います

「医療通訳の存在は持続可能な地域の未来に直結する」

私も今82歳。できることは本当に少ないし、先も短い?ですが自分の置かれた状況の中でささやかな「鶴の恩返し」を続けたいと思います。

あらためて20周年おめでとうございます!

支えて下さった方々への感謝と関わった患者さんの回復を祈りながら。





# 沿革

事業年度	月	出来事
2002	4	設立総会
	7	特定非営利活動法人として認証される
	8	「かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業」開始(5言語、6病院) (スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国・朝鮮語、タガログ語)
	9	外国人のための無料健康相談会への通訳派遣および広報協力開始
2003	4	前述「支援モデル事業」を発展させた「医療通訳派遣システム構築事業」開始 (かながわボランティア活動推進基金 21 協働事業負担金対象事業) (～07年度)
		横浜市国際交流協会の助成を受け、横浜市内の医療機関に医療通訳の派遣を開始 (～04年度)
		かながわ一般通訳支援事業を神奈川県国際課から受託
	10	「医療通訳派遣システム構築事業」の対応言語が 7 に増える。(英語、タイ語を追加)
2004	4	「医療通訳派遣システム構築事業」の協力病院が 16 に増える。
	7	(財)自治体国際化協会より 「医療通訳ボランティア研修プログラム説明会」事業を受託
2005	4	「医療通訳派遣システム構築事業」の対応言語が 10 に増える。 (ベトナム語、カンボジア語、ラオス語を追加)



		「医療通訳派遣システム構築事業」の協力病院以外の医療機関に対して、医療通訳の派遣を開始
		(財)自治体国際化協会より「医療通訳ボランティア研修プログラム説明会」事業を受託し、全国 10 か所の地域国際化協会で実施(9 月～06 年 3 月)
	10	横浜弁護士会「人権賞」受賞
2006	1	英語・スペイン語医療通訳公開講座実施
		中国語医療通訳公開講座実施(本年度のみ。11 年度に再開)
2007	4	「医療通訳派遣システム構築事業」において、通訳報償金の一部病院負担を導入協定医療機関が 17 に増える。
		外国籍県民エイズ通訳等派遣事業(感染症通訳派遣事業)を神奈川県健康福祉部健康増進課より受託
2008	4	かながわボランティア活動推進基金 21 協働事業負担金助成による医療通訳派遣が 3 月に終了し、通訳報酬は病院(一部患者)負担となる。
2009	4	神奈川県、市町との協働による「医療通訳派遣システム事業」開始。県、市町、MIC かながわが医療通訳派遣にかかる間接経費を負担
		
	6	外国籍県民新型インフルエンザ電話相談事業を神奈川県より受託(~10 年 3 月)
2010	4	横浜市中区保健福祉センターより同センターの乳幼児健診の通訳事業を受託(~11 年 3 月)
2011	4	「医療通訳派遣システム事業」の協定医療機関が 32 に増える。同事業において医療機関も間接経費を負担
2012	4	「医療通訳派遣システム事業」の協定医療機関が 35 に増える。
	6	外国籍県民への生活保護制度説明通訳派遣事業を神奈川県生活援護課より受託
2013	3	 国際交流基金「地球市民賞」受賞
2014	4	 「医療通訳派遣システム事業」の協定医療機関が 37 に増える。
2015	9	在宅医療通訳派遣事業試行

	10	第 67 回「保健文化賞」受賞
2016	4	多言語支援センターかながわ運營業務をかながわ国際交流財団と共同で神奈川県より受託
	10	FIT チャリティ・ラン 2016 支援先団体に指定
2019	11	第 53 回「社会 貢献者表彰」受賞
2020	4	コロナ禍で医療通訳派遣中止(4/13～8/31)、遠隔通訳導入
2022	8	設立 20 周年記念オンラインイベント実施
2023	3	SDG's 岩佐賞受賞





## 医療通訳スタッフ・コーディネーター現任者研修 テーマ一覧

年	回	テーマ	講師
2003	1	(1) 協定病院の紹介(特徴・集合場所・注意点) (2) 言語別グループディスカッション (3) ロールプレイ	各病院の MSW
2004	1	(1) 必携テキストをもとにした通訳心得 (2) 出産の基礎知識	沢田貴志(MIC かながわ理事・医師) 藤原ゆかり(県立福祉大学教授)
	2	(1) 通訳現場の課題整理  (2) 精神科の医療通訳	鶴田光子 (MIC かながわ理事長・静岡英和大学社会福祉大学教授) 阿部裕(明治学院大学教授)
2005	1	(1) 医療通訳の心得の再確認・ガイドラインの復習 (2) 理想の医療通訳・求められる役割	沢田貴志(MIC かながわ理事、医師)  押見貴之(産業医)
	2	(1) HIV および感染症について (2) 医療通訳の役割再確認 (3) アスベストと外国人労働者について	沢田貴志(MIC かながわ理事、医師) 沢田貴志(MIC かながわ理事、医師) 早川寛(MIC かながわ副理事長、港町診療所事務長)
2006	1	(1) 対人援助業務従事者自身のメンタルヘルス (2) ワークショップ  (3) 現場での通訳技術のスキルアップ 『大勢の中で通訳する』	山本房江(臨床心理士) ファシリテーター: 鶴田光子(MIC かながわ理事長、静岡英和学院大学社会福祉学部教授) 森田直美 (MIC かながわ英語医療通訳スタッフ)
	2	(1) 医療通訳が事故を回避するための戦略 ヒヤリハット事例の検討 (2) 目指すべき医療通訳者の姿 グループ別ブレインストーミング  (3) 医療通訳の制度に向けて	沢田貴志(MIC かながわ理事、医師)  ファシリテーター: 鶴田光子(MIC かながわ理事長、静岡英和学院大学社会福祉学部教授) 西村明夫 (MIC かながわプログラムアドバイザー)



2007	1	(1) 免疫について (2) 在住外国人医療サービスに関する調査  (3) 医療通訳スタッフ・コーディネーターの 確定申告について	蟹沢正好(横浜市立大学医学部名誉教授) 西村明夫 (MIC かながわプログラムアドバイザー) 渡辺恭一(税理士)
	2	(1) 遺伝の話	松田慶子・西川智子 (県立こども医療センター)
2008	1	(1) 体のメッセージをお伝え！臨床検査技師です  (2) 待合室での患者対応 (3) 日本国憲法と外国人の人権	新宮千恵美 (済生会横浜市南部病院 臨床検査技師) 岡田澄恵(メディカルソーシャルワーカー) 森田佐知子 (MIC かながわプログラムアドバイザー)
	2	(1) 医療通訳の心得 「あなたは安全運転に自信がありますか？」 (2) 言語別ロールプレイ	沢田貴志(MIC かながわ理事、医師)
	3	(1) 傾聴 (2) 医療コミュニケーション	久保田路乃・小林美美子(横浜いのちの電話) 堀越由紀子(田園調布大学准教授)
2009	1	(1) 医療安全管理について (2) ヒヤリ・ハット事例の共有  (3) 目で見えるコーディネーターの仕事	毛利一平(労働科学研究所研究副部長) ファシリテーター: 沢田貴志(MIC かながわ理事、医師)
	2	(1) 新型インフルエンザの基礎知識と医療の流れ ・HIV について通訳に知っておいてほしいこと (2) 外国人にとってなぜ結核治療が重要か (3) 保健師の感染症患者のサポートについて	倉井華子 (横浜市立市民病院感染症内科医) 沢田貴志(MIC かながわ理事、医師) 石田則子(保健師)
	3	(1) 精神障害の基礎知識 (2) 精神科患者への接し方について	土屋洋子(港町診療所心療内科医) 倉林るみ(多文化間精神医学会精神科医)
2010	1	(1) )外国籍住民が使える医療制度 ／生活保護に関わるものを中心に (2) 産科医療に関わる諸制度について	嘴本郁 (NGO 神戸外国人救援ネット運営委員) 坪田由紀子 (聖マリアンナ医科大学病院 MSW)
	2	(1) 脳疾患について  (2) グループディスカッション	久手堅司 (済生会横浜市東部病院神経内科医師)
	3	(1) 監察医の 40 年 (2) 感染症と通訳派遣について	西丸興一(横浜市立大学医学部名誉教授) 沢田貴志(MIC かながわ理事、医師)



2011	1	(1) リハビリテーションについて (2) 医療通訳者のメンタルケアについて	安西淳(済生会神奈川県病院理学療法士) 岸良範(茨城大学大学院教授)
	2	(1) こどもの先天性疾患について (2) MIC かながわ設立の経緯とこれまでの歩み  (3) 問題となった派遣事例、注意について グループディスカッション	大浜用克(県立こども医療センター総長) 高橋元央 (MIC かながわプログラムアドバイザー)
	3	(1) 医療通訳者に通じるホスピス緩和ケアからの学び	児玉智之(めぐみ在宅クリニック医師)
2012	1	(1) 病院における食事・栄養 (2) 新しい在留制度について (3) 災害時の通訳派遣体制について	藤谷朝実 (済生会横浜市東部病院栄養部副部長) 金子葉子(行政書士) 説明:岩元陽子(MIC かながわ副理事長・Co.・英語医療通訳スタッフ)
	2	(1) 放射線治療について  (2) 言語別ロールプレイ	佐藤達 (済生会横浜市東部病院放射線技師)
	3	(1) 感染症について  (2) 病院から見た医療通訳について	倉井華子 (静岡県立がんセンター感染症内科医師) パネリスト: 手塚順子(川崎市立川崎病院 MSW)、 鈴木善樹(平塚市民病院 MSW)、 細谷桃代(済生会横浜市東部病院 MSW)
2013	1	(1) 予防接種について  (2) バイタルサインと健康	成田香織、後藤聡志 (横浜市金沢区福祉保健センター): 毛利元彦(花園橋クリニック院長)
	2	(1) 通訳技術を高める技法と訓練ワークショップ	内藤稔(東京外国語大学多言語・ 多文化教育研究センター特任講師)
	3	(1) 発達障害の基礎知識  (2) 言語別ロールプレイ	金井剛 (横浜市中央児童相談所児童精神科医)
2014	1	(1) 糖尿病について  (2) 糖尿病の栄養指導	今井孝俊 (横浜市立市民病院糖尿病リウマチ内科医) 太田奈緒美 (横浜市立市民病院管理栄養士)
	2	(1) 自分自身の通訳技術をふりかえる (言語別ロールプレイ)	ジャネル・モロス(英語、東京医科歯科大学) 宮首弘子(中国語、杏林大学) タレス・ルールデス(スペイン語) 金永子(韓国・朝鮮語) 浜田エミリア(ポルトガル語) 川口ウィヤダー(タイ語) 明石恒浩(タガログ語) 寺戸ホア(ベトナム語)
	3	(1) 医療通訳に知っておいてほしい感染症の知識	吉村幸浩 (横浜市立市民病院感染症内科副医長) 沢田貴志(MIC かながわ理事、医師)

2015	1	(1) 退院時に必要な福祉サービスの基礎知識  (2) 医療通訳活動におけるルールの確認 (グループディスカッション)	山田裕美子(衣笠病院長瀬ケアセンター浦賀・久里浜第二地域包括支援センター ケアマネジャー)
	2	(1) 新生児集中治療室(NICU)における命を巡る話し合い	豊島勝昭 (神奈川県立こども医療センター新生児科医長)
	3	(1) がん診療と Verbal Communication ～がん診療専門医が考える医療通訳の重要性	山中康弘 (横浜市立市民病院腫瘍内科担当部長)
2016	1	(1) 感染症について (2) 医療通訳に知っておいてほしい薬の知	沢田貴志(MIC かながわ理事、医師) 入野真規子(港町診療所薬剤師)
	2	(1) 循環器の病気と治療  (2) 看護師の役割について	西澤健也(川崎市立川崎病院 循環器内科 冠疾患集中治療室室長) 平野弘美(県立がんセンター主任看護師 移植コーディネーター)
	3	(1) 自分の通訳技術をふり返る	ジャネル・モロス(英語) 永田小絵(中国語) 今木照美(スペイン語) 金永子(韓国・朝鮮語) 奥沢セヴェラ(ポルトガル語) 川口ウィヤダー(タイ語) 明石恒浩(タガログ語) 寺戸ホア(ベトナム語) ロジナ(ロシア語)
2017	1	(1) 協定病院のソーシャルワーカーより ～医療通訳に望むこと～  (2) 精神科の病気と治療について	鈴木菜々海(県立こども医療センター) 川上 (聖マリアンナ医科大学病院) 川上加奈(川崎市立多摩病院) 荒井宏(あらいクリニック院長)
	2	(1) 医療通訳のメンタルヘルス  (2) 医療機関ソーシャルワーカーの立場から医療通訳に望む個人情報保護 (3) グループディスカッション	松野航大 (MIC かながわメンタルアドバイザー) 緒方文子(県立がんセンターMSW)  言語混在グループ
	3	(1) 感染症について (2) 眼科の病気	沢田貴志(MIC かながわ理事、医師) 丸山貴大(済生会横浜市東部病院眼科)
2018	1	(1) 発達障害の理解と対応  (2) グループディスカッション	原口光代 (県立こども生活自立支援センター小児科医)  言語混在グループ
	2	(1) 脳血管障害の発生、治療、リハビリテーションについて  (2) 脳卒中になった人を支える～急性期治療からリハビリ、在宅介護まで～	森俊樹(済生会神奈川県病院医師)  渥美昇平(済生会神奈川県病院 MSW)
	3	(1) 耳鼻咽喉科領域の解剖と疾患 (2) 医療通訳を取り巻く現状	畠山博充(市大センター病院医師) 松野理事長、岩本理事

2019	1	(1) 血液のがん ～小児医療現場でのコミュニケーション～ (2) 活動上のルールの確認	横須賀とも子 (県立こども医療センター医師) 事務局から
	2	(1) 膠原病について (2) 感染症について	岸本大河(横浜市立大学附属病院医師) 沢田貴志(港町診療所所長医師)
	3	(1) 膠原病について② (2) 新型コロナウイルス肺炎情報	岸本大河(横浜市立大学附属病院医師) 沢田貴志(港町診療所所長医師)
2020	1	(1) 消化器のしくみと病気	横山康行 (日本医科大学武蔵小杉病院消化器外科医師)
	2	(1) 新型コロナウイルス肺炎情報	沢田貴志(港町診療所所長医師)
2021	1	(1) ブースからの現状報告 (2) 医療通訳スタッフからの体験談 (3) グループに分かれての話し合い	岩元陽子 中国語 篠崎知恵、タイ語 大和田恵子、 英語 榎原圭美 13グループ
	2	(1) 皮膚科の話	栗原佑一(平塚市民病院皮膚科医長)
	3	(1) 新型コロナウイルス感染症について	吉村幸浩 (横浜市立市民病院感染症内科医長)
2022	1	(1) 麻酔と麻酔科医 (2) 個人情報について	近江禎子 (東京慈恵会医科大学附属第三病院 麻酔科) 内藤まゆみ(事務局)
	2	(1) 最近の精神科医療通訳の問題点と課題	阿部裕(四谷ゆいクリニック院長)
	3	(1) 遠隔通訳について (2) 心得10か条の再確認・行動の振り返り	報告—佐藤敬子(国際課)、 体験談—岡村容子、清水秋恵、松尾圭子 グループワーク
2023	1	(1) 眼科の病気について ～ぶどう膜炎、糖尿病網膜炎、加齢黄斑変性を 中心に～ (2) 個人情報について	市邊義章 (北里大学要因非常勤講師・神奈川歯科大学附属横浜クリ ニック眼科 科長) 伊藤綾(国際課)

※2020年7月4日に理事期有志でオンラインイベントを開催しました。

プログラム： 1. MIC の現状報告

2. 電話通訳に関する座談会

3. 新型コロナと医療通訳に関するお話(港町診療所・沢田先生)

「現任者研修」ではなく、自由参加のイベントでしたが、多くの方にご参加いただきました。





## ニュースレターでたどる 20年！！

2002年4月13日に発足したMICかながわのニュースレターは、2002年7月から始まり、2023年12月には、98号を数えました。最初は月に1回、年に4回、年に3回、年に2回と発行回数は減っていきましたが、発行回数が減ってからは、一回のボリュームがかなり大きく、十分読み応えのあるものです。このニュースレターを読むことでMICのすべてがわかると言っても過言ではありません。しかしながら、全部掲載すると1000ページを超える大容量。編集し発行されてきた方々には本当に頭の下がる思いと感謝でいっぱいです。

今回は、ほんの一部の掲載となってしまいましたが、それでも、十分、MICがどう歩んできたのかというのがしっかり伝わってくるのではないかと思います。

割愛させていただいた部分には、最初の頃のMICの様子が手に取るように伝わってくるもの、また、医療の場によく出てくる言葉や、診察の場面のやり取りのシナリオ、病気の知識など、医療通訳とはどういうものか確立していなかった時代、どのように通訳スタッフが学習していけばよいかの道しるべとなるようなもの、事務局のメンバー、コーディネーター、通訳スタッフをはじめ、MICに関わってきてくださっている方々の紹介など、顔の見える関係を作ろうとしていたもの、そして共に手を取っていける他団体のイベントの紹介も数多く掲載されていました。

そういった内容が含まれていたのだということも頭に置きつつ、今回、抜粋させていただいたニュースレターを通して、これまでのMICかながわの歩みをたどっていただけると幸いです。

MIC かながわも活動を開始してからまもなく3ヶ月を迎えようとしています。初めてのニュースレターをお届けします。今後も報告や予定を含めて情報などをお知らせする予定でありますので、会員の皆さまも内容に関するご要望がありましたら、どうぞ事務局までお寄せください。

## 7月活動予定

- 9日 かながわ外国人医療フォーラム2002実行委員会
  - 15日 消防学校救急隊員教育訓練事業外国語講座  
(英語・中国語・スペイン語)
  - 17日 かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援  
モデル事業研修
  - 19日 財自治体国際化協会(CLAIR) 多言語医療マニュアル  
(生活ガイド医療編) 全国汎用版(HP化)作成検討部会
  - 20日 かながわ外国人医療フォーラム2002  
-外国人医療のあしたにむかって-
  - 21日 横浜市国際交流協会「横浜・外国人無料相談会」
- 8月22/23日 2002国際多文化間精神医学会

## <活動報告>

- 5/31 かながわ外国人医療フォーラム2002  
実行委員会
- 6/10 かながわ外国人医療フォーラム2002  
実行委員会
- 6/12 かながわ県民活動サポートセンター  
NPOマネジメント相談会  
「団体の税務会計」受講
- 6/19 医療通訳者の集まり
- 6/20 救急救命士新人研修 打ち合わせ
- 6/21 第4回理事会
- 6/22 さがみはら国際交流ラウンジ学習会  
「医療英語」企画、講師
- 6/26 東大学生訪問  
第6回医療通訳制度検討委員会
- 6/29 かながわ県民活動サポートセンター  
NPOマネジメント相談会  
「団体の財務会計」受講

## 公演 「MIZUSHOBAI」

フィリピン・BATIS 劇団アドボカシー  
日時…7月16日(火) 18:30~20:30  
会場…自治労横浜会館2階B会議室 参加費…500円  
問合せ…なか伝道所 045-671-1109

## 経費節減にご協力をお願い

今後、MIC からのお知らせはEメールのみでかまわないという方は、お手数ですが下記のメールアドレスまでご一報願います。また、Eメールアドレスをお知らせいただいている方も、ぜひお知らせください。

## 事務局ボランティア募集!

電話番号や雑務など、週1回数時間でも定期的に事務作業のお手伝いをしていただける方を募集しています。特に水、木、金、なかでも金曜日の事務所番をしていただける方を急募!

## かながわ外国人医療フォーラム2002

日時 : 7月20日(土) 13:00~17:00

会場 : 神奈川県社会福祉会館 4階  
第1・2・3研修室

参加費 : 500円

内容 : 第一部 基調報告・報告  
県内の外国人医療について  
医療通訳サービス支援モデル事業について  
外国人医療機関調査の分析結果  
第二部 分科会  
外国人医療をめぐる問題の基礎  
医療通訳と医療システム

問合せ・申込み :  
かながわボランティアセンター  
(担当: 松永)

ご寄付ありがとうございました♥ 黒田郁子さん 椅子・テーブル 椎野紀子さん コーヒーカップ・コップ

MIC かながわ 〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-9-22 日興パレス横浜703

Tel.&Fax.: 045-314-3368 E-mail: mickanagawa@yahoo.co.jp

URL: <http://www.geocities.co.jp/SweetHome-Ivory/3748/>



梅雨も明け毎日暑い日が続いていますが、皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

7月23日付でMICかながわがNPO法人として認証されました。現在登記の手続きを行っております。

8月からは、かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業がいよいよ始動します。どのような結果を得て、どのように展開していくのか楽しみです。

### < 7月活動報告 >

8日(月)第5回役員会

9日(火)かながわ外国人医療フォーラム2002実行委員会  
分科会打ち合わせ

17日(水)かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援  
モデル事業研修

神奈川県支援事業として、スペイン語、ポルトガル語、タガログ語、中国語、韓国朝鮮語の医療通訳者を対象に開催。対象者については時間的制約から一般公募はせず、主に既に医療通訳として活動されている方々の中からお願いしました。

15日(土)消防学校救急隊員教育訓事業

外国語講座(英語・中国語・スペイン語)

愛甲石田にある神奈川県消防学校で、57名の救急救命士を対象に外国語講座を開催。3グループに分け各言語50分ずつシミュレーションを交えて行いました。相手(外国人)に恐怖を与えないためのエレガントなボディランゲージ、アイコンタクト、表情などをネイティブから教わる等、真剣な中にも楽しい雰囲気の講座となりました。

18日(木)NPO法人イーパーツ ヒアリング(中古PC寄贈審査) ノートPC3台申請!審査通りますように....

19日(金)財自治体国際化協会(CLAIR) 多言語医療マニュアル(生活ガイド医療編)  
全国汎用版(HP化)作成検討部会(副理事長の松野と事務局松延が委員として参加)

20日(土)かながわ外国人医療フォーラム2002 ー外国人医療のあしたにむかってー

募集定員を大きく上回る参加者を迎え、第一部「報告」第二部「分科会」が4時間にわたって行われました。県からは外国籍神奈川県民医療通訳サービスの制度化について説明がありました。県財政の状況を協調されるなど制度化への難しさを感じさせられる一方、遠くは愛知県や京都府の方からの参加もあり、神奈川県が外国人医療の先進地域であることを認識させられました。

21日(日)横浜市国際交流協会「横浜・外国人無料相談会」

23日(火)NPO法人認証

26日(金)第6回役員会

29日(月)横浜市消防局外国語救急電話対応ソフトのデモンストレーション  
オブザーバー参加(財横浜市国際交流協会横浜国際交流ラウンジ)

事務局  
ボランティア  
募集!

### 活動予定

8月3日(土)

かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業  
医療通訳スタッフの自主的勉強会

9月8日(日)


外国人のための無料健康相談会(港町診療所&十条通り医院共催)  
会場:大和カトリック教会(小田急江ノ島線南林間駅徒歩15分)  
受付時間:12:00~15:00  
内容:胸部レントゲン/血圧測定/尿検査/歯科検診/一般健康相談

電話番号や雑務など、週1回数時間でも定期的に事務作業のお手伝いをしていただける方を募集しています。特に月、水、木、金、なかでも金曜日の事務所番をしていただける方を急募!

横浜市国際交流協会機関紙「ヨークピア」2002 7・8月号市内国際交流レポートに掲載されました。

<http://www.yoke.city.yokohama.jp/yokepia/2002.7.8/piar02.7.8html>



8月4日(日)   
第3回アペハ・日本ペルー共生協会  
国際フェスティバル

スペイン語圏の人々と音楽や舞踊を通しての  
国際交流です。

会場：町田市民フォーラムホール

(小田急町田駅から徒歩8分)


時間：午後4時～7時(開場午後3時30分)

入場料：大人2,000円

子ども(小学生～高校生) 1,000円

\*アペハ会員は割引あり

問合せ先：042(788)5216

10月25日(金)   
田中健コンサート「ケーナの世界」  
(社会福祉法人いのちの電話主催)

ケーナ(南米の民族楽器)は竹などで作られ  
たたて笛です。

会場：関内ホール大ホール

開演：午後7時(開場午後6時15分)

入場料：全席自由 前売り券3,000円

当日券 3,500円



申込み・問合せ先：045(333)6163

イベントのお知らせ

8月22日(木)・23日(金)

2002国際多文化間精神医学会

会場：明治学院大学 横浜キャンパス9号館921・922教室

(JR戸塚駅よりバス10分)

時間：9:30～17:30(受付開始9:00)

参加費：1日のみ 3,000円 2日間 5,000円

8月22日(木) 問合せ先：03(5421)5515/5522

基本テーマ「異文化間のコンフリクト転換」

特別講演「コンフリクトとその転換：トランスエンド法」

――ヨハン・ガルトゥング

“日本文化の光と影―対象関係論の立場から”

――北山 修(九州大学)

8月23日(金) 問合せ先：044(865)6111

基本テーマ「多文化間精神医学と国際社会貢献」

シンポジウムⅠ伝統医療をめぐる諸問題

Ⅱ精神科リハビリテーション：日本vsブラジル

Ⅲ精神科臨床における医師―患者関係の  
文化的差異

Ⅳ移住者と地域

Ⅴ卒後教育としての多文化間精神医学

医療通訳に関わる損害賠償責任保険について

医療行為中における通訳ミス等による通訳者の損害賠償責任  
を心配されている方は多いと思います。それに関し、通常病院  
が加入している「医師(医療業務)賠償責任保険」について、  
通訳者が対象になるのかどうかの調査が行われました。

「病院の医師や補助者の医療行為が原因で……」の文言から  
医療行為とは直接的な診療行為だけではなく、医師の指示や監  
督下にある行為も含まれることから、《医療通訳の業務もこれ  
に含まれる》よって《医療通訳者は補助者に含まれる》という  
可能性が極めて高いという結果が出ました。従って、「医師  
(医療業務)賠償責任保険」によって医療通訳者もカバーされ  
ることとなりますので、新たな保険加入の心配や手続は不要で  
す。

経費節減にご協力を

今後、MICからのお知らせはEメール  
のみでかまわないという方は、お  
手数ですが、下記のメールアドレス  
までご一報願います。また、Eメ  
ールアドレスをお知らせいただい  
ない方も、ぜひお知らせ下さい。

ご寄付ありがとうございました  
稲田恵子さん(冷蔵庫)  
NEC(パソコン)  
アンヘル・バルガスさん(収納棚)  
マンションの管理人さん(傘)  
原田慶堂さん、MF-MASH原田  
基金さん、役員有志の皆さん

MICかながわ 〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-9-22 日興パレス横浜703

Tel.&Fax.: 045-314-3368 E-mail: mickanagawa@yahoo.co.jp

URL: http://www.geocities.co.jp/SweetHome-Ivory/3748/

今号はMIC会員および、かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業医療通訳スタッフへお送りします。今年の夏は暑かったですね。これから夏の疲れが出るころです。皆様くれぐれもお体を大切にお過ごし下さい。

<活動報告>

8月3日(土) 神奈川外国籍県民医療通訳サービス支援  
モデル事業医療通訳スタッフ自主的勉強会

県モデル事業の医療通訳スタッフ等約30人が参加。港町診療所の稲田恵子さんを講師に迎えて、まずは一般的な「人体のしくみ」を楽しくクイズ形式で勉強しました。からだに関するクイズの後、臓器の位置や役割、受診する場合の診療科目はどこになるのかなど、医療の基礎知識を勉強。その後休憩を挟み、それぞれの言語に分かれて学習会を行いました。

「このような勉強会を継続して持ちたい」という参加者の熱意で、2回目の自主的勉強会を10月5日(土)に行う予定です。今のところは医療通訳スタッフのみの勉強会ですが、今後医療通訳サービスの制度化に合わせて学習会を充実させることは、MICかながわの大事な事業のひとつでもあり、より有意義なものになるよう皆様からのご意見ご要望をお待ちしています。

8月30日(金) 第6回役員会

<活動予定>

9月8日(日)

外国人のための無料健康相談会  
(港町診療所&十条通り医院共催)

会場:大和カトリック教会

(小田急江ノ島線南林間駅徒歩15分)

受付時間:12:00~15:00

内容:胸部レントゲン/血圧測定/尿検査  
歯科検診/一般健康相談

(111名参加!詳細は次号で)

9月20日(金) 第7回役員会

9月21日(土) 13:30~16:30

横須賀国際交流協会

医療通訳ボランティア学習会

(対象言語の指定はありません)

会場:横須賀国際交流協会

内容:医療に関する常識の整理、医療通訳  
のポイント、シミュレーション

問い合わせ:0468-27-2166

10月5日(土)

県モデル事業医療通訳スタッフ  
第2回自主的勉強会(予定)

かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業  
(スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語、タガログ語)

開始1ヶ月が過ぎて...

かながわ県民センター「県民の声・相談室」のブースを借りて、3人のコーディネーター(北村さん、小島さん、松延さん)が、8~10月の月~金曜日、9~12時/13~16時、当番制でコーディネート業務に就いています。

協力病院(6病院)から通訳派遣の依頼が来ると、コーディネーターが登録医療通訳スタッフと連絡を取り、派遣の手配をするという手順です。8月26日現在で派遣依頼は44件。各言語に依頼がありました。予想していた以上に多かったのはタガログ語です。

このモデル事業により確実に変わったと思われる部分は、今まで医療通訳のコーディネートを担当していたソーシャルワーカーなど病院スタッフの方達の負担でしょう。コーディネートを要していた時間的な負担はかなり軽減されたと思われます。実際、ある病院からは感謝の言葉をいただきました。

今日、明日という緊急の依頼も多く、幸いなことに非常に協力的な通訳スタッフに恵まれて派遣できていますが、通訳スタッフの層を厚くする必要性を痛感しています。

そのほか、通訳の研修やコーディネーターの役割など、よりよい制度づくりに向けて、課題を整理していきたいと考えています。

■ 8月依頼受付実績一覧表/9月2日付け「Japan Times」記事内容(当モデル事業関連).....別添 ■

9月2日付「Japan Times」に当モデル事業のことが掲載されました。若干事実とずれているところが見受けられますが、そこは新聞記事なので...

かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業  
8月依頼受付実績報告（平成14年8月1日から31日）

\*依頼受付後にキャンセルになった分も実績として計上

\*（ ）内の数字は派遣日が9月以降の日付のもの

8月受付実績	50件	（内、派遣日が9月以降のもの 10件）
--------	-----	---------------------

言語別実績	
スペイン語	25件（6）
ポルトガル語	3件（2）
中国語	7件（1）
タガログ語	8件（1）
韓国語	7件

協力病院別実績	
東海大学病院	17件（5）
済生会神奈川県病院	20件（3）
太田総合病院	5件（2）
北里大学病院	5件
海老名総合病院	2件
社会保険横浜中央病院	1件

依頼受付日から通訳依頼日までの 日数別実績	
当日	7件
翌日	8件
翌々日	5件（1）
3日以上	30件（9）

診療科目別実績	
内科	2件
外科	12件（3）
小児科	2件（1）
婦人科	4件（1）
産婦人科	11件（3）
皮膚科	2件
耳鼻咽喉科	4件
整形外科	4件
リハビリ科	1件
泌尿器科	4件
脳神経外科	4件（1）
脳外科	2件（1）

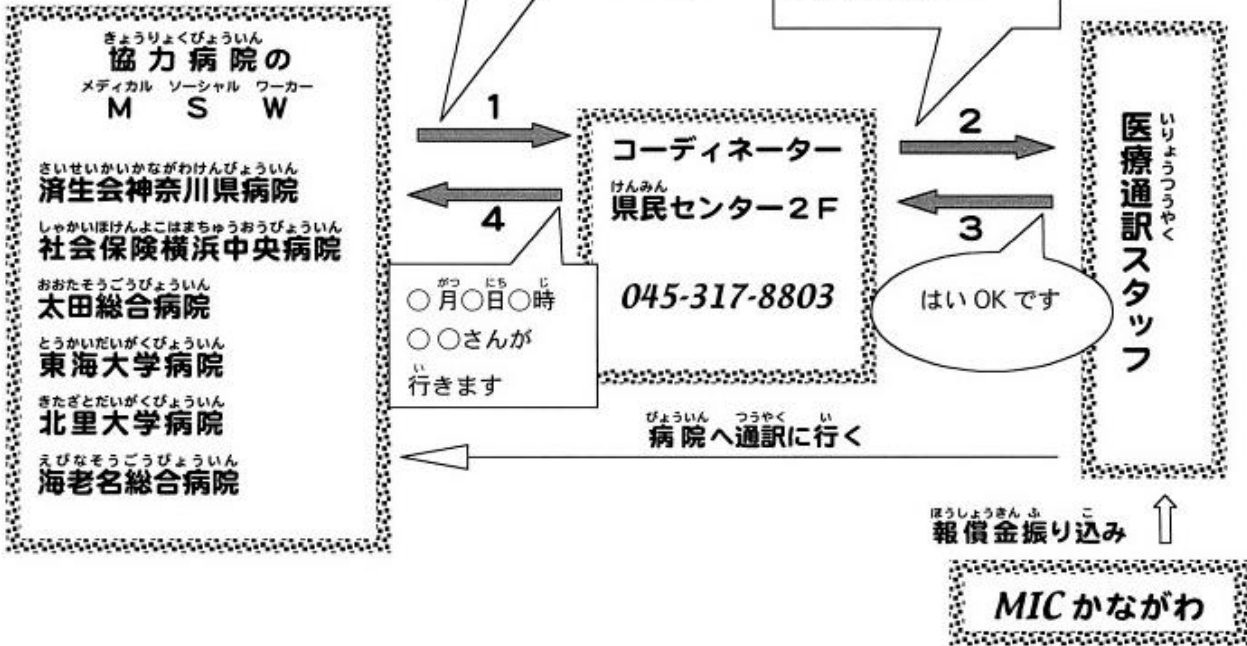
\*複数受診もあるため計52件となっている

# MIC かながわ No.1

医療通訳スタッフのためのニュースレター

医療通訳スタッフの皆さんに派遣システムをわかりやすく、また、それぞれの言語グループの活動の様子をお伝えします。

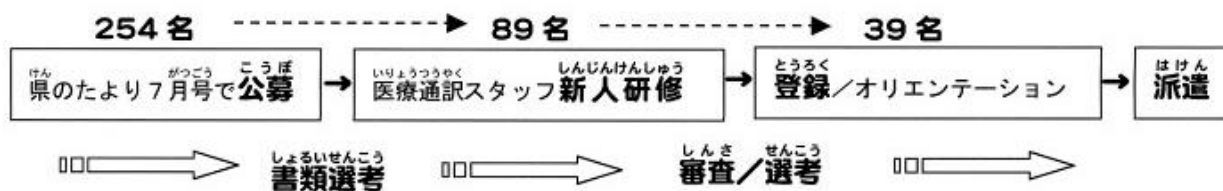
## 医療通訳派遣のシステム



※ 協力病院は現在は6病院ですが、その数を増やすように交渉中です。

- 病院に着いたら医療通訳スタッフバッジをつけましょう。身分証明書とボランティア保険加入者証も通訳の時は必ず持って行ってください。
- 最初に担当のMSWに会います。
- 通訳が終わったらMSWに終わったことを報告します。
- MSWは通訳が行われたことをコーディネーターに報告します。
- MIC かながわがコーディネーターの記録を基に報償金の計算をします。
- 医療通訳スタッフにMIC かながわから報償金が振り込まれます。  
(この報償金はかながわボランティア基金21助成金から支払われています)

ねんどいりょうつうやく こうぼ どうろく なが  
2003年度医療通訳スタッフ公募から登録までの流れ



いりょうつうやく しんじんけんしゅう  
2003年医療通訳スタッフ新人研修

第1回 8月23日(土) かいかい あいさつ こうぎ  
開会の挨拶・講義

- いりょうつうやく 医療通訳派遣システム構築事業 がいよう 概要の説明 (けん 県・こうさいか 国際課 こみやまかちょうだいいり 小宮山課長代理)
- いりょうつうやくちしき 医療通訳知識の基礎 (みなとまちしんりょうじょいし 港町診療所医師 さわたたかし 沢田貴志)
  - いりょうつうやく 医療通訳として心(こころ)がけること ①せいかく 正確な知識 ②きほんてきいがくちしき 基本的医学知識の習得 ③かんじゃ 患者のプライバシーを守る ④かんじゃ 患者が話しやすい態度を心(こころ)がける ⑤じぶん いけん かんじゃ うった 自分の意見と患者の訴えをまぜない
  - ⑥いりょう 医療に関わる様々なスタッフの役割を知る ⑦じぶん やくわり し 自分の役割を知る
- いりょうつうやくぎじゆつ 医療通訳技術の基礎 (みなとまちしんりょうじょかんごし 港町診療所看護師 いなだけいこ 稲田恵子)
  - ぞうき めいしやうなど 臓器の名称等の基礎知識(きそちしき)・まめちしき 豆知識をクイズ形式(けいしき)で学習(がくしゅう)

第2回 8月30日(土) こうぎ  
講義

- つうやく 通訳としてのカウンセリングマインドのための心理学基礎知識(しんりがくきそちしき)
  - しずおかえいわがくいんがいがくじよきやうじゆ (しずおかえいわがくいんがいがくじよきやうじゆ 静岡英和学院大学助教授) ・ いりょうつうやく 医療通訳コーディネーター つるたまつこ (いりょうつうやく 医療通訳コーディネーター 鶴田光子)
  - 「びやういん 病院は緊張(きんちやう)する場所(ばしょ)とおお 多く(おほ)の人が感じる。ストレスとはどういうものなのか。ストレスを(をか)抱えている人(ひと)への援助(えんじゆ)の必要性(ひつやうせい)。いりょうつうやく 医療通訳(た)ち(ば)の(か)く(にん)立場(たて)の確認(かくにん)。」
- いりょうせいど 医療制度の基礎知識 (さいせいかいかながわけんびやういん 済生会神奈川県病院MSW まつのかつみ 松野勝民)
  - がいこくじんいりやう 外国人医療(がいこくじんいりやう)の現状(げんじやう)報告(ほうこく)。けんこうほけんせいど 健康保険制度(けんこうほけんせいど)にはどのよう(い)なもの(もの)がある(あ)るのか(か)。こうひ 公費(こうひ)の助成(じよせい)が受けら(う)れる医療(いりやう)にはどのよう(い)なもの(もの)がある(あ)るのか(か)。
- たいじんえんじよ 対人援助(たいじんえんじよ)スキル(スキル) (つるたまつこ 鶴田光子)
  - ひと 人はどのよう(い)に接(せつ)してほ(せつ)しいか、接(せつ)するべき(べき)か -- (ばいすてく ばいすてく)の原則(げんそく)
  - ① わたしこじん 「私個人(わたしこじん)」として接(せつ)してほ(せつ)しい ② かんじやう 感情(かんじやう)を大切(たいせつ)にしてほ(せつ)しい ③ えんじよ 援助(えんじよ)する側(がわ)の感情(かんじやう)表現(ひょうげん)は... ④ ありのまま(ありのまま)の自分(じぶん)を受け入(う)れてほ(せつ)しい ⑤ いっぽうてき 一方的(いっぽうてき)に非難(ひなん)しない(せ)いでほ(せつ)しい ⑥ じぶんじしん 自分自身(じぶんじしん)で選(えら)び、決(き)めたい ⑦ ひみつ 秘密(ひみつ)は守(まも)ってほ(せつ)しい
  - これらは人間(にんげん)共通(きやうつう)の原則(げんそく)であり、日本人(にほんじん)であ(あ)ろうと外国籍(がいこくせき)の人(ひと)であ(あ)ろうと(おな)同じ(おな)。
  - げんそく 原則(げんそく)の通訳業務(つうやくぎやうむ)への応用(おうよう)。
  - げんご 言語(げんご)、ひげんご 非言語(ひげんご)、きより 距離(きより)、いち 位置(いち)。



**第3回 9月6日(土) 講義、ロールプレイ**

■ **医療通訳実践入門** (現任医療通訳派遣コーディネーター・医療通訳スタッフ 小島素子)

現任の医療通訳派遣コーディネーターとして、実際の派遣の流れを説明。併せて現任医療通訳スタッフとしての諸アドバイス。

■ **医療通訳の現場から** (港町診療所医師 沢田貴志 & 現任医療通訳スタッフ)

現任医療通訳スタッフへのインタビューを通して医療通訳業務を知る。

□ **各言語** (英語・スペイン語・中国語は各2グループ) に分かれてのロールプレイ

日本人医師役・母語患者役の演じるシミュレーションに、研修者は通訳として参加。各言語講師からのアドバイスを受ける。シミュレーションとはいえ、緊張感のあふれる空間となった。

**第4回 9月13日(土) 講義、ロールプレイ**

■ **通訳失敗物語** (港町診療所医師; 沢田貴志)

沢田先生ご自身の経験から来る“ヒヤリハット”の過去の事例を紹介。

□ **各言語** (英語・スペイン語・中国語は各2グループ) に分かれてのロールプレイ

日本人医師役・母語患者役の演じるシミュレーションに、研修者は通訳として参加。

各言語講師からのアドバイスを受ける。ロールプレイ第2回目。

**9月30日(火) 医療通訳スタッフオリエンテーション**

新規登録者に対し、あらためて **■制度の説明** **■協力病院の案内** **■コーディネーターの紹介**があり、その後言語別に分かれて自己紹介方々先輩通訳スタッフを交えたグループトークの時間をもちました。

**<医療通訳スタッフ登録数>**

2002年度 医療通訳スタッフ	+	2003年度(公募) 医療通訳スタッフ	=	2003年度 医療通訳スタッフ
スペイン語 14名		スペイン語 8名		スペイン語 22名
ポルトガル語 9名		ポルトガル語 5名		ポルトガル語 14名
中国語 7名		中国語 8名		中国語 15名
コリア語 4名		コリア語 4名		コリア語 8名
タガログ語 5名		タガログ語 0名		タガログ語 5名
		タイ語 7名		タイ語 7名
		英語 7名		英語 7名
計 39名		計 39名		計 78名

ニュースレターは、会員・医療通訳スタッフ・コーディネーター・派遣協力病院の方々に、奇数月にお届けしております。

例年にない厳しい暑さが続いております。皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

今年はスタッフが交代で夏休みをとることとし、事務局は夏期も平常どおりの業務を行います。

月曜日～金曜日 9:00～17:00

## 特集：医療通訳必携テキスト

MICかながわが医療通訳スタッフの方々に役に立てていただくことを目的に編集しました。

- 医療通訳としての心構え
- 通訳体験談
- 医療用語集（英語・スペイン語・ポルトガル語・中国語・コリア語・タイ語）

<医療用語集の内容>

- 1) 名称：人体部位／臓器／骨格／脳の構造／目の構造／耳の構造／鼻・喉の構造
- 2) 用語：医療でよく使われる用語350語余りを翻訳したものです

人体図等は患者さんに説明する時にも活用していただけるのではないのでしょうか。医療に関しては、辞書や参考書の充実している言語もあれば、逆にそういう資料の乏しい言語もあります。少しでも医療通訳スタッフの方々の不安を軽減できればという思いから作成いたしました。

この必携テキストは医療通訳スタッフの方々に配付されます。医療用語集の収録用語に関して、お気づきの点あるいはさらなるご要望がございましたら事務局までお知らせください。

### 脳の構造

スペイン語

あ	か
脳神経腫瘍	D tumor maligno
脳	D cerebro
脳	D cere
脳	D cerebro

### 鼻・喉の構造

ポルトガル語

あ	か
鼻	O nariz externa
鼻	O canal do nariz externo
鼻	A nariz

### 骨格

タイ語

あ	か
肩甲骨	กระดูกไหปลาร้า
肋骨	กระดูกซี่โครง
上腕骨	กระดูกต้นแขน

### 医療通訳の心構え

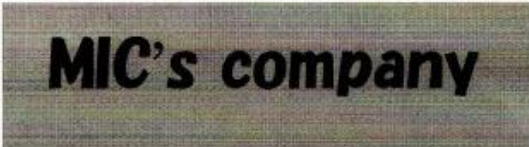
まだまだ制度の充実がおいつかず、個人のボランティア意識に支えられているのが医療通訳の現状です。しかし、ボランティアだから何でも良いというわけにはいきません。通訳をする方自身も心がけなければいけない点がいくつかあります。

また単に日本語と外国語の能力があれば良い、というものでもありません。「医療現場での通訳」には従うべきこと以上に大切なことがたくさんあります。ここでは特に「医療通訳」としての心構えについて説明します。

1. 正確な通訳が基本

日ごころから言葉の半信を繰り返して、正確な通訳ができるように努力することが必要です。一見簡単ではないような言葉の中に重要な部分の誤りが隠れていることもあります。特に主語、動詞、助詞を忠実に訳すことが原則です。そのためにも必要ですが、未知の語彙、動詞に注意して、メモを取ることも必要です。基本的な医療用語を覚えておくのはもちろん必要ですが、具体的な現場に役立つことも多くあります。わからないことはその場で質問をしても構いません。医師には専門用語をかみ砕いて説明してもらったり、文章を短く区切ってもらうなど、通訳しやすいようにしてもらったり、文章を短く区切ってもらうように頼みます。また、患者さんの話を聞きながら、文章ごとに区切ってもらうように頼みます。また、患者さんの話を聞きながら、文章ごとに区切ってもらうように頼みます。また、患者さんの話を聞きながら、文章ごとに区切ってもらうように頼みます。





～ MIC誕生のおゆみ ～



MICの派遣事業は多くの人に支えられています。今回は、医療通訳派遣システムの立ち上げに神奈川県県民部国際課の担当者として関わっていらした石渡さん、そしてMICの立ち上げに関わり現在も深いかかわりをもっておられる神奈川県社会福祉協議会の高橋さんに、当時の医療通訳を取り巻く状況やご苦労などを伺いました。

神奈川県 (前)国際課 石渡美枝子さん

●医療通訳派遣制度とのかかわり

県では、12年10月に外国籍県民かながわ会議から提言を受けたことをきっかけに、13年度に医療通訳制度検討委員会を設置し、医療通訳派遣のしくみづくりを始めました。医療関係者や外国籍県民、NGO、市町村など、いろいろな方のご意見をいただいて派遣システムの原型をつくり、平成14年8月にモデル事業を開始しました。私が直接かかわったのはこの頃です。関係者の方々にこの新しい試みを理解し参画してもらうため、MICのスタッフと一緒に説明に走り回ったことを今でもよく覚えています。

●モデル事業の実施

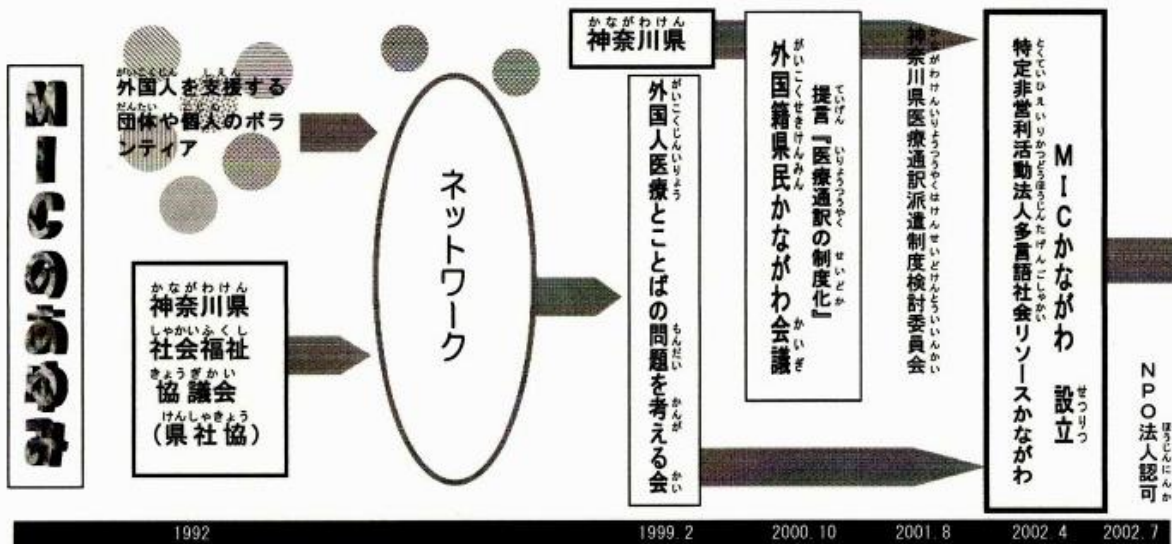
モデル事業は、医療通訳派遣のシステムづくりが目的だったため、約3ヶ月間試行して結果を検証したら、本格実施まで休止する予定でした。ところが、初めはあまり積極的ではなかった協力病院から、徐々に依頼が増えるようになりました。それは、この事業の必要性和有効性が認められたからだと思います。結局、周囲の強い要望により、モデル事業は14年度末まで続けられました。

●医療通訳派遣事業の将来

医療通訳派遣のシステムは、ほぼ完成したと思います。基金21の協働事業負担金は最長5年ですから、その間に費用負担の問題など残された課題に結論が出せるとよいのですが、難しい問題ですね。ただ、協力病院の姿勢が積極的になり依頼件数が増えたのは、医療通訳スタッフの方々の地道な努力があったからだと思います。実績→信頼→ニーズの増加という相乗効果の実現は、この事業の大きな成果だと思います。

●MICの将来

この事業の確立のためには、MICの自立化も大事なことだと思います。NPO法人が自立化するのとはとても大変だと思いますが、もっとMICの活動をPRして会員を増やしたり、自主事業を展開したりして収入を確保し、他のNPOとネットワークをつくるなどして、しっかりと組織づくりをしないとよいと思います。医療通訳制度を定着させるには、医療関係者に理解が必要としてもらうことが一番大きいと思いますので、医療機関へ積極的に働きかけることも大切だと思います。







●M I Cが生まれるまで

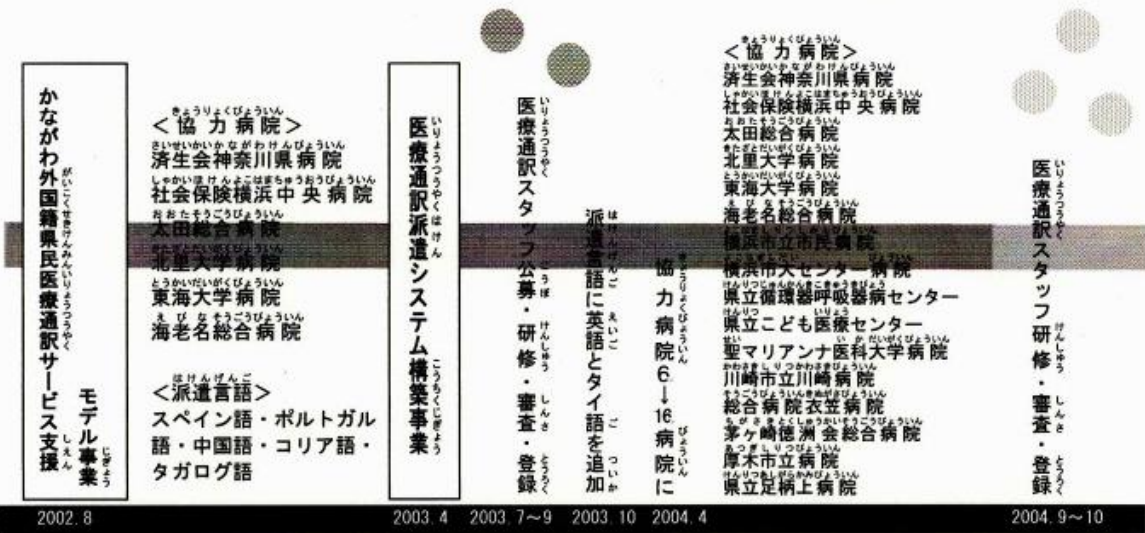
県社協は1992年県委託事業で福祉サービスのマニュアルを翻訳をしたのを皮切りに、翌年外国籍の方たちに  
対する地域での生活支援を研究する委員会を立ち上げました。ポラセン(\*)では外国籍の方に対応している  
ボランティアの研修を県委託事業として行い、委託終了後もそれは県社協独自の事業となりました。

何回か開いたシンポジウムで港町診療所とのつながりができました。大和市立病院の通訳さんやソナの会  
からも病院の中だけにはとどまらない通訳の大変さを聞き、そういう活動を実際に行っている人たちをサポート  
し、お互いが助け合えるような連絡会を作ることが社協でできるのではないかと出てきました。当時  
から医療の通訳は難しいからボランティアでできることではないと言われていましたが、現実には病院にかか  
っている外国人がいて、それをサポートするために個人でやっている人がいる、なのに医療は特別だとは言っ  
てられないのではないかと。港町や済生会などに相談して「危険性があるのは事実、でもそれを定期的に話し合  
うことで解決していけるのではないかと」ということでできあがったのが「外国人医療とことばの問題を考える会」  
です。そこでは学習会を開いたり成果を冊子にまとめたりということと一緒にやってきました。

組織を作ったどこかで一括してコーディネートして派遣をしようという話も出ました。ただ、どこでコーデ  
ィネートをするかということになった場合なかなか難しく、一方、研修ばかりやっているとどうするのという感  
じもありました。同じ頃、県の方では提言を受けてそのための委員会を作ることになり、こちらが今まで検討し  
てきたことと、県がやりたいことが重なるということで、県の事業としてやるという面も出てきました。県が  
直接コーディネートをするのは現実難しいので、実際に動くのは専門性を持ったスタッフというようなネット  
ワーク組織をつくり、そこが受け皿となって県とタイアップしてやっということになり、M I Cの誕生  
につながっていったわけです。( \*ボランティアセンターの略)

●M I Cの将来・可能性

通訳の人たちと、企画運営をしていく側の距離がもっと近づくといいなという気がします。通訳の人たちの  
個別の活動では支えきれないものを解決するためにM I Cの存在があります。通訳の人たちもM I C全体がどう  
なっているのかも見て考えてほしいし、外国籍の日本で暮らしている人自身が運営にもっと加わってもら  
いたいという希望があります。若い学生さんたちを交えて多文化共生について語り合い、わかってもらっ  
てもひとつの活動になるでしょうし、通訳派遣、翻訳やセミナー開講、そしてこれだけ外国籍の方が関わって  
いるのですから日本に住む外国人の暮らしそのものに関わる提言だって出せるのではないのでしょうか。関わって  
いる人たちがM I Cだけの財産ではなく日本社会の財産となって、その人たちがM I Cという場所を使ってい  
ろなことができるようになってくれたらと思います。





ニュースレターは、これまで会員・医療通訳スタッフ・コーディネーター・派遣協力病院の方々にお届けして参りましたが、2005年5月発行No.28からは、MIC かながわ会員および派遣協力病院だけにお届けいたします。ご承知おきますようお願い申し上げます。続けて受け取りたい方は、MIC かながわの会員にご加入ください。よろしくお願いたします。

今年のスギ花粉飛散量は平年の30倍という予報がずいぶん前から出され、戦々恐々とされていた方も多いのではないのでしょうか。すっかり国民病としての地位を築いてしまった感のある花粉症。花粉症患者の方にとっては5月連休明けくらいまではつらいですね。どうぞお大事に。

## 特集：外国人無料健康相談会

### 港町診療所 早川 寛 (MIC かながわ副理事長)

1月23日の日曜日、朝から鶴見保健所に外国人が詰めかける。横浜市衛生局と港町診療所をはじめとする、NGO、ボランティアが中心になって行う『外国人のための無料健康相談会』の会場だ。この日は、フィリピン、ミャンマー、ペルーなど15カ国127名が受診した。

このように、行政とNGOが共同して行う外国人健診の始まりは、94年3月の川崎市との取り組みから。更に、その始まりをたどると港町診療所での外国人健診にたどり着く。

90年を前後として、外国人の患者が増えてきた港町診療所では、早期発見早期治療につながるようにと91年7月健康診断を実施した。内容は胸部X線、血圧測定、尿検査、血液検査、診察など、40歳以上を対象に費用は1,000円。この時の受診者は29人。91年11月MF-MASHが発足以来、MF-MASH(※)会員のための健診は40回を数える。

一方、結核のリスクが高く、病状が重くなってから医療機関にたどり着くケースにしばしば出会う。そのような状況を考え、地域でより身近に医療につなげるためにも、外国人のコミュニティがあるところで健診を行うのが望ましいと考えた。県内の諸団体の連名での要請に、最初に反応したのが川崎市。94年3月カトリック鹿島田教会にレントゲン車を派遣、港町診療所が中心になって無料の健診を実施した。その後横浜市、神奈川県も続いた。

行政的な位置づけは結核健診。それにいわば味付けをして私たちが行う。会場は外国人が多く集まる教会が多いが、鶴見のように保健所もある。2004年度の実績は、県内6カ所で524人が受診。幸い入院を必要とするような結核の方はいなかったが、陳旧性結核や高血圧や糖尿病などの生活習慣病で要注意の方はしばしば見られる。

健康をより確かなものにするために、日曜日に行きやすい場所で行政と行う無料の健康診断はこれからも必要。言葉の点でもMICの皆さんの協力が欠かせない。

※ MF-MASH(港町健康互助会)とは……  
会員は毎月2,000円の会費を払い、港町診療所など3カ所で3割負担の医療費で治療を受けることができる。

### ～1月23日鶴見保健福祉センターでの一日～

9時スタッフ集合 → 全体打ち合わせ → 受付・問診票記入会場・各検査会場に分かれて各々準備開始 → 10時健診開始 → 3時受付終了 → 後かたづけ → 反省会・解散  
通訳ボランティアとしてMICの医療通訳スタッフも9名参加。問診票記入会場での通訳や、各検査会場での通訳として手伝った。問診票は15ヶ国語で用意されている。



↑ 受付準備風景

通訳が入った診察→



↑ 終了。参加スタッフによる反省会。



### 外国人無料健康相談会・2004年度実績

年月	会場	受診者数
2004. 5月	貝塚カトリック教会	87人
2004. 9月	横濱華僑教会	161人
2004. 10月	大和カトリック教会	89人
2004. 11月	藤沢カトリック教会	41人
2005. 1月	鶴見保健福祉センター	126人
2005. 2月	平塚保健福祉事務所	19人
計6回		524人

## かながわ医療通訳セミナー2005

30/1/2005 13:00-15:00 神奈川県社会福祉会館4階 第1・第2研修室  
～ 医療通訳に必要なネットワークの構築 ～

### 事例報告1 シアトル市のワンストップサービス(\*): ACRS(Asian Counseling & Referral Service)について

\*ワンストップサービス=1ヶ所に相談を持ち込めば、そこですべてに対応できる形のサービス  
報告者 Dave Bockmann (元 ACRS スタッフ)・西村裕子 (駒澤大学助教授)

- ①重層的ワンストップサービス
- ②クライアント1人1人を包括的にとらえて受け入れ、自立を支援するサービス
- ③コミュニティに根ざした多文化・多言語サービス
- ④相談は「介入」まで

### 事例報告2 横浜いのちの電話における相談員研修について 報告者 原田晶子 (横浜いのちの電話 理事)

いのちの電話はボランティアによる自殺予防の電話相談として1971年に東京でスタート。現在は50センター開局。横浜では1980年にスタートし、93年には外国語相談(ポルトガル語とスペイン語)も開設。

- 相談員の養成研修 適性検査 → 面接 → 選考 → 養成 → 選考
- 研修の中で最も重視されること ・守秘義務 ・自己体験学習

### 事例報告3 東京都相談ネットワーク: 都内リレー専門家相談会について

報告者 薦田庸子 (武蔵野市国際交流協会 MIA)

- MIAの相談ネットワーク → ボランティアと弁護士など専門家がタイアップして「外国人総合相談会」を開催。
- 「MIA相談ネットワーク」から「都内リレー専門家相談会」へ
- MIA相談ネットワークの活動  
・外国人相談 ・外国語情報提供 (多言語相談窓口、語学ボランティアプロジェクト) ・通訳 ・翻訳
- MIA相談ネットワークの登録メンバー ・専門家ボランティア(7分野20名) ・語学ボランティア(20言語102名)
- MIA相談ネットワークの課題

### 事例報告4 教育相談について

報告者 小山紳一郎 (神奈川県国際交流協会 KIA)

- KIAの事業
- KIAの教育相談の内容  
・国際理解教育に関する相談(教員やNGO向け) ・外国人児童生徒に関わる相談(教員、NGO、外国人父母向け)
- 教育相談の方法 ・直接対応 ・仲介
- 中間支援組織としての役割
- 教育相談と医療相談(心理・精神医学の分野)の連携

### 事例報告5 米国東海岸における医療通訳の提供について

報告者 西村明夫

- 地域特性: 住民の52%がヒスパニック、17%がアジア系
- 医療通訳の提供方法: ①病院のLanguage Bank ②外部企業による電話同時通訳サービス  
③民間企業に通訳派遣依頼
- 医療通訳の課題 ・職員による通訳の兼務 ・医療通訳に従事する職員に対する研修

詳しい記録をご欄になりたい方は MIC事務局までご連絡ください。

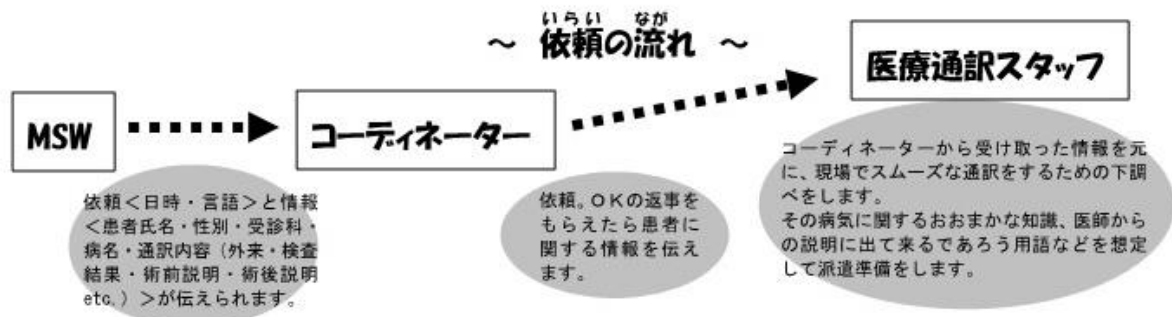


ニュースレターは、MIC かながわ会員および派遣協力病院にお届けいたしております。  
去る5月5日、闘病中でありましたMIC かながわ理事長 北村真佐子氏が治療の甲斐なく他界されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 特集：MICの医療通訳はどのような診療現場に対応しているの？ No.1

具合が悪い、病院にいて治療を受けたい、でも、(お医者さんの言うことが理解できるかしら)(この症状をお医者さんにきちんと伝えられるかしら)などことばの面で不安がある、そういう外国籍の方をサポートしているのが医療通訳派遣事業です。

『助成金』という限りある財源を使つての派遣の場合、すべての診療現場に通訳を派遣できるわけではありません。必要に応じて病院のMSW(メディカル・ソーシャル・ワーカー)がコーディネーターブースに派遣の依頼をし、コーディネーターから医療通訳スタッフへとつながります。



では、実際医療通訳スタッフはどのような病気に対応しているのでしょうか。2005年3月、現任の医療通訳スタッフに『対応した病気』に関するアンケートをとりました。115名(うち41名は2004年12月からの新人)中、32名からの回収結果を今号と次号にわたって掲載します。回答の中にはMICの事業以外での対応事例も若干含まれていると思われる。

### <内科 ないか>

- 循環器系…ホジキン病、リンパ芽球性白血病、高脂血症、解離性大動脈瘤、血球貧血症候群、悪性貧血、痛風、先天性ファロー四徴症、心筋梗塞、シャーガス病
- 消化器系…胆石、胃がん、B型肝炎、C型肝炎、腸重積、胃炎、腸炎、食道炎、逆流性食道炎、直腸がん、胃潰瘍、腸ポリープ、腸閉塞、クローン病
- 呼吸器系…喘息、睡眠時無呼吸症候群、喉頭蓋炎、扁桃腺炎、呼吸不全、気管支炎、肺炎、肺水腫、肺気腫、オウム病、インフルエンザ
- 泌尿器系…尿管結石、腎結石、膀胱炎、尿道炎、ネフローゼ症候群
- 内分泌系…甲状腺機能障害、糖尿病、シェーグレン症候群
- 免疫系…アレルギー

### <心療内科・精神科 しんりょうないか・せいしんか>

適応不能症、アルコール依存症、統合失調症、そううつ病、円形脱毛症、うつ病

### <感染症科 かんせんしょうか>

エイズ、肺結核、梅毒、クラミジア、カンジダ症 その他の診療科については、次号(2005 July)に。

ニュースレターは、MICかながわ会員および派遣協力病院にお届けいたしております。  
6月下旬より公募による医療通訳スタッフ2005年度募集が始まりました。今年度は募集言語は10言語です。7月25日締切で同日朝時点での応募者数はスペイン語18名、ポルトガル語3名、中国語23名、コリア語8名、タガログ語2名、英語50名、タイ語8名、ベトナム語0名、カンボジア語2名、ラオス語1名となりました。

## 特集：MICの医療通訳はどのような診療現場に対応しているの？ No.2

前号に引き続き、MICの医療通訳スタッフが対応した経験のある病気についてのアンケート回収結果を紹介いたします。  
115名(うち41名は2004年12月からの新人)中、32名からの回収結果です。

(回答の中にはMICの事業以外での対応事例も若干含まれていると思われる)

### <産婦人科 さんぶじんか>

妊婦健診、妊娠中毒症、子宮筋腫、子宮頸がん、子宮内膜増殖症、帝王切開、人工妊娠中絶、子宮外妊娠、子宮内膜症、卵巣炎、卵巣嚢腫、不妊症、更年期障害、胎状奇胎、胎盤早期剥離

### <泌尿器科 ひにょうきか> 無精子症、睾丸打撲、包茎、前立腺肥大

### <外科 げか> 乳がん、痔、乳腺炎、胃がん、静脈瘤

### <小児科 しょうにか>

乳幼児健診、予防接種、イチゴ状血管腫、水痘(みずぼうそう)、麻疹(はしか)、突発性発疹、未熟児、動脈管開存症、小児包茎、ダウン症、鎖肛

### <整形外科 せいけいげか>

急性腰痛症(ぎっくり腰)、漏斗胸、椎間板ヘルニア、脊椎分離症、神経鞘腫、顎関節症、脊椎炎、若年性関節リウマチ、リウマチ、大腿骨骨頭壊死、二分脊椎、踵骨軟骨損傷、腱鞘炎、バネ指

### <脳神経外科 のうしんけいげか>

難治てんかん、水頭症、脳梗塞、脳性まひ、脳腫瘍、脳塞栓、脳挫傷、脊椎小脳変性症、ヘルペス脳炎後遺症、高次脳機能障害、ジストニア、偏頭痛、くも膜下出血、脊髓空洞症

### <耳鼻科 じびか> 中耳炎、副鼻腔炎、難聴、骨伝導による補聴器作製、鼻たけ

### <眼科 がんか>

白内障、結膜炎、ぶどう膜炎、緑内障、外傷性眼圧低下症、散粒腫、麦粒腫、内斜視、糖尿病性網膜症

### <心療内科・精神科 しんりょうないか・せいしんか>

適応不能症、アルコール依存症、統合失調症、そううつ病、円形脱毛症、自閉症、うつ病

### <皮膚科 ひふか>

巻爪、乳児皮膚疾患、アトピー性皮膚炎、水虫、カンジダ性皮膚炎、レックリングハウゼン病(神経線維腫症)

### <その他>

労災保険の適用について、公費助成制度申請に関する聞き取り、医療費の支払いについて、諸説明(検査・入院・手術・退院後の生活)





ニュースレターは、MICかながわ会員にお届けしております。

## 特集：患者アンケート集計結果報告



MICかながわと神奈川県が協働で行っている『医療通訳派遣システム構築事業』において、2005年12月～2006年1月の2ヶ月間、利用者である患者側の実態とニーズを把握する目的で、派遣協力病院の協力を得て患者アンケートを行った。回収目標は200件であったが、実際回収された回答は90件であった。言語によっては回収率が低いため、言語的特徴を分析することは難しい。

### ＝ まとめ ＝

1. 本医療通訳サービスに対して調査対象者全員が高い満足感を持っている。
2. 医療通訳に対するニーズは高い。
3. 医療通訳が存在することにより、受診者が適切な保健医療行動をとりやすい。
4. インフォームドコンセントに基づいた適切な医療、受診者が満足できる医療のためにはどの使用言語であっても医療通訳の存在は欠かせない。
5. 対象者の年齢や滞日年数には明確な特徴はなく、医療通訳は年齢や滞日年数に関わらず必要である。
6. 外国人が医療通訳に対して支払える費用は1回につき1000円程度と思われた。
7. 自分の希望よりも高い費用を支払ってでも医療通訳を利用したいと考えている外国人も約4割を占めていることから、外国人自身が医療通訳に対する費用対効果が高いと感じている。
8. 希少言語や「他の言語でまかなう」しかないような言語が母語である場合の医療通訳体制整備が課題である。

### 患者アンケート集計結果

質問項目	言語	スペイン	ポルトガル	中国	コリア	韓国	タイ	英	小計	合計
回収回答数 (人)		42	12	12	3	4	3	14		90
医療通訳サービスについて	利用した感想									
	満足	40	12	12	2	4	3	13	86	90
	まあまあ満足	2	-	-	1	-	-	1	4	
医師やその他の病院スタッフの話したことが	よくわかった	42	11	9	3	3	-	11	79	90
	だいたいわかった	-	1	3	-	1	2	2	9	
	わからなかった	-	-	-	-	-	1	-	1	
	無回答	-	-	-	-	-	-	1	1	
言いたいことや質問したいことを医療従事者に	充分伝えられた	39	9	12	2	2	2	12	78	90
	だいたい伝えられた	1	1	-	-	1	1	1	5	
	伝えられなかった	-	-	-	-	1※1	-	1※2	2	
	どちらともいえない	-	-	-	1	-	-	-	1	
	無回答	2	2	-	-	-	-	-	4	

※1 緊張して伝えるのを忘れた

※2 母語がフランス語だから

ニュースレターは、MICかながわ会員にお届けしております。

ニュースレター No.41 July 2007

7月には珍しい台風による被害のニュースが列島を駆け巡った直後に、中越での地震。地震の翌日は県国際課とMICかながわによる一般通訳研修『災害時の外国籍県民支援講座』が開催され、そのタイミングに驚くとともに、研修がより現実味を帯びたものとなりました。

被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

## 特集：在住外国人医療サービスに関する調査研究報告書

MICが通訳を派遣している病院・医療従事者へのアンケート、およびMICかながわ医療通訳スタッフへのアンケートをまとめたもので、興味深い結果が出ています。会員の方へは無償でお送りしておりますので、ご希望の方はMICかながわ事務局までご連絡ください。(先着順)

### = 報告書内容 =

#### 1. 医療従事者アンケート調査

対象：医師、看護師、助産師、MSW (21病院、回答137名)

質問内容は主に医療通訳派遣制度に関する認知度、医療通訳スタッフやコーディネーターに対する満足度を問うような内容となっている。

医療通訳スタッフに関する満足度は非常に高いものであり、この通訳派遣制度がなくなった場合の「たいへん困る」という回答は医師・看護師では夫々80%を超え、MSWでは90%以上に及んだ。病院が外国人患者の対応で困る場面として挙げた主なものは「初診時の対応」「重病の告知等」とあり、現在MICは初診時への派遣を行っていないので、今後の課題となるだろう。

改善を望む点としては、「緊急の場合も派遣してほしい」「電話通訳も対応してほしい」「病院に常駐してほしい」という回答が多かった。

#### 2. 医療通訳スタッフアンケート調査

対象：MICかながわ医療通訳スタッフ (回答75名)

質問内容は、主に病院側の通訳受け入れ姿勢に関する感想、通訳個人のボランティアに関する考えなど。医師に対して対応の良さを感じる通訳が90%に及んでいる。対応の悪さも回答としてあがってきてはいるが、対応が悪いと感じた経験頻度はかなり低い。

ボランティアに関する考え方。☆困っている人を助けたい。☆レベルの高さを求められる医療分野での活動がボランティアの領域であり続けていいのだろうか。☆医療従事者の意識改革と社会的認知が求められる etc.

#### 3. 今後の課題

- 財源…基金21終了後の費用拠出先の問題。
- 医療通訳スタッフのレベル維持と向上…「訓練された医療通訳」ということに対する信頼度が格段に高い。
- 医療従事者への働きかけ…医療現場での通訳受け入れ経験が蓄積されていき、受け入れがスムーズになっていることが感じられる。さらなる普及啓発活動が必要。
- 医療通訳スタッフの身分…ボランティアの域は超えている、しかしプロではない。今後に向けての検討が必要。



ニュースレターは、MICかながわ会員にお届けしております。 **ニュースレター No.44 January 2008**  
皆様つつがなく新しい年をお迎えでしょうか。本年は神奈川県からの助成金である基金21が終了し、MICかながわにとって大きな転換の年となります。会員の皆様のご理解、ご協力、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

# 今年もよろしくお願いたします

## 事務局



樋口由美子(事務局ボランティア) 田場ミラグロス 睦地未央  
知念パメラ 松延恵

### <事務局の業務、担当> 平日9:00~17:00

- 事務局長：松延恵  
統括、税務、労務、経理責任者、企画、要するに何でも屋
- 常勤スタッフ：睦地未央  
事務全般 何でもこなす有能で優しい聞き上手・気配り上手な職員
- パートスタッフ：田場ミラグロス  
派遣実績の集計・報償金支払・翻訳担当
- パートスタッフ：知念パメラ  
派遣実績の集計・報償金支払

外国籍患者等からの相談への対応、病院からのさまざまな相談への対応、協力病院以外の病院からの通訳派遣受付、研修や講座などイベント企画運営、冊子頒布



MICかながわ事務局とコーディネーターブースから、新年のご挨拶を申し上げます。

登録通訳スタッフと直接関係のある事務局とコーディネーターブースの業務について紹介いたします。事務局に連絡する内容、ブースに連絡する内容、それぞれ違いがありますのでご確認ください。

### <コーディネーターブースの業務> 平日9:00~12:00 13:00~16:00

- 県事業協力病院からの派遣依頼受付/医療通訳スタッフへの依頼/病院への連絡
- 県協力病院以外からの派遣に対する医療通訳スタッフへの依頼/病院への連絡
- 一般通訳事業派遣依頼受付/通訳スタッフへ依頼/依頼元へ連絡
- 派遣に関する管理  
(誰がいつどこに通訳に行く、という情報はコーディネーターブースで一括管理をしています。事務局に問い合わせても事務局では把握していないこともありますので、派遣に関してはブースにお問い合わせください)
- 通訳スタッフや病院MSWからの相談に対応  
昼休み時間や業務終了時刻(16時)過ぎてから緊急連絡や依頼メッセージに対する返事したいときは、留守番電話のメッセージが流れても「〇〇語通訳の△△です」と声を出してください。コーディネーターがもしまだ席の近くにいれば電話をとります。

### 一月十二日コーディネーター研修にて



細野紀代子 田中圭 後岡和代 松延恵 三木紅虹 佐野知子  
内藤まゆみ 岩本弥生 小島素子 岩元陽子 古山季玲  
(欠席：森田佐知子 楊筱蓉) 2007年度登録13名





自習するときの教材としてお役立てください。  
 医師と患者のやりとりをスムーズに訳すことができますか。

**虫垂炎手術前の説明**（前号の続きです）

**D(医師)：**一応、術後の合併症についてご説明しておきます。多く見られるのは、皮膚の傷の治りが遅れることです。虫垂の炎症が手術中に皮膚の傷に及んでしまい、腫んでしまうと起こります。その場合、通常通り1週間で退院はできますが、傷の消毒のために外来に10日位通わないといけなんでしょう。また、脊髄麻酔の後すぐ歩いた人は、しばらく頭痛に悩まされることがあります。まれに起こる合併症として、虫垂を取った後の大腸縫合部がうまく閉鎖できないで生じる縫合不全があります。その場合、縫合が閉鎖するまで食事が出来ず、1～2ヶ月程度の入院が必要になりますが、この合併症はめったにありません。できるだけ早く元気になれるよう私たちも気をつけて観察をしていきますから、何か心配なことや不安なことが出てきたら遠慮しないで言ってくださいね。

**P(患者)：**ありがとう。少し気持ちが楽になりました。

**医療用語：**合併症、炎症、腫む、消毒、脊髄麻酔、縫合部、縫合不全、観察

げんごべつじしゅべんせうかいじょうほう  
**言語別自主勉強会情報**

言語グループ	日時	会場	内容
全言語対象	2/16(土)13:00~15:00	港町診療所2F会議室	蟹沢成好先生講義『幹細胞について』
スペイン語	1/12(土)13:00~15:00	平沼記念レストハウス	
	2/16(土)15:00~17:00	港町診療所2F会議室	
	原則的に毎月第2土曜日の午後 MIC かながわ事務局にて開催		
中国語	2/16(土)15:00~17:00	港町診療所2F会議室	
ポルトガル語	2/2(土)10:00~	県民センター #706	表現しにくいことばの確認・事例シェア
英語	1/26(土)9:30~13:00	港町診療所2F会議室	不妊症
	3/29(土)午前中	県民センター	薬理
タイ語	1/19(土)13:00~16:30	MIC かながわ事務局	事例シェア他
	2/16(土)15:00~17:00	港町診療所2F会議室	事例シェア他
	原則的に毎月第3土曜日の午後 MIC かながわ事務局にて開催		



いりょうつうやく  
**医療通訳セミナー**

2月2日(土)13:00~17:00  
 神奈川県社会福祉会館4階  
 第3・4研修室

<内容> **『医療通訳の明日』**

**【基調報告】**

「医療通訳派遣システム構築事業の成果と今後の課題」

MIC かながわ理事 沢田貴志（港町診療所所長）

**【パネルディスカッション】**

芦川和高氏 神奈川県医師会理事・大船中央病院附属診療所所長

坪田由紀子氏 医療ソーシャルワーカー・聖マリアナ医科大学病院

海老塚一浩氏（社）横浜市聴覚障害者協会理事

グエン・ティ・ミン・タオ氏 外国籍県民かながわ会議委員・

医療通訳スタッフ

コーディネーター：

MIC かながわ副理事長 松野勝民（済生会神奈川県病院MSW）

**【総括】『医療通訳の明日』**

MIC かながわ理事長 鶴田光子（静岡英和学院大学教授）

ニュースレターは、MIC かながわ会員にお届けしております。

ニュースレター No.45 March 2008

MIC かながわが、「認定NPO法人」として国税庁より認定を受けました。  
認定NPO法人になると…MIC かながわに寄付を行った個人あるいは法人は  
税的控除を受けることができます。



## 認定NPO法人とは・・・

### === 認定が下りるまでの経緯 ===

財政的に非常に苦しいことから、国税庁の認定をとって寄付をもっと多く集めたいと思い立ったのが、かれこれ2年以上前のこと。2003年度に(財)自治体国際化協会「専門通訳ボランティア研修プログラム」作成担当をしてくださった金子葉子さんに相談したところ、認定手続きをボランティアで引き受けてくださいました。それからが書類とパソコンとの格闘の日々。なにしろ専門家としては税理士しかできない仕事です。自もくらむような大量の文字と数字と戦いながら、国税庁に電話で問い合わせ猛攻撃をかけ、やっと書類が整う目途がたったのは約1年後のことでした。

国税庁にフォルダいっぱい書類を持って相談に行くと、国税庁の担当者は紙を一枚一枚めくって、覗めまわすようにチェックを入れ、緊張の時間が流れました。そして第一声は「よくここまで頑張りましたねえ～」と感心しきり。思わずホッと安堵のため息が漏れました。そして2007年3月5日に申請。ここで金子さんは一区切りして役割を終えられ、あとは事務局松延の担当です。

約2か月後に国税庁の担当者がMIC事務所に帳簿検査に訪れました。2日間に渡って大量の帳簿類をチェックした挙句の一言「よく無駄遣いしないで頑張ってるっしやいますねえ～」に、ちょっと複雑な気持ちを抱いた事務局スタッフでした。その担当者は6月に異動され、それからまた待つこと数か月、長い沈黙に「もうダメか」とあきらめムードが漂いました。が、10月になってからふたたび国税庁の新しい担当者から電話の嵐が始まりました。書類の不備の指摘と差し替え書類の提出の依頼が矢継ぎ早にあり、こんなに待たせておいて今さら何を！と、怒りの小爆発を起こしながらも対応に追われた日々。そして3月13日に「認定が下りました」と電話連絡をいただきました。

この認定申請ができたのは、ひとえに金子葉子さんのすばらしいお働きのおかげです。感謝のことばもございません。

[事務局長：松延恵]



国税庁の認定が下りたとのこと、おめでとうございます。多くの皆様のご尽力によりこの日が迎えられ、心より祝福いたします。今後のますますのご発展をお祈り申し上げます。  
(金子葉子)

### === 認定NPO法人とは ===

(制度の概要) 国税庁ホームページ <http://www.nta.go.jp/>

認定NPO法人への寄付は、税制上の特例措置を受けることができます。つまり、課税の対象になりません。

- 個人が行った寄付……その人のMICへの寄付総額から5,000円を引いた金額を、その年のその人の総所得金額から控除することができます。
- 法人が行った寄付……法人がMICに対して支出した寄付金は、当該損金算入限度額の範囲内で損金算入をすることができます。
- 相続財産等の寄付……相続や遺贈によって財産を取得した人がMICにたいして寄付をしたときは、寄付をした財産の価額は相続税の課税価格の計算の基礎には算入されません。従って、その寄付をした財産には相続税は課税されません。



**<認定NPO法人として認定されるためには>**

認定申請書の提出があったNPOのうち、運営組織および事業活動が適正であること並びに公益の増進に資することについて一定の要件を満たすものを、国税庁が認定します。

**<認定の有効期間>**

国税庁長官が認定の際に定めた日から2年間。※今回は2008年4月1日～2010年3月31日

**<特例措置を受けるための手続き>**

- 個人……寄付をした日を含む年分の確定申告の際に、寄付金の明細書と寄付金額および受領年月日などについて認定NPO法人が証した書類を添付します。
- 法人……寄付をした日を含む事業年度の確定申告の際に、寄付金額の額の合計額に含まれない認定NPO法人に対する寄付金の記載をし、かつ認定NPO法人に対する寄付金の明細を添付します。
- 相続人……相続税の申告書提出の際に、特例措置適用の旨を記載し、認定NPO法人が証した寄付財産の使用目的等に関する書類を添付します。この特例措置を受けるには認定NPOへの寄付を相続税の申告期限までに  
行う必要があります。

**=== お問い合わせ ===**

寄付をなさる方は、かならず住所もお知らせください。また国税庁規定事項が記載された領収書をお渡し（送付）いたしますので、必ずお受け取りください。確定申告時にこの領収書が必要です。領収書の再発行はできません。銀行や郵便局で振り込まれた方は、領収書が届くまで振込明細票を大切に保管してください。領収書の宛名はお一人様のみになります。連名宛の領収書は発行できませんので、複数で一緒にご寄付の場合は、そのうちのお一人様のみ宛の領収書となります。以上、ご了承ください。

どうぞよろしくおねがいいたします。

**MIC事務局ボランティア**  
**アンヘル・バルガスさんの腎臓移植に向けて**  
**ご支援をお願いします。**

**グラン・パリジャーダ・デポルティーバ・ソリダリア**  
**(スポーツ & パーベキュー)**  
**-腎臓移植の実現を助けよう-**

**スポーツ観戦と美味しいパーベキュー！**  
**楽しい一日を過ごしましょう！！**

日付 4月6日(日)  
時間 午前10時  
場所 多摩川河川敷(京急大師線東門前駅より徒歩10分)  
料金 1000円  
お問合せ電話番号 080-5006-2020 044-272-9503  
e-mail angel@saucou.net

**2008年度**

**MIC かながわ公開講座 第1期予定**

近日中にホームページで募集を開始します

参加費：各2万円全10回(英語⑤は別途教材費あり)

**<英語>**

- ① 医療通訳【基礎】 午前コース  
5月12日～7月14日  
毎週月曜日 10:30～12:00  
港湾労働者福祉センター(予定)
- ② 医療通訳【基礎】 午後コース  
5月12日～7月14日  
毎週月曜日 13:30～15:00  
港湾労働者福祉センター(予定)
- ③ 医療通訳【中級】 午前コース  
5月8日～7月10日  
毎週木曜日 10:30～12:00  
港湾労働者福祉センター(予定)
- ④ 医療通訳【中級】 夜間コース  
5月13日～7月15日  
毎週火曜日 18:30～20:00  
MIC かながわ事務所
- ⑤ 医療従事者向け初級英会話  
5月8日～7月10日  
毎週木曜日 19:30～21:00  
MIC かながわ事務所

**<スペイン語>**

- ① 医療通訳【基礎】  
5月9日～7月11日  
毎週金曜日 18:30～20:00  
MIC かながわ事務所
- ② 医療通訳【中級】  
5月14日～7月16日  
毎週水曜日 18:30～20:00  
MIC かながわ事務所



ニュースレター No.46 June 2008

MICかながわ

特定非営利活動法人  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
横浜市神奈川区鶴屋町3-30-1  
農機会館503

Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

2008年度より、ニュースレターは『虹』という名称で、6月・9月・12月・3月発行の季刊紙として、MICかながわ会員にお届けします。MICが日本に住む外国籍の方たちへの『ことばのかけ橋』『文化のかけ橋』となることを願って名付けました。

## 2008年度からの医療通訳派遣システム

2003年度から2007年度の5年間、神奈川県と協働で行う『医療通訳派遣システム構築事業』に関する費用（医療通訳スタッフやコーディネーターに支払う報償金や研修費用等）は、『かながわボランティア基金21』助成金から賄われておりました。『かながわボランティア基金21』助成最終年の2007年度、県事業の協力病院17病院は1件（3時間毎）につき病院が1,000円を負担するという形で対応しました。

そして『かながわボランティア基金21』が終了した2008年度、医療通訳派遣における通訳報償金の拠出元は大きく変わりました。

### <神奈川県との事業における協定医療機関（17病院）について>

●医療通訳スタッフ報償金 1件（3時間毎）3,000円

#### ◎ 3,000円全額病院負担

済生会神奈川県病院	済生会横浜市東部病院
横浜立市民病院	横浜中央病院
横浜市大センター病院	県立循環器呼吸器病センター
県立こども医療センター	聖マリアンナ医科大学病院
総合病院衣笠病院	茅ヶ崎徳洲会総合病院
県立足柄上病院	川崎市立病院

#### ◎ 2,000円病院+1,000円患者負担

太田総合病院	東海大学病院
北里大学病院	厚木市立病院
海老名総合病院	

●コーディネーター報償金 半日（3時間）3,000円

県の予算から充当

●養成研修・現任研修費

県の予算から充当 + MICかながわが負担

●事業全体を支える費用

MICかながわが負担

次ページに続く



せんきがい いりょうきかん  
<前記以外の医療機関について>

はけんかのう いりょうきかん  
■ 派遣可能な医療機関

……MIC と覚書を取り交わした医療機関

※ 通訳料が全額患者負担であっても、覚書の取り交わしを拒否する医療機関に対して、MIC は通訳を派遣することはできません。

いりょうつうやく ほうしょうきん  
■ 医療通訳スタッフ報償金

……病院により異なる。病院または患者が全額負担、あるいはケースにより折半等

※ 2009年度以降は、原則、神奈川県との協働事業に準じた医療通訳スタッフ報償金負担方法（＝病院が全額負担または患者負担がある場合上限を1,000円とする）で派遣を開始する予定







ニュースレター No.50 March, 2009  
MICかながわ

特定非営利活動法人  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
横浜市神奈川区鶴屋町3-30-1  
農機館503  
Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

ニュースレターは6月・9月・12月・3月発行の季刊紙として、MICかながわ会員にお届けします。

ニュースレター「華の五十代」へ！！

理事長 鶴田光子

ニュースレターが50号発刊となったとのこと、おめでとうございます。  
50代は華と実力を備えた素敵なおとな世代です。これからはますます充実した内容で私達読者を楽しませてください。

何よりも、何も無いところから第一号を生み出し、休むことなく地道に50号まで発行しつづけたボランティアの皆さん、なかでも内藤まゆみさんに敬意を表し、深く感謝いたします。さらにこの間、内藤さんを支え協力を惜しまなかった古山季玲さん、仁木久恵さんにもあわせて感謝の意を表したいと思います。

新型インフルエンザ電話相談センター設置

5月16日(土)、日本で初めての新型インフルエンザ感染に関するニュースが報道されました。神奈川県では、県内に多く住む外国籍県民のために電話相談センターを設置することが急ぎ検討されMICかながわがその業務を受託することとなりました。

5月末にはスペイン語・ポルトガル語・英語での相談電話が設置され、6月4日からはその3言語に加え、中国語、韓国朝鮮語、計5言語での電話相談受付が開始されました。現在、かながわ県民サポートセンターにほど近いMICかながわ事務局の隣室で電話相談センターの業務を行っています。

<受付時間>

月曜日～金曜日  
8:30～17:00  
11月までの予定

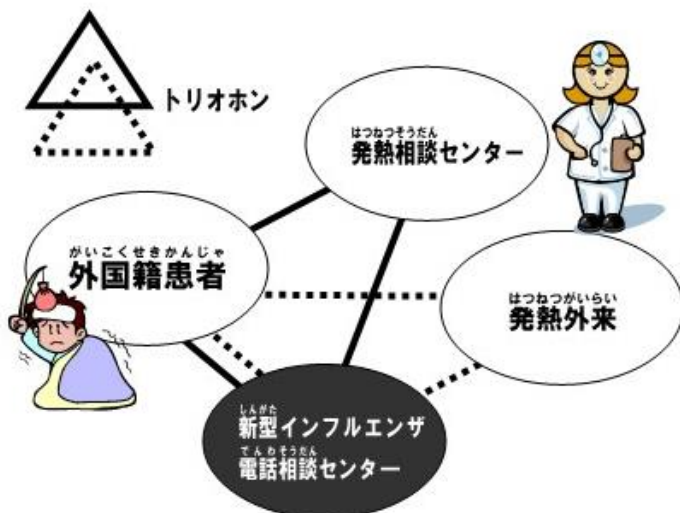


<言語別相談電話番号>

英語	045-314-9917
スペイン語	045-314-9918
ポルトガル語	045-314-9919
中国語	045-314-9927
韓国朝鮮語	045-314-9928

<電話相談センター業務内容>

外国籍県民等から相談の電話があった場合、必要事項を聞き取り、最寄りの市町村に設けられている発熱相談センターに電話をつなぎます。トリオホンというシステムを使い、外国人相談者・発熱相談センター・新型インフルエンザ電話相談センターの三者間で話をします。トリオホンによる発熱外来との受診時通訳も想定されています。



『多文化主義国家・カナダの医療通訳サービス』 第2回 (2回連載)  
 <西村明夫 (MIC かながわ・プログラムアドバイザー) >



ブリッジ・コミュニティ・ヘルス・クリニックにて  
 右から2番目が筆者

(4) ブリッジ・コミュニティ・ヘルス・クリニック  
 (Bridge Community Health Clinic)

医療通訳に関する海外事例では規模の大きな病院が調査対象になることが多いが、ここでは、角度を変えて小規模な医療機関に注目して多言語コミュニケーションの実態を考察した。

このクリニックは、VGH (バンクーバー総合病院) から東へ1kmほどのオンタリオ・ストリート (ストリートと言っても路地に近い。) にあり、Raven Song Community Health Centre という地区保健所のピルの一角に入居している難民専用の診療所である。

【クリニックの概要】

カナダに来る難民は、50%がオンタリオ州、25%がBC (British Columbia、以後BC) 州に定住し、BC州では難民の90%がバンクーバーに住んでいる。このクリニックに来院する難民の出身国は、国際情勢によっても影響するが、現在 (2006年10月時点) はアフガニスタンとスーダンが多いという。来院者数は月間500~600人、通訳件数は年間で約5,000件になる。

このクリニックの規定では、難民として定住して最初の1~2年をここで診療し、その後、地域の医療機関へ移すことにしている。難民も定住して1年以上経過すれば、ある程度、英語でのコミュニケーションが可能になるという想定でこうしたルールにしているようだ。しかし実際は、医師不足の問題もあり、こうした患者を受け入れる地域の医師 (GP) を探すのは簡単ではない。このクリニックには専門の医療通訳者がいるため、「ここが好きになって来たがる人も多い」 (同クリニック医師) という。

ここでは、メンタルヘルスも含めて、すべての病気 (診療科目) を診察し、産婦人科については、妊婦健診はこのクリニックで実施し、出産は子ども・女性病院で行うことにしている。また、10年以上難民キャンプで過ごした人たちも多く、苦しい体験のため、ほとんどの場合、うつ病を患っているという。

【医療通訳の状況】

医療における多言語コミュニケーションの問題では、このクリニックで必要とされる言語は70言語に及び、その対応としては、週3日、アフガニスタン難民の通訳者が1人常駐し、また、医師と看護師2人でベトナム語、フランス語、スペイン語をカバーしているという。患者数が多いスーダン難民は、英語を話せる人が多いとのことで、あまり問題ないようだ。

通訳者のレベルとしては、基本的に医療通訳者には、脾臓や肝臓の位置など身体器官や医療の用語を学んでおいてほしいが、患者と医師の言うことを通訳してくれればいいのだから医療の専門知識はあまり必要ないという。むしろ、たとえば、colonoscope (大腸内視鏡、結腸鏡) を「大腸の中を通すカメラ」などと言い換えるなど、医師の側で専門用語を使用しないように配慮すべきだと指摘する。

また、医療用語がわからない場合は辞書をひくことを奨励しているが、このクリニックで日常的に通訳している者は慣れていることから辞書を引くことはないという。ただ、新しい通訳者に対しては「医師の立場からすると、素直にわからないことをわからないと言ってくれる通訳者のほうが信頼できるし、わからないときに辞書を使う通訳者のほうが信用できる」 (同クリニック医師) と話していた。

【家族・友人、ボランティアの通訳】

通訳の予算が少ないため、プロの医療通訳にはあまり依頼できない。したがって、ここで依頼している通訳者全員が訓練を受けているとは限らないという。「正直言って、家族やことばが話せる友人がいれば、だれでも使う」 (同クリニック医師) という。ランゲージラインの電話通訳も使うが、多くは、時給20カナダドル程度で難民支援の非営利団体、移民サービ



ス協会（ISS）に通訳を依頼している。この団体の通訳サービスは満足レベルにあるが、中には自分が話せるといった言語をよく知らない通訳者もいるという。

子どもに通訳を頼むときも多いというが、10歳以上の子どもに限っており、「それほど心理的影響はないのではないか」という。「10歳の子どもに頼んだことはあるが、のどの痛みといった簡単なケースであり、難しい場合は小さな子どもには依頼しないことにしている」という。

難民の患者のほとんどは、過去のトラウマを持っており、うつ病や不安症にかかっているため、そうしたメンタルの診療ケースについては、対面通訳にし、しかも家族などには頼まない。

#### 【電話通訳】

電話通訳（ランゲージライン）は、通訳者がいない場合で、かつ、家族や同伴者に英語ができる人がいない場合に活用しているようだ。電話通訳のやりとりには、スピーカーフォンを使っている。ただし、このクリニックの患者は、「あまり教育を受けている人たちではないので、電話から聞こえてくる声の通訳というのは、混乱する傾向はある」といい、医師としても通訳者の顔が見えないので使用は気が進まないようだ。メンタル系の患者が多いせいか、VGHの医療従事者とは対照的な見解であった。



ブリッジ・コミュニティ・ヘルス・クリニックが入居している地区保健所のビル

#### 【まとめ】

非常に進んだBC州の医療通訳事情の中にあっても、クリニックレベルの現実には厳しい。難民の子ども通訳や非営利団体のボランティア通訳などは、当然、レベルが一定しているものではない。医療通訳養成機関や派遣サービス機関などは、医療通訳養成機関で訓練を受けたプロの医療通訳を

使うべきであると主張している。しかし、「カナダに定住するなら、国際語である英語くらいは話せるようになるべきだ」として通訳に税金を投入することに反対する社会風潮がある中、限られた予算で臨床の最前線において苦闘する医師の現状も理解できるところだ。

#### 4 BC州医療通訳サービス調査のまとめ

カナダBC州においても、医療に関する様々な問題群の中で、多言語医療サービスの問題は、決して優先度の高いものではなく、PLS（州立言語サービス）としてはBC州保健公社（PHSA）の中で、その地位をいかに確保し、向上させていくかが、問われているという。

BC州の病院でも、病院によっては医療通訳の予算を確保していないところ（家族などが通訳している医療機関）や、患者によってはPLSなどの派遣システムを知らない人もおり、PLSでは提携病院の拡大とシステムの周知が課題となっている。また、広大なBC州のすべての地域で安定した医療通訳サービスが確保されることが望ましいが、すべての地域に言語サービスのしくみと登録医療通訳者の確保は難しいところだろう。

カナダではGP（かかりつけ医）制を採用しているが、そのGPの多言語サービス提供状況は通常、あまり芳しくないと思われる。GPは必ずしも近所の医師というわけではないので、おそらく、英語に自信がない患者は、多少遠くても母語が話せる医師にかかっているケースも多いのではないかと。また、難民専用のブリッジ・クリニックでは、子ども、友人、ボランティアなどに依頼してことばの問題を克服している様子が見えがえた。

しかし、そうした課題はあるものの、BC州の医療通訳システムは、世界でも最も優れているものの一つであり、通訳サービスが医療業務の一つに位置づけられ、医療費の中で通訳経費が確保されていることなど、日本のめざす方向を示している。少数言語や緊急時の対応についても、契約通訳者で対応できない場合は、電話通訳を活用するなど、高額であっても使える手段はすべて導入しており、この点も参考になる。

通訳者側の課題に目を転じると、米国ワシントン州のような州政府による医療通訳認定制度はないものの、社会的に認められ、通訳サービス機関が採用契約の際の条件としている医療通訳トレーニン

グプログラムがあり、バンクーバー・コミュニティカレッジ（VCC）という公的な職業訓練団体によって運営されている。そうした環境のもとに、医療通訳者はプロとして認められ、報酬が確保されている。日本から考えると、比較にならないほど恵まれているが、それでも困難な課題が残っている。

たとえば、報酬と生計の関係である。質が高く、持続可能な医療通訳派遣システムを考えると、避けて通れない問題が通訳料だろう。カナダでも米国でも、スペイン語などの主要言語（日本では英語に相当する。）は別だが、日本語など少数言語は医療通訳だけで生計を立てるのは困難である。PLSの通訳料基準は、交通費別で、1回1時間の通訳派遣で最高給の場合でもミニマム28カナダドル、1時間を超えると15分刻みでの時給追加がある。確かに1時間28カナダドルでは、MICかながわの条件3,000円と同等ということになる。

そうしたことから、「PLSやVGHと契約している医療通訳者を見る限り、定年退職した人や子どもがいてフルタイムの仕事に就けない人など、他で生計が確保されている人たちが多い」という。

そうした厳しい状況ではあるが、プロの医療通訳者は、心の中にボランティア精神を宿していると認められ、皆、非常に研究熱心である。PLSやVGHと契約しているベテラン医療通訳者らに「医療通訳で最も大切に常に心がけていることは？」と尋ねた。すると即座に「compassion!」（深い思いやり）という答えが返ってきた。第一に考えるべき「正確さ」は当然のこととしてあえて挙げなかったというが、VCCの医療通訳認定プログラムでは、「正確さ」の重要性を教えるが、「コンパッション」の重要性はカリキュラムに含まれていない。しかし、現実に医療現場において、病気とことばの両方で不安に陥っている患者に対して通訳する場合、「思いやり」は欠かせない要素となっている。医療通訳には、理論と現実の両面の尊重が大切だということであろう。







ニュースレター No.55 September 2010  
MIC かながわ

特定非営利活動法人  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
横浜市神奈川区鶴屋町3-30-1  
農機舎503

Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

ニュースレターは6月・9月・12月・3月発行の季刊紙として、MIC かながわ会員にお届けします。  
今年の夏は本当に暑かったですね。皆様お変わりなくお過ごしでしたでしょうか。

## だい3かい いりょうつうやくをかんがえるぜんこくかいぎ 第3回医療通訳を考える全国会議

多文化共生センターきょうととMIC かながわによる協働プロジェクトチームが現場の視点から作成した医療通訳基準の「素案」をもとに、全国各地の医療通訳派遣・養成をしている団体・医療機関の実践者が集い協議検討を行い、それぞれの地域で活用できる共通基準づくりが行われま！

日時: 2010年8月21日(土)11:00~17:00  
会場: キャンパスプラザ京都(京都市下京区)  
主催: 医療通訳の基準を検討する協議会

内容: 全国実践者会議 ~医療通訳者には何が必要か~

医療通訳を考えるフォーラム ~医療観光と医療通訳のゆくえ~

参加: 4条件(医療通訳者の派遣実績がある/医療通訳者の養成を行っている/午前・午後の実践者会議に参加できる/事前に団体内で基準について協議検討ができる)を満たした団体 10団体  
＜NPO法人エスニコ、NPO法人国際ボランティアセンター山形、(財)宮城県国際交流協会、医療通訳士協議会、みのお外国人医療サポートネット、りんくう総合医療センター、NPO法人多言語センターFACIL、(財)鳥取県国際交流財団、NPO法人多文化共生センターきょうと、NPO法人MIC かながわ＞  
一般参加者 約70名



まず、同会議に提案された『医療通訳基準』の「素案」をご紹介します(項目のみ。説明文省略)

知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多文化共生の知識・理解 … 宗教・文化、医療の違い、在日外国人の生活背景</li> <li>・医療知識 … 体のしくみ、医療用語、日本の医療文化、保健医療機関の仕組み、医療従事者の役割</li> <li>・医療制度知識 … 健康保険制度、公費負担制度など</li> <li>・所属団体に関する知識・理解 … 所属団体に関する知識・理解、派遣制度・事業に対する知識・理解</li> </ul>
技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語学力(日本語・対象言語) … 語学力</li> <li>・通訳技術 … 聞く力、理解する力、記憶保持力、表現力、発表力、中断・介入</li> <li>・環境設定力 … 段取り力・仕切り、現場状況判断(空気を読む力)</li> <li>・経験から得たもの … 医療通訳経験から得られたもの</li> </ul>

倫理	・利用者（患者と医療従事者）に対する倫理責任 … 秘密の保持、公平性、中立・客観性、プライバシーの尊重 ・専門職としての倫理責任 … 専門性の向上意識、社会的信用の保持、他の専門職・医療従事者との連携・協力
行動規範	時間厳守、実践現場の規則の尊重、礼儀正しさ、服装への配慮、利用者への専門的援助関係の説明、利用者との私的な関係の回避、健康管理への配慮、信頼されかつ話しやすい態度の保持
組織の義務	通訳者の育成、通訳者の保護、社会に対する責任



全国会議に参加したプロジェクトチームメンバーの感想です。暑い夏の京都で繰り広げられた熱い議論の様子が伝わってきます。



にしむらあきお  
西村明夫

### <MICかながわプログラム・アドバイザー、医療通訳の共通基準を検討する協議会会長>

今回の全国会議の特徴はみつつ。ひとつは実践者会議と銘打ち、原則、医療通訳者派遣をしている「団体」単位の参加としたこと、ふたつ目は前回までのように交通費や謝金はなしで自腹で参加してもらう「学会形式」としたこと、みつつ目は参加団体による「会議形式」にしたこと、つまり参加団体以外の一般参加者は、傍聴という扱いにしました。

これらにより、派遣している実践の現場から見てきた課題を基礎に、現場に役立つ基準をみんなの力を合わせてつくれるのではないかなと考えました。

結果はどうだったでしょうか。企画者の立場からは自画自賛になってしまうので、あまり評価をくだせませんが、ポイントとしては、全国各地域の派遣団体から「こういう基準を待ち望んでいた」という趣旨の意見があったこと、医療者側の立場や論理に基づく意見が重みを持って受け取られる傾向があったこと、「医療通訳ボランティアガイドライン」（かながわボランティアセンター発行）をベースに実践を積み重ねてきたMICの経験が「共通基準」の柱になっていて、それが多様な立場の方々の意見にも耐えられるものであったことなどが挙げられるかもしれません。

全国会議は三部構成で、実践者会議の間に国際医療ツーリズムに関するフォーラムをはさみました。ここでわかったことは、ツーリズムはビジネスであること、これはMICのミッションではないこと、ビジネスとしても通訳業務は軽視されていること、とはいえ、通訳人材の活躍の場が広がることなどです。こうした流れに巻き込まれることなく、でも、できる範囲で協力しながら共存共栄できたらいいなと思いました。

それにしても、多文化共生センターきょうととMICのメンバー全員のパワー（知力・体力・精神力）はすごかったなと思います。短期間で「共通基準（素案）」をつくり「全国会議」を開催したのでから。これから、全国会議の意見やMICのみなさんからいただいた意見を消化して成案にしていく作業が残っていますが、今少し、このテンションを持続させていきたいと思っています。



## つるたみつこ 鶴田光子 <MICかながわ理事長>

8月21日、暑い京都での会議でした。第1回は2006年1月、寒い横浜で開催されたことはご記憶にある方も多いと思います。今回は唐突ともいえるほど急ぎ開催されました。その背景には急速に広がりつつあった「医療観光」における通訳養成が意識されたのはご理解いただけたと思います。「医療通訳」という言葉が広まり、それなりの養成をはじめている今、「医療通訳」にはそれなりの基準が必要だということを医療通訳の「先輩」実践者として世に問いたいというのがきっかけでした。もとより医療観光がなくても、医療通訳についてきちんとした基準は作られるべきですから、医療観光がよいきっかけになったといえます。

会は三部構成で第一部と第三部「全国実践者会議」は「素案」についての各地の医療通訳実践者の意見交換でした。5月から「多文化共生センターきょうと」のメンバーとMICの検討委員が何回もskypeやメールで議論をし、通訳の皆さんにも見ていただいたあの「素案」を提示し、他団体からさまざまな意見をいただきました。



第二部は「医療通訳を考えるフォーラム」で医療観光と医療通訳の行方について、タイと韓国からインターネットで、日本は徳島の企業からの報告があり、それに対して医師、病院SW、医療通訳やコーディネーターといったそれぞれの立場からの発表がありました。

印象として一般参加者も含め、医療通訳が全国に広がりつつあること、さらにそれがNPOやボランティアだけでなく、企業や研究者といったさまざまな立場からも関心が持たれていることを感じました。MICかながわベトナム語通訳の本吉さんも参加してくださり、貴重な問題提起をしてくださいました。

「基準」について勿論ここで結論の出るようなものではありませんが、おむねあの内容で承認されたかと思えます。しかし実践者、医師、プロ通訳、研究者、企業等それぞれの立場でやはり視点が違います。これらの調整をはかり、実践に即し、なお研究者や医師にも通じる言葉をもって表現するのは、これからの大きな仕事です。医療観光については急速な進み方を肌で感じました。「医療観光の通訳」と「在住外国人への医療通訳」は韓国やタイでははっきりわかれているようです。これに関し、日本医療通訳士協議会の代表中村医師は「日本ではダブルスタンダードにしてはならない」と強くおっしゃっていましたが、一方で「医療観光における通訳者の養成はボランティアレベルでは絶対出来ないもの(多分費用も)を検討中」という情報もあり、予断を許せません。それにしても今回の医療観光は経済産業省が中心で、厚生労働省は「ひややか」だとある先生が発言しておられましたが、医療観光であろうと在住外国人であろうと、医療に直結する「医療通訳」について厚生労働省はどう考え、どうしたいのか、ぜひ聞きたいです。

ともあれ医療観光がどうであろうと質のよい通訳の養成のため、一定の基準は作るべきですし、「いつでも、どこでも、だれでも安心して医療にかかれるように」というMICのミッションは変わりません。医療観光自体は悪いことではないと思いますが、医療観光によって、今まで地道に日本で働き、暮らしてきた外国籍の方とそれを支えてきたボランティア通訳がないがしろにされたり、不利益をこうむることだけは絶対に許せません。

最後にメンバーについてです。京都のメンバーの短期間でのITを駆使したパワフルな準備に圧倒されました。しかしMIC勢も実践者会議でまとめの大役を務められた西村さん、非のうちどころのない応答をしてくださった森田直美さん、医療通訳、コーディネーターの立場から説得力ある真摯な発表をしてくださった岩本弥生さん、疲れて熱を出しながらも無償で病院の立場から力強い援護をしてくださった聖マリ安娜医科大学病院SWの坪田さん、どなたも素晴らしかったです。

裏方勢も負けておらず、圧倒的な存在感の三浦さん、書籍販売に卓越した営業力！を発揮した佐藤ベティーさんと森田さん、さらに素晴らしかったのは沢田先生で、IT機器の操作から机運び、販売まで裏方



をニコニコしながら務め、でも一般席からの発言はぴしりと決まり「かっこいい！」とますます全国にファンが増えました。MICは表に出ても、裏から支えても有能な人材ぞろいですね。

私はといえば会場誘導係で、「タダで入る人を防げ」という京都からの特命？を受けていました。殆どすべての方とお会いする役得で、新しいロゴ入りの名刺を乱発しました。ただし鳥取と鳥根の方を間違えたり、高名な先生のお顔を忘れてたりで、実は老舗旅館の女将にあこがれていたのですが、これでは失格だと思ひ知らされました。

嵐のような一日でしたが、これを機会にまたみなさんと「医療通訳」についてMICの役割について話し合いたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

### 三浦 遼 <MICかながわ総務部長・英語医療通訳スタッフ>

暑い中無事帰ってまいりました。8/20金曜日の夜行バスで行って、土曜日に会議。夕方に終了して打ち上げで飲み会。そのまま土曜の夜行バスで帰ってきました。その京都の会議は「第3回医療通訳を考える全国会議」でした。こんな面白くもないだろう会議が超満員で、空席は殆ど有りませんでした。参加者は北海道から沖縄まで、NPOかボランティア団体の責任者でした。私達MICかながわからの参加者は自腹ですが、おそらく他の参加者もそうでしょう。

医療通訳の国家資格とか認定制度が無い現在、何らかの基準が必要であるとの思いで各地から参集したのだと思います。私達が提案した素案に対していろいろな意見や批判が出されました。これからは、これ等を集約して統一案に纏めるのが大変な作業になる苦です。

これとは別に、現在、外国から特に富裕層を日本に引き寄せて、日本のレベルの高い医療を受けさせたい(料金は高く設定して儲けたい)と言うことで日本へ誘致の動きが各地で起こっています。観光医療とかmedical tourismと言われる動きです。

インド、タイ、韓国が先行しているのですが、日本も特に地方都市で医科系大学を有している県とか市が積極的に動き出しました。日本の場合は中国からの客を当て込むようです。この面から医療通訳と言う分野に注目が集まってきました。

これが普及してくると、多分収入の面では病院など医療機関は恩恵を蒙るのですが、それでも無くては医師不足で適正な医療を受けることが難しくなっている日本の患者のcareが危機に瀕する心配があります。こういった危険を孕みながら、この問題は着地点を探しながら進行して行くことになりそうです。

### もりた なおみ 森田直美

#### <MICかながわ英語医療通訳スタッフ>

朝から会議室は満席で、北海道から沖縄まで全国から関係者が集まり積極的な発言が相次ぎました。医療通訳基準の素案に対して、立場や表現は異なるものの、根底にある基盤は共通しているのかなという印象を受けました。と同時に、MICの規範がどれだけ包括的なものであるかを痛感しました。

これから医療ツーリズムが普及してそこで働く通訳者と地域に根ざしたNPO医療通訳の間でダブルスタンダードにならない様にとの意見が印象的でした。また私たちが損する事なく、きちんと社会的地位が認められますように…との熱いエールをいただき、感動しました。

アンケートにご協力下さいました皆様、ありがとうございました。





いわもとやよい  
岩本弥生 <MICかながわコーディネーター・ポルトガル語医療通訳スタッフ>

これから現任者研修などで詳しく説明されていくとは思いますが、今回素案としてまとめられた基準については、MICとしてのこれまでの活動の中で折に触れ伝えられていたものを文章化・整理したものととらえていました。(実際、まとめていく段階でそう感じていました)ところが、実践者会議に行ってみるとかなりの団体からは、目指していくものとしてとらえたい、こういう厳しい基準ではやる人がいないというような意見が多く、ちょっと戸惑いました。また、韓国からの報告として、現地の方から医療観光に対する国が養成した通訳、そして地域の外国人に対する医療通訳の話聞き、全く二分化されていることを知りました。韓国を訪ねてこの状況を見てきた現在通訳派遣をしている団体の方が、「現在行っているボランティア派遣の通訳では、間違ったときにごめんなさいでなんとかできるけれど、医療観光の通訳では高いお金が支払われているので絶対に間違えられない」と発言され、また、医療観光の通訳について考えておられる医師の方からも、しっかりした実力を持っていなければ、保険会社がきちんと損害補償保険に入れてくれないなど、通訳の質についての話が出ました。この点について、ひどく違和感をもって帰ってきました。私自身、下手な通訳ですが、通訳として「ボランティアだから、気が楽」で、「お金をもらえば、その質を変える」というものではないと思っています。

MICの通訳も誰ひとりそんな人はいないと思うのですが・

さとう  
佐藤ペティー

ちゅうごくごいりょうつうやく  
<MICかながわ中国語医療通訳スタッフ>

「医療通訳者には何が必要か？」その答えを追い求め、5月から神奈川と京都間でskypeを用いて議論を重ね、「医療通訳共通基準」素案をまとめました。8月21日(土)この素案を基にして10実践団体及び医療機関従事者が一堂に会し、協議をしました。会場では京都の猛暑にも勝る熱い議論が繰り広げられました。各団体とも、試行錯誤しながら一生懸命医療通訳活動に取り組んでいる現状です。

一方、今まで問題が起きなかったという発言に対して、ある医療従事者からは「問題が起きない≠誤訳はない」という厳しい指摘もありました。また、IT技術を駆使し、タイ及び韓国から「医療観光」に関する現地レポートを聞き、日本が検討している医療ツーリズムには尚課題が多くあると感じました。絶妙なタイミングで取りまとめられた医療通訳共通基準は「医療通訳スタッフにとって目指すべき目標、社会に対する医療通訳の主張」になりますよう、会議で頂いた意見や指摘を踏まえ、第二ステージ：素案⇒案の仕上げに向けて作業は既にスタートしました。



MICの  
イ  
MICの  
イベント

ねんど  
2010年度  
いりょうつうやく しんにんようせいけんしゅう  
医療通訳スタッフ新任養成研修

第1回 9月11日(土) 10:00~17:00  
講義 於：大和保健福祉事務所



第2回 9月25日(土) 10:00~17:00  
講義 於：大和保健福祉事務所

第3回 10月2日(土)  
言語別シミュレーション  
言語により時間帯・会場が異なる

第4回 10月9日(土)  
言語別シミュレーション・選考  
言語により時間帯・会場が異なる



## 『外国人医療にかかわって・・・』

MIC かながわ副理事長 松野勝民 (済生会神奈川県病院MSW)

SWとして働いて30年近く経過した。外国人医療に関心を持ったのは、何といても1987年(昭和62年)に現在の病院へ転職してからである。当時の済生会神奈川県病院は、神奈川県交通救急センターを併設した年間約5500台の救急車が来る救急病院であった。初めて関わった外国人ケースもこの救急センターに搬送された韓国人患者Aさんであったと記憶している。呼吸苦を訴えた30代男性。来日2週間余りとのことで日本語はほとんどできなかった。加えて健康保険の加入もない…。

1990(平成2)年10月の厚生省(当時)の「在留資格のない外国人には今後一切生活保護の支給はしない」という口頭通達に端を発した「外国人医療問題」が新聞・TV等のマスコミを巻き込んだ社会問題となった。しかし、実際の中身は「外国人の医療費問題」として報道されていた。当院にもTV・ラジオ新聞等の取材依頼が多く来たのもこの頃からである。健康保険未加入の方々の受診・受療問題である。医療費の支払いの可否で受診できるかできないか(?)ということになりかねない状況が広がってきた。周囲からは「診療拒否」も見聞きするようになった。当院でも、徐々に健康保険を持たない外国人の受診が増えてきており、院内でも「どうしたものか?」という雰囲気は感じとれた時期でもあった。そんな時のAさんの受診である。案の定、救急センター担当の内科医の第一声は「両肺は真っ白」「入院しなければ2、3日で死んじゃうよ。」「でも保険ないし、お金もないけどどうしたらいいのか…」であった。「医学的に入院の必要性があるなら、治療するしかないでしょう。」「治療費の問題はこちらで相談するから。」(もちろん、何のあてもなかったが…)ということで何とか入院になったのでホッとしたのも束の間、担当医から「ところで、日本語わからないけどどうする?」…。

「お金がなくても治療はできるが、言葉が通じなければ治療はできない。」と痛感したのもこの時であった。看護師をはじめとするスタッフや通訳スタッフの協力を得ながら、「OO語対照表」がいくつもできたのもこのケースがきっかけであった。一人ひとりの病状に合わせて切り貼りをした覚えがある。しかし、相変わらず治療費の問題について



は抜本的な対策はたてられておらず、現場では四苦八苦している。言葉の問題については「MICかながわ」が中心になり、神奈川県内において少しずつであるが、確実に発展しているところである。全国的にも「MICかながわ」から発信された通訳派遣システムや通訳スタッフ養成についてのノウハウが浸透しつつあることも実感できる。しかし、ここで満足するのではなく、これからの積み重ねによってどのように広がっていくか注視する必要はあろう。

神奈川でも運営コストの問題は最初から大きく出ており、現在でも試行錯誤している。本来であれば、国レベルでの対応があつてしかるべきであろうが、今のところ全く先は見えない。自治体レベルでの運用もおのずと限界があろう。その中では、神奈川県も努力をしておりここまで来ているのも事実として受け止めていきたいと思う。一方で、通訳スタッフの方々の協力をなしでは、今のシステムが成り立たないのは周知の通りである。ボランティアな活動になっており、実際の活動内容とコストが合わない状況をできるだけ早く改善していきたいものである。そのためには何が必要なのか、どうすればよいのか、又、関係機関への周知・協力要請等々、全体を見据えながらこのシステムを前進させるために今後も微力ながら協力をしていきたいと思う。又、同時にMICかながわの発展も必須である。事業の啓発活動を中心に少しでも多くの賛同者を得て、社会にアピールをしていきたいと思う今日この頃である…。



ニュースレター No.62 June 2012

MIC かながわ

特定非営利活動法人  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
横浜市神奈川区鶴屋町 3-30-1  
農機舎503

Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

ニュースレターは6月・9月・12月・3月発行の季刊紙として、MIC かながわ会員にお届けします。  
今年度はMIC かながわ設立10周年に当たります。長いようであつという間に過ぎた10年間でした。  
今号では、その10年間に思いを馳せた企画をお届けします。

## ..... MIC かながわ 10周年に寄せて .....

10周年にあたって 理事長 鶴田光子



10年経ったのですね。感慨無量です。

6月9日、総会の後、10周年のお祝いの交流会が開かれ、今年  
の目玉？はメンバーの子ども時代の写真を見て、だれかを当て  
るクイズでした。写真と現在の姿を比べ「エーほんど？」と会場  
には驚きと笑いの渦が。歳月は人を変えます。しかしその中に、  
紛れもない「その人らしさ」は、年を経ても生き続けていること  
も感じられました。

MICも10年間で最初の姿からは想像もつかないほどの変貌を遂げました。しかしその大きな変化  
の中にもMICの「らしさ」はしっかり生き続けています。それは皆の「温かな心」「パワー」そして「こ  
ころざし」です。10年の間、さまざまな困難に出会いながら、また意見の相違はあっても、皆がこ  
の「らしさ」を決して失うことなく助け合ってきたのは、私には奇跡とも思えます。

また国際課や病院、殊にソーシャルワーカーの方々のご尽力なしにはこの発展はありませんで  
した。皆様本当にありがとうございます。これから困難はあってもこの「らしさ」を守り、こと  
ばでいのちとくらしを支えてゆきましょう。

故人となられた方々を含め、MICを支えてくださったすべての方々に感謝しつつ、  
来る10年に乾杯！



MIC かながわ は twitter や facebook で情報を発信しています。

twitter のアカウントは @MIC\_Kanagawa、facebook のページは MIC かながわ です。

twitter や facebook にアカウントをお持ちの方は、MIC の活動や情報がより多くの方に伝わるよう  
ご協力をお願いします。



MIC かながわは、2002 年 4 月に産声を上げ、同年 7 月に NPO 法人として認可が下りました。そして 8 月からは『神奈川外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業』を開始。モデル事業当時からコーディネーターや医療通訳スタッフ、事務局ボランティアとして活動して来た人たちは、この 10 年間でどう感じているのでしょうか。

## この 10 年を振り返って ～コーディネーターブースから～

理事・コーディネーター・英語通訳スタッフ 岩元陽子  
<登録：コーディネーター2002 年 医療通訳スタッフ 2003 年>

私が初めてブースに入ったのは 2002 年 11 月 1 日。その日の午前中、とうとう 1 件も電話がありませんでした。今か今かと電話を待ってるうちにむしろ緊張してしまい、何も仕事してないのに昼休みにはグッタリでした。この日に限らず、モデル事業時代から 1 年目にかけては何事もゆったりペースだったのです。6 病院、5 言語、通訳スタッフ 35 人という、こじんまりした事業でした。

その後の 10 年間で病院数は何倍にも増え、通訳スタッフも毎年フレッシュなメンバーが加わり、気がつけばこんな大きな事業になっていました。「気がつけば」なんて、のん気な言い方ですが、それがコーディネーターとしての実感かな。ここまで事業が伸びて定着したのは、最初の制度設計の正しさと、補助金事業からの自立という着陸を支えた理事会と事務局、国際課の方々、そして実際に医療現場からの評価を不動のものにした通訳の皆さんすべてのお力によるものと思います。要するに「総合力」ですが、その小さな歯車の 1 つになれたのはうれしいことです。イヤ、「なれた」というより「ならせてもらった」かも。中間層のコーディネーターは、事務局のバックアップと、そして前線の通訳の方のご協力—無理なお願いでも快く受けてくださる—があって、初めて成り立つ仕事ですから。

当初、コーディネーターの仕事の 1 つに「通訳スタッフから話を聴く」というのがありました。深刻な通訳に入ったスタッフに、こちらから電話して話を聴き取る—吐き出してもらおうことがケアにつながる—というものです。しかし、新米で経験の少ない私は、その話の重さに膝がガクガクしたりしてました。これではアドバイスや心のケアどころではない！私の方が通訳の皆さんに育てられた感じです。今のブースはあわただしくて、そんな時間が取れないのが情けないですが、通訳の皆さんがどこかで MIC の誰かとつながり、安心してお仕事ができていることを切に願います。

【余談】日報を出すとき、1 日に 10 件を超えたら、受付の人たちから「今日はめっちゃくちゃ忙しかったよね～」と言われてたんですね。古きよき？時代・・・  
※日報の件数とは、その日扱った依頼の件数で、今は平均 40 件弱。60 件を超えたこともあります。

## 10 年目の感想

理事・コーディネーター・中国語通訳スタッフ 古山季玲  
<登録：コーディネーター2004 年 医療通訳スタッフ 2002 年>

MIC かながわ創立 10 周年、おめでとうございます。身内なので、お祝いの言葉はおかしいかもしれませんが、身内として、10 年目を迎えられることは本当に奇跡のようです。

2002年のサッカーワールドカップが開催された後、国際交流に関わっていた知り合いから、1本の電話がありました。ある熱心な人たちが神奈川県と協働で「医療通訳のモデル事業」を始める、ということを知りました。

医療通訳モデル事業は2002年8月1日より開始。35人（5言語）の通訳が集まり、全国でもパイオニアの「医療通訳活動」が産声を上げました。印象に残っていることは、当時の説明会で言われたことばです。「わずかの予算（約80件分）です。予算がなくなるとこの活動も終了です。」

あれから10年、MICの通訳人数は当時の約5倍（10言語）、年間依頼件数も3,000件を超える数に増大しました。私自身はMICかながわの活動を続けていますが、正直にいうとNPO団体は周りの熱意で成り立つ活動です。一般の商業事業と違って、資本はお金に換算できない熱意がその原動力です。



この10年間、色々な経験を積んで、今のMICかながわがあります。目標は今でも10年前と同じと思います。目標に向かって、10年間の経験をどう活かすのかが大きな課題です。10年後、20年後もMICかながわがずっと活動でしていくにはいくつもの山を乗り越えないといけません。その力はMICかながわにはあると信じています。経済的、人材的、社会的に認知してもらえるNPOになってほしいです。



## 10年間の医療通訳ボランティア

コーディネーター・スペイン語通訳スタッフ 細野紀代子  
 <登録：コーディネーター2004年 医療通訳スタッフ2002年>

医療通訳ボランティアとは、外国籍住民が体調を崩してしまった時に言葉の壁があり、自分一人で医療機関での受診が困難な場合にも良い医療が受けられるようにと、自分の能力と時間を提供出来る者達である。2002年4月にMICかながわが設立された当時は、5言語の通訳を県事業協定医療機関である6病院に派遣し、スペイン語登録者は12名であった。既にたくさんの医療通訳の経験を持つ頼もしい先輩たちの中に混じって私の医療通訳活動がスタートした。

**『このところ優秀な若い人たちが立ちあげたNPOのお手伝いをしております。ガレージで埃をかぶっていた車が、このまま廃車になってしまうのは寂しいと思って通りに出て走ってみているうち気が付いたら、高速道路を走っていて、周りは性能のよさそうな車ばかり。下手に側道にも降りられず、高級車に迷惑をかけないようにと気を引き締めて走り続けているのが私です』**

と、医療通訳を始めた当時の自分の姿を車に置き換えて友人に伝えていた。

ボランティアであっても医療通訳は専門性が高く責任が重い。診察室内では、医師、患者、看護師との会話を中立的立場で逐語通訳を行い、時には、多職種とのコミュニケーション能力も必要とされる難しさがある。そこでMICでは選考を経て登録され活動している通訳者に対しても、年3回必修の現任者研修が組まれているほか、スキルアップに必要な講座や研修の紹介も行われている。利益や収益がインセンティブにならないボランティア活動であるが、新人募集の際は多数の応募者があり、また、県との協働事業として年々派遣実績を着実に伸ばしてきたのは、時代が要求している活動だからだと言える。

## 10年間MICとともに過ごして

理事・事務局スタッフ・コーディネーター・タイ語通訳スタッフ 内藤まゆみ

<登録：コーディネーター2006年 医療通訳スタッフ2003年>

2002年4月、縁あって設立総会に参加。翌月事務局ボランティア募集のハガキが届きました。子どものPTA活動が一段落し、次は何をしようかと考えていた矢先だったので、ちょっとお手伝いしてみようかなという軽い気持ちで事務所を訪ねました。

PTAで広報委員を経験し、パソコンが少しできるという程度で、ニュースレター担当事務局ボランティアとしてMICかながわとの関わりが始まりました。最初は事務局ボランティアも国際色豊かで、ワンルームマンションの6畳一間の事務所でのんびりと仕事をしていたという印象があります。

どんな団体もそうだと思いますが、初めのうちは規模も小さく、皆がひとつの目的に向かって協力していてモチベーションも高く、それだけで喜びを感じられるものです。でも、規模が大きくなってくると今度はそれを維持するための努力が必要になってきます。私自身、事務局ボランティアから非常勤の事務局スタッフとなって、感じるいろいろなありました。

ボランティアのときは、ボランティアなんだし楽しく仕事ができれば良いと思っていても、事務局スタッフとして仕事をするようになると、当然のことながら業務を遂行することへの責任が出てきます。業務量とスタッフ数の比率は適当なのか、財政事情を考えるとスタッフ数を増やすこともままならない、スタッフ数を増やすためには収益につながる事業を開拓することも必要、でもそのためにまた業務量が増える…。この数年、MICはこの負のスパイラルに陥っていると思います。

この状態から抜け出すためにどうしたらよいのでしょうか…。抜け出せたときには、それこそMICかながわは医療通訳派遣システムの真のパイオニアで、かつ成功者と胸を張って言うことができるのだと思います。





ニュースレター No.65 March 2013

MIC かながわ

特定非営利活動法人  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
横浜市神奈川区鶴屋町3-30-1  
農機舎503

Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

ニュースレターは6月・9月・12月・3月発行の季刊紙として、MIC かながわ会員にお届けしています。

7月にMIC かながわ主催で『医療通訳フォーラム2013 in かながわ ～地域でともに生きるために～』(P.13参照)を開催します。会員の皆様にもぜひご出席いただき、地域による医療通訳派遣システムの違いを知るとともに、10年を経たMIC かながわが抱える課題を一緒に考えていただけると嬉しいです。

## MIC かながわの事業紹介 < 講師派遣事業 >

MIC かながわの大きな柱となっている事業のひとつが『講師派遣』です。これまで培ってきた研修に関するノウハウを他の地域に広めるべく講師を派遣しています。派遣講師も大勢育ってきており、依頼元のニーズに応じて講師の人選を行い派遣しています。MIC かながわの派遣講師の特徴は、現場をよく知っており、実務に即した講義を行うことができるということです。

MIC かながわは特定非営利活動法人ですが、非営利とはいえ収入を得る活動がなければ団体自体を運営維持していくことはできません。講師派遣はMIC かながわの運営を支えている大切な事業です。東日本大震災の影響で2011年度は依頼件数が減ったものの、順調に依頼件数は増えて来ています。

2012年度の講師派遣実績とともに、3名の講師から寄せられた感想をご紹介します。

日付	派遣先・講座名	派遣講師
5月11日(金)	医薬品等研究会「医療通訳の活動、今後の計画と課題」	西村プログラム・アドバイザー (以下PA)
5月25日(金)	長崎県国際交流協会「医療通訳養成講座」	西村PA
7月9日(月)	神奈川県消防学校「外国語講座」	三木監事・コーディネーター (以下Co.)・中国語通訳 城間スペイン語通訳 ヒューバート(英語)
7月19日(木)	神奈川県立国際言語文化アカデミア「外国人向け日本語教材作成のためのミーティング」	岩本Co.・ポルトガル語通訳
7月28日(土)	東海大学大学院「国際保健福祉論」	鶴田理事長 古山理事・Co.・中国語通訳 後岡Co.・中国語通訳
8月3日(金)	ひろしま国際センター「外国籍住民への医療・福祉支援活動」	三木監事・Co.・中国語通訳
8月25日(土)	三重県国際交流財団「フィリピーノ語医療パートナー養成講座」	ひめの 姫野タガログ語通訳



9月1日(土)	はままつししゅさい はままつこくさいこうりゅうきょうかいしゅかん 浜松市主催・浜松国際交流協会主管 「ソーシャルワーク研修 医療通訳実地研修」	いわもと ごつうやく 岩本Co.・ポルトガル語通訳 やくわ ごつうやく 八鍬ポルトガル語通訳
9月4日(火)	こくれんたいがく こくさいこうりゅうきょうかい 国連大学・かながわ国際交流財団 「国際化の問題と事例を通して議論する」 「医療通訳の必要性とロールプレイを体験する」	いわもと ごつうやく 岩本Co.・ポルトガル語通訳 アビー英語通訳
10月18日(木)	とうほうだいがく いりょうつうやく 東邦大学医学部 講義「医療通訳」	つるたりじちやう 鶴田理事長
11月1日(木)	ちゆうこくこくさいしゅせん こうりゅう 中国帰国者支援・交流センター  「支援相談員・自立支援通訳等研修会」	さとろ ちゆうこくごつうやく 佐藤ペティエー中国語通訳 みきかんじ ちゆうこくごつうやく 三木監事・Co.・中国語通訳
11月4日(日)	こくさい ひろしま国際センター 「医療関係者対象・医療通訳の必要性」 「ボランティアおよび一般対象・医療通訳へのお誘い」  	きの 佐野Co. いわもとりじ えいごつうやく 岩元理事・Co.・英語通訳
11月10日(土)	しこくさいこうりゅうきょうかい つくば市国際交流協会 「医療通訳ボランティア養成講座」	もりたえいごつうやく 森田英語通訳
11月11日(日)	ちばけんこくさいこうりゅう 千葉県国際交流センター 「医療通訳ボランティア養成講座」	アビー英語通訳 城間スペイン語通訳 さとろ ちゆうこくごつうやく 佐藤ペティエー中国語通訳
11月12日(月)	かながわけんしやうぼうがっこう がいこくごころざ 神奈川県消防学校 「外国語講座」	みきかんじ ちゆうこくごつうやく 三木監事・Co.・中国語通訳 しるま ごつうやく 城間スペイン語通訳 ヒューバート(英語)
11月14日(水)	ひらつかかごせんもんがっこう 平塚看護専門学校 「国際看護・在日外国人の医療」	まつのふくりじちやう 松野副理事長
11月18日(日)	しこくさいこうりゅうきょうかい つくば市国際交流協会 「医療通訳ボランティア養成講座」	もりたえいごつうやく 森田英語通訳
11月22日(木)	ちばけんこくさいこうりゅう 千葉県国際交流センター 「医療通訳ボランティア養成講座」 	アビー英語通訳 しるま ごつうやく 城間スペイン語通訳 さとろ ちゆうこくごつうやく 佐藤ペティエー中国語通訳
11月29日(木)	しゃだんほうじんいじゅうみん ぶさん きよんなむいじゅうみんつうやく 社団法人移住民とともに 「金山・慶南移住民通訳 ほんやくしえんかつどうか 翻訳支援活動家のためのシンポジウム」	もりた じむきょく 森田 PA・事務局スタッフ・Co.
12月1日(土)	とちぎけんこくさいこうりゅうきょうかい いりょうつうやく 栃木県国際交流協会「医療通訳ボランティアセミナー」	つばかみ ごつうやく 坪上ポルトガル語通訳
12月2日(日)	はちおうじこくさいきょうかい 八王子国際協会 「医療通訳研修(基礎)」 	えいごつうやく アビー英語通訳



12月8日(土)	とちぎけんこくさいこうりゆうきょうかい いりょうつうやく 栃木県国際交流協会「医療通訳ボランティアセミナー」	いわもと ごつうやく 岩本Co.・ポルトガル語通訳 にしがき ごつうやく 西垣スペイン語通訳
12月15日(土)	ながのけんこくさいこうりゆうきょうかい いいだがいじょう 長野県国際交流推進協会・飯田会場 いりょうつうやくようせいこうざ きそへん 「医療通訳養成講座(基礎編)」	さとう ちゅうごくごつうやく 佐藤ペティアー中国語通訳
1月19日(土)	ながのけんこくさいこうりゆうきょうかい ながのかいじょう 長野県国際交流推進協会・長野会場 いりょうつうやくようせいこうざ きそへん 「医療通訳養成講座(基礎編)」	えいごつうやく アビー英語通訳
1月26日(土)	ながのけんこくさいこうりゆうきょうかい 長野県国際交流推進協会・ まつもとかいじょう 松本会場 いりょうつうやくようせいこうざ きそへん 「医療通訳養成講座(基礎編)」	いわもとりじ えいごつうやく 岩元理事・Co.・英語通訳
1月27日(日)	やまなしけんこくさいこうりゆうきょうかい 山梨県国際交流協会 いりょうつうやく 「医療通訳ボランティアセミナー(スキルアップ編)」	いわもと ごつうやく 岩本Co.・ポルトガル語通訳
1月29日(火)	ぐんまけん たぶんかきょうせいしんか 群馬県NPO・多文化共生推進課 ようせいこうざ 「メディカルインタープリター養成講座」	もりたえいごつうやく 森田英語通訳
2月8日(金)	ながさきけんこくさいこうりゆうきょうかい 長崎県国際交流協会 いりょうつうやくじんざいせいこうざ 「医療通訳人材育成講座 (中国語ワークショップ)」	さとう ちゅうごくごつうやく 佐藤ペティアー中国語通訳 ふるやまりじ ちゅうごくごつうやく 古山理事・Co.・中国語通訳
2月9日(土)	ぐんまけん たぶんかきょうせいしんか 群馬県NPO・多文化共生推進課 ようせいこうざ 「メディカルインタープリター養成講座」	いわもと ごつうやく 岩本Co.・ポルトガル語通訳
2月12日(火)	ながさきけんこくさいこうりゆうきょうかい 長崎県国際交流協会 いりょうつうやくじんざいせいこうざ 「医療通訳人材育成講座 (英語ワークショップ)」	もりたえいごつうやく 森田英語通訳 えいごつうやく アビー英語通訳 たなか えいごつうやく 田中Co.・英語通訳 いわもとりじ えいごつうやく 岩元理事・Co.・英語通訳
2月26日(火)	あーすぶらざたぶんかきょうせい じょうほうはん あーすぶらざ多文化共生・情報班 がいこくせきけんみんそうだんけんしゅうかい よこはまかいじょう 「外国籍県民相談研修会」 横浜会場	つるたりじちょう 鶴田理事長
2月28日(木)	あーすぶらざたぶんかきょうせい じょうほうはん あーすぶらざ多文化共生・情報班 がいこくせきけんみんそうだんけんしゅうかい あつぎかいじょう 「外国籍県民相談研修会」 厚木会場	つるたりじちょう 鶴田理事長

えいごつうやく もりたなおみ  
＜英語通訳：森田直美＞

ほんねんど  
本年度、MIC かながわから派遣講師として、つ  
くば市、群馬県、長崎県に行きまして。そ  
の経験について少し書きます。

つくば市は本年度で3回目の派遣でした。今年  
は「医療通訳者の心得」と「通訳技術」「ロール  
プレイ」を担当しました。MICからの派遣は私1人  
でしたので、MICの活動内容や考え方が正確に伝  
わるよう、また私見を入れないよう気をつけまし  
た。前回の研修から2年経過してはいたので、

せんぼう たんとうしや ちよくせつ め せんぼう けんしゅう  
先方の担当者と直接お目にかかり、先方が研修に  
きたい きたう きんしゅう  
期待することや参加者のレベル、ロールプレイの  
ないよう きぼう しんりょうか こま うちあわ  
内容で希望する診療科などを細かく打合せました。  
さんかしゃ やく めい えいご ちゅうごくご  
参加者は約55名で、英語、中国語、スペイン語で  
した。実働はまだ少ないようで、参加者のレベル  
も多様です。研修プログラムの他の講師が話をさ  
れた部分も聴講し、メッセージに一貫性をもたせ  
るように気をつけました。MICの医療通訳養成  
けんしゅう と い すんげき しよくいん みな  
研修で取り入れている寸劇も職員の方の皆さんの  
きょうりよく え ひろう  
協力を得て披露しました。



群馬県は、2008年から「通訳技術」を担当して  
 います。今年に加えて「心得」も担当しました。言語  
 はポルトガル語、スペイン語、中国語が中心で、  
 人数も少なめです。アットホームな雰囲気、た  
 くさん質問が飛び交い、参加者と一緒に考える  
 研修になりました。例に挙げた単語のポルトガル  
 語や中国語を発音して、私は参加者から直されて  
 ばかりいました。説明をするときは、なるべく簡単  
 な日本語でゆっくり話すように心がけています。  
 また理論的なことよりも、人体図を見ながら単語  
 (日本語と対象言語)を記入してもらい、ことば  
 に慣れてから単語のクイックレスポンスの練習を  
 したり、母語と日本語の両方で併記されている  
 短いシナリオを使用してリプロダクション(再生)  
 をしたりとアクティビティを多くしています。ネイ  
 ティブの方はまず母語で再生練習ができるので、  
 この方が取組みやすいようです。



群馬県にて

長崎県は、今年初めて伺いました。本年度が  
 研修一年目とのことで、その総仕上げのロール  
 レイ練習にMIC講師が複数名呼ばれました。  
 事務局の高山さんを中心に先方が希望すること  
 の聞き取りから始め、参加者のレベルに合った  
 難易度のシナリオ選び、グループ分けなどをし、  
 当日に臨みました。参加者は、英語は約30名で  
 した。全体で30分程度「振り返り」や問診票を使用  
 した練習、病院での自己紹介(守秘義務を守る旨  
 の説明)の練習をした後、各グループで2時間半  
 程度練習をしました。患者役を担当していただ  
 いたネイティブの方からも積極的な発言があり、  
 表現や文化事情などこちらも多くを学ぶことが  
 できました。参加者の一生懸命な気持ちが伝わり、  
 準備の努力が報われた気がしました。

ロールプレイ研修自体は、1~2日で終了して  
 しまうので、その後参加者が自己学習を継続する  
 ために必要な参考情報(サイトや書籍)の提供と、  
 また地域内外のネットワークづくりと勉強会が役  
 に立つことを必ずお伝えしています。実際つく  
 ば市も群馬県も言語別の勉強会をスタートされた  
 と聞きました。これからは、言語別勉強会レベル  
 で地域間交流もできれば良いと思います。

MICとは別に、立教大学異文化コミュニケー  
 ション学部でも年1回医療通訳の話をしていま  
 す。医療通訳に対する関心は非常に高く、率直で  
 「どきっ」とするような質問もたくさん出ます。  
 「現場で~に直面したときにどうされるのです  
 か?」「誤訳をしたらどう対応しますか?」など  
 です。将来を担う若者が医療通訳に関心を持って  
 くれるのは、とても心強いです。これからも地域  
 社会間のつながり強化と啓発活動を続けていき  
 たいと思います。

＜ポルトガル語通訳・コーディネーター：  
 岩本弥生＞



山梨県にて

私は、コーディネーターをしていること、大勢  
 の前で話すのが苦ではないということで、研修  
 講師をさせていただく機会を得ました。貴重な  
 経験をさせていただき、とても感謝しています。  
 講義をさせていただく中で、いつも焦点を  
 当てるのは、「医療通訳とは?」ということです。  
 参加者の中に「通訳はできるのだけれど、医療と  
 なる専門用語が多くて・」とおっしゃる方が  
 います。専門用語を全て知っていて、すらすらと  
 通訳できるということが医療通訳なのかという



わたし けつ おも し  
私は決してそうは思いません。もちろん、知っ  
ているに越したことはありませんが、一番大切な  
は、患者に理解できる言葉で伝えることであり、  
医師に正しく患者の伝えたいことを伝えるのが、  
大切だと思っています。しかも、「足さない・  
引かない・変えない」という基本を守ってです。  
どうやってそれを実現するのかというところに  
重点を置いています。これは、講義をさせていた  
だいているうちに自然とその方向になってきました。

ちほう げんご ちが さまざま ちが かん  
地方、言語の違いで様々な違いを感じることは  
できます。例えば、ロールプレイは、あくまでも  
練習なので、うまくいかず、どうやらうまく  
いかかというのを学んでいただく場だと思ってい  
るのですが、ロールプレイをうまくやることを  
目的とされる方もいたり、「最初に、訳す文章を  
渡してもらってなかったからうまくできなかった  
」と言われる方もいたりします。

また、「難しい言葉は、先生に聞いて簡単な言葉  
に言い換えてもらいましょう」と指導するわけ  
ですが、「白血球を簡単な言葉で教えてください」と  
言われる方もいたり、引かないということは何度  
も言っても「先生が、もう命が短いとい  
ったとき、私は患者さんが可哀想だから訳しま  
せん」、「あんまり長く話す診察時間が長くな  
って先生に悪いから短くまとめたほうがいい」と  
言われる方もいます。こういう事例が出てきます  
と、他の方々とじっくり話し合うことができ、こ  
ちらもいろいろ気付かされること、学ぶことがあ  
ります。

各団体の担当者の方も本当に様々です。皆様、  
熱心に取り組んでくださっていますが、研修の  
内容やロールプレイの難易度も指定されるところ  
もありますし、お任せでということもあります。  
参加者の皆さんに楽しんでしっかりと学んでい  
ただける場をこれからも提供して行けたらと思  
っています。



## ＜中国語通訳：佐藤ペティー＞

いし うえ ねん けんしゅう おそ こと し こと  
石の上にも3年・研修から教わった事・知った事

わたし ねん しんにんけんしゅう じゆこう  
私は 2004年MIC かながわの新任研修を受講、  
2005年に独り立ちしてから最初の3年間は勉強  
⇨現場実践及び「医療通訳とは」と自問自答の  
繰り返しでした。4年目の秋、MIC医療通訳新任  
研修でのロールプレイにおける患者役を担当し  
ました。それが私を研修講師という新たなステッ  
プに導いてくれたのです。



ながのけんいだし  
長野県飯田市にて

いま ねんすうかい たけん いりょうつうやくけんしゅう こうし  
今までに年数回、他県の医療通訳研修の講師を  
担当しました。MIC新任研修の場合は中国語と  
日本語で研修を進行するのに対して、県外の研修  
受講者の母語は様々です。そのため日本語による  
講義となります。構成は①MICの通訳スタッフが  
大切にしている道標となる「医療通訳の心で十ヶ  
条」を中心に、医療通訳に必要な「知識・技術・  
倫理」を講義します。そして、②言語別によるロー  
ルプレイ。受講者が最も関心を寄せるのが①  
医療通訳に必要な専門知識の習得方法、②医療  
現場における通訳の実情、③患者との関わり方  
です。

ロールプレイではさまざまな通訳場面を通して  
訳すことを始め、医療通訳に求められる姿勢や  
適切な現場状況判断などを参加者と共に考えま  
す。講師の医療現場実践経験と合わせて解説し、  
臨場感を帯びる実践的研修を心掛けています。  
最近、医療従事者が研修に参加したり、ロールプ  
レイの医師役を担当しているという話を聞き、  
医療通訳への認知度や関心度が高まりつつあると  
感じています。

たけん けんしゅう たんとう かながわけん  
他県で研修を担当したことから、神奈川県

うに県とNPOとの協働で「医療通訳派遣制度」を運営している自治体は極僅か、一方、既に医療通訳を経験している人は少なくない現状を知りました。人命に関わる医療現場における言葉の壁を取り除くには、個人的な善意だけではなく医療通訳派遣制度の確立、人材育成及び医療機関の受け入れ体制が不可欠と改めて認識しました。また、「医療通訳派遣制度」の下で医療通訳に携わっている自分には恵まれているのも実感しました。今後、医療通訳派遣制度を普及すると言う「ピ

ジョン」に対して、MIC かながわが蓄積してきた多言語の経験とノウハウを如何に社会にフィードバックして共感を呼び、仲間を増やすかということが求められます。それが設立11年目を迎えたMICの新たな「ミッション」であると、各地域の医療通訳研修を通じて思い知らされました。医療現場に育てられた一医療通訳者として研修を通じて頂いた経験をより多くの方々と共有し、社会還元に努めて参りたいと存じます。

## けんごべつじしゅべんきょうかいじょうほう 言語別自主勉強会情報

けんご 言語グループ	にちじ 日時	かいじょう 会場	ないよう 内容
ぜんげんご 全言語・会員	かにさわまさよしせんせい びょうりがく かん こうざ ざんねん きゅうこう 蟹沢成好先生による病理学に関する講座は、残念ながらしばらく休講となりました。 なが いりょうつうやく もと いりょうつうやく ちしきこうじょう きょうりやく かにさわせんせい 長らくMIC かながわ医療通訳スタッフの知識向上にご協力をいただいた蟹沢先生には かんしゃ ねん 感謝の念でいっぱいです。		
スペイン語	4月20日(土) 13:30~15:30	しみんかつどう たぶんかきょうせい みなみ市民活動・多文化共生 ラウンジ 第3研修室	みてい 未定
	まいつきだい どうようび ごご かいさいよてい 毎月第3土曜日の午後開催予定		
ちゅうごくご 中国語	6月29日(土)13:00~	しみんかつどう たぶんかきょうせい みなみ市民活動・多文化共生 ラウンジ	とうりょうびょう 糖尿病
ポルトガル語	4月13日(土) 13:00~16:00	つるみこくさいこうりゅう 鶴見国際交流ラウンジ	けいおうだいがくびょういん のう Dr. George Ito (慶応大学病院・脳 しんけいげか こうぎ しつぎおうとう 神経外科)の講義および質疑応答
	かげつ どかいさいよてい 2ヶ月に1度開催予定		
えいご 英語	5月26日(日) PM	にしくふくしほけんかつどうきよてん 西区福祉保健活動拠点フクシア	みてい 未定
	7月28日(日) PM	みてい 未定	みてい 未定
	9月29日(日) PM	にしくふくしほけんかつどうきよてん 西区福祉保健活動拠点フクシア	みてい 未定
	かげつ どかいさいよてい 2ヶ月に1度開催予定		
タイ語	まいつきだい どうようび ごご 毎月第4土曜日の午後	じむしょ かいさいよてい MIC かながわ事務所に開催予定	
ベトナム語	4月27日(土) 9:30~11:30	にしくふくしほけんかつどうきよてん 西区福祉保健活動拠点フクシア	じんもと いし じび いんこうか ベトナム人元医師 (耳鼻咽喉科 せんもん まね 専門)を招いて

MIC かながわ は twitter や facebook で情報を発信しています。

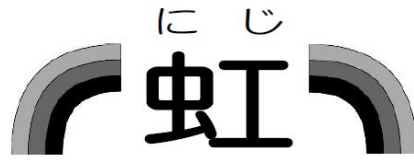
twitter のアカウントは @MIC\_Kanagawa

facebook のページは Mic かながわ [www.facebook.com/Mickanagawa](http://www.facebook.com/Mickanagawa) です。

twitter や facebook にアカウントをお持ちの方は、MIC かながわの活動や情報がより多くの方に伝わるようご協力をお願いします。







ニュースレター No.67 September 2013  
 ミック かながわ  
 MIC かながわ

特定非営利活動法人  
 多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
 横浜市神奈川区鶴屋町3-30-1  
 農機館503

Tel: 045-314-3368  
 Fax: 045-342-7918  
 e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
 URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

ニュースレターは6月・9月・12月・3月発行の季刊紙として、MIC かながわ会員にお届けします。

MIC かながわが主催した『医療通訳フォーラム2013 in かながわ ～地域でともに生きるために～』が、7月13日(土)に盛況のうちに終了しました。  
 ご参加、ご協力いただいた皆様ありがとうございました。

医療通訳フォーラム2013 in かながわ ～地域でともに生きるために～

主催：特非) 多言語社会リソースかながわ (MIC かながわ)  
 後援：神奈川県、財団法人自治体国際化協会 (CLAIR)、公益財団法人かながわ国際交流財団 (KIF)  
 協力：医療通訳士協議会 (JAMI)  
 助成：神奈川県社会福祉協議会 (ともしび助成金)

日時：7月13日(土) 13:00~17:00

会場：かながわ労働プラザ

参加者：フォーラム 154名

(パネリスト、招待者含む)

交流会 77名



第2部 パネルディスカッション ⇒

医療通訳を派遣している団体を愛知県、京都府、兵庫県、北九州市、神奈川県より招き、発表とパネルディスカッションの二部構成で行いました。各地域の状況、医療通訳派遣システム構築過程での苦労、システムの形、抱える課題等を、全国各地からの参加者が共有しました。

(パネリスト敬称略)

1【愛知県】医療通訳者ネットワーク東海 (MINT) 元 愛知県多文化共生推進室 大橋充人  
 運営主体：あいち医療通訳システム推進協議会 (県医師会、病院協会、歯科医師会、薬剤師会、看護協会、愛知県、愛知県内市町村、愛知県立大学、愛知大学、名古屋外国語大学、名古屋学院大学、じむきょく あいちけんちいきしんこうぶこくさいかたぶんかきょうせいしんしつ  
 事務局：愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室)  
 運営事務局：(株)ブリックス

大きな特徴は、行政が民間企業に派遣事業を委託しているところです。24時間電話通訳を行っている会社なので、医療現場で緊急に通訳が必要となった場合も対応できます。通訳者の募集には743名の応募があり、その中から約90名が合格しました。

2【京都市】NPO法人多文化共生センターきょうと 理事長 重野亜久里

運営主体：京都市、京都市国際交流協会、多文化共生センターきょうと  
運営事務局：多文化共生センターきょうと

医療通訳において①通訳者の派遣、②通訳者の養成、③コンピューターやスマートフォンなどのICTを活用した多言語医療支援システムの開発と提供という3つの柱で活動しています。医療通訳者はかなり長い時間をかけ研修を行い、特徴のひとつは、コーディネーターが現場に同行することです。

3【神戸市】NPO法人多言語センター FACIL 理事長 吉富志津代

運営主体：協定病院（神戸市立の3病院）、多言語センター FACIL  
運営事務局：多言語センター FACIL

登録者は他の分野で通訳の仕事をしている人が多く、そういう方たちが、対価としては安いけれど意義を理解して医療通訳に協力しています。医療分野の専門性を磨いて、使命感をもって関わっています。

4【北九州市】済生会八幡総合病院 地域連携室 霜田治喜

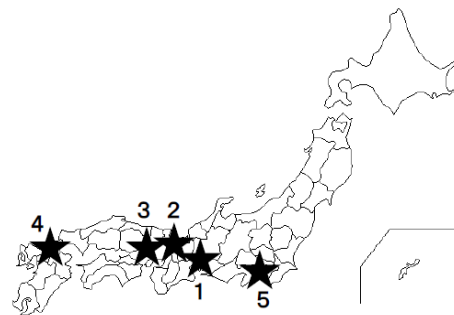
北九州国際交流協会 矢野花織（第2部パネルディスカッション）

運営主体：北九州地域医療通訳派遣運営協議会

（北九州市、北九州国際交流協会、北九州市民通訳協会、済生会八幡総合病院、北九州国際交流団体ネットワーク）

運営事務局：北九州国際交流協会

済生会病院は設立経緯から生活困窮者支援事業を積極的に進めています。その中で、八幡総合病院では在留外国人の支援を行おうということになり、国際交流協会と協働して通訳事業に結びつけました。医療機関側が積極的に参加して事業を行っているのが特徴です。



5【神奈川県】NPO法人多言語社会リソースかながわ

(MICかながわ)

運営主体：医療通訳派遣システム自治体推進協議会（神奈川県および県内市町）、県医師会、県歯科

医師会、県薬剤師会、県病院協会、MICかながわ

運営事務局：MICかながわ

神奈川県の特徴は在住外国人の国籍の多さです。2012年度は県の派遣システム事業の派遣件数だけでも3,600件を超えており、全国一の実績を誇っています。依頼に応じて適切な判断をし通訳を派遣するコーディネーターの存在が、通訳派遣システムの大きな支えとなっています。

韓国釜山からの参加者、「(社)移住民とともに」付設 移住民通訳翻訳センターLINK のハン・アルムさんから、短い時間ながら釜山での取り組みを聞くことができました。言語通訳センターを作る際には、MICかながわも調査に協力した経緯があります。



第2部のパネルディスカッションでは、MIC かながわ理事の沢田貴志がファシリテーターを務めました。事前に収集した参加者からの質問は大きく4つのテーマに分けられ(①システム構築、②通訳の質の確保、③通訳の身分保障、④多様なニーズへの対応や医療通訳の認知)、テーマに沿って議論が進められました。

その地域その地域に適した形があること、制度を作り上げるための苦労は並大抵のことではないということがわかりました。諦めずに努力を続けていけば、どこかで何かにつながる、という希望を感じることもできました。これから医療通訳派遣システムを作ろうと考えている地域に、今回のフォーラムがお役に立てたら幸いです。

### ～報告書について～

フォーラム参加者には無料送付します。  
報告書のみご希望の方には@ ¥1,130 (本体 ¥1,000 消費税+送料)にて販売します。

=内容=

ご挨拶/第1部まとめ/第2部まとめ/アンケート  
集計結果/各地医療通訳派遣システムの特色一覧表  
/参考資料 全54ページ

ホームページよりお申し込み  
ください。  
10月下旬アップ予定



### 神奈川県議会傍聴記

9月19日(木) 神奈川県議会本会議にて、みんなの党  
軽部議員より医療通訳についての代表質問があり、それに対し  
黒岩神奈川県知事からの答弁がありました。

神奈川県は外国籍住民が多いことに加えて、外国企業の  
県内誘致や留学生の受け入れなどを進めている。安心して  
医療機関を利用してもらうためには、現在行われている医療  
通訳派遣システムについて知事はどう評価しているか。また、  
今後どのように展開していくかという質問内容でした。

それに対し黒岩知事は、医療通訳派遣システムのできた経緯  
や現在の状況、実績の説明を行い、全国でも先駆的な『かな  
がわモデル』として参考にされていることなどを回答しました。

質問、答弁ともに医療通訳に対して肯定的な内容でした。  
議会に出席していた議員の皆さんの目に『医療通訳』ということ  
が残ったことを期待します。

### ～書き損じハガキを 寄付してください～

MIC かながわへの寄付活動のひとつとして、書き損じハガキの回収を  
始めました。もし、ご家庭に書き損じ  
ハガキが眠っていましたら、ご寄付を  
お願いします。事務所に送りいた  
るか、現任者研修の際に事務局ス  
タッフにお渡しください。切手に  
換えて事務局での業務に利用させて  
いただきます。

ご協力よろしく申し上げます。





ニュースレター No.74 June 2015

mic かながわ

特定非営利活動法人  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
横浜市神奈川区鶴屋町3-30-1  
農機館503

Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

# 座談会：MICの軌跡

2002年4月にMIC かながわは誕生しました。  
設立以前、当時、直後からMIC かながわに関わって  
いる方たちに、思い出や将来への展望を含めMIC  
への思いをうかがいました。

## 出席者

- 松野勝民 理事長  
済生会神奈川県病院医療ソーシャルワーカー (MSW)
- 岩元陽子 副理事長・コーディネーター・英語通訳  
スタッフ
- 古山季玲 コーディネーター・中国語通訳スタッフ  
(台湾出身)
- 細野紀代子 コーディネーター・スペイン語通訳  
スタッフ
- アンヘル バルガス 事務局スタッフ  
(ペルー出身)

## 進行

内藤まゆみ 理事・事務局スタッフ・コーディネーター  
タイ語通訳スタッフ

## MIC が生まれる前

松野 1990年頃だったか、県社会福祉協議会  
のボランティアセンター（以下ボラセン）  
にいた高橋元央さんから電話がかかって  
きたんですね。県内の外国人支援をして  
いる通訳さんやボランティア団体と呼ん  
でシンポジウムを開いたら、「もう絶対  
病院には行きたくない」「通訳は二度と  
やりたくない」「ストレスだ」という声  
がとても多かった。ボラセンが医療に特化

岩元さん



松野さん

した研修をやりたいので、手伝ってもら  
えないかということでした。

岩元

私、たまたまそのシンポジウムの席に  
いました。怒号が飛び交って收拾がつか  
ない感じだったのを覚えています。でも、  
他人のことなのに真剣に話し合っ  
ているのがすごいと思ったんです。また、  
民間が行政に不満をぶつけるという場  
をあえてつくったボラセンもスゴイと  
思い、感激しました。

松野

1990年に厚生省から在留資格のない  
外国人には生活保護を適用しないという  
口頭通達があったのが、まさに僕が外国人  
医療に関わり始めたきっかけでした。  
当時からうちの病院（済生会神奈川  
病院）は在留資格のない患者さんを  
診ることが多かったのですが、その中で  
生活保護を受けていた人をどうしたらいい

いかと困ったのが最初で、外国人医療にはお金の問題から入ったという感じでした。保険がない。お金がない。病気がやけがをしても病院に行けない。病院側もお金がないなら診ないという診療拒否のような状況も出てきたんです。それはおかしいと港町診療所の早川寛さんや沢田貴志先生とも話して厚生省にも行きました。でも、「オーバーステイの人というのは、いるはずのない人ですよ」で終わってしまいました。入管法上はそのとおりですが、現場のことはわかってもらえませんでした。

お金のこと以外で外国人医療の問題に直面したのは、ある韓国人の患者さんのときでした。重症肺炎で両肺が機能していない。2週間前に来たばかりで日本語は話せない。保険もお金もない。当時の院長がそれでも受け入れ許可を出してくれたのでホッとしたのですが、担当医から「ことばはどうする？」と言われてハッとしました。その時は通訳さんがいっしょに来てくれていたので、ことばのことは全然気にならなかったんですよ。通訳さんがいなくなったらどうしようということになり、救急センターの看護師に入院中にこの患者さんが訴えたいであろうこと、こちらが聞きたいことを書いてもらって、それを通訳さんに訳して書いてもらい、指さして対応しました。検査結果を伝える時は通訳さんに来てもらいました。その後、それぞれの患者さんに合わせた10カ国語くらいのボードができました。指さしの本とか、必要なところを切り貼りして工夫して使っていましたね。

ボラセンの研修は、今のMICの養成研修と同じで、座学をやってシミュレーションをやるという形で、たくさんの方が集まったのでびっくりしました。2002年に横浜でワールドカップが開催される

ことになり、17カ国語の通訳を用意しないと開催できないということで、横浜市から研修を頼まれました。

ふるやま  
古山

ボラセンの研修が終わった時、これは研修だけで、何かするわけではないといわれたんですよ。それからだいぶ経ってから横浜市のワールドカップの研修があって、研修を受ける方としては混乱していました。

まつの  
松野

外国籍県民かながわ会議が2000年10月に医療通訳を制度化してほしいという提言を出して、県が翌年4月検討委員会を立ち上げました。そのときの県の担当が西村明夫さんで、その委員会に沢田先生と僕が入ったんですね。なかなか話がすすまず、とにかく派遣してみませんか、そうしたら問題点も出てくるでしょうと、2002年8月から3ヵ月間モデル事業を行うことになりました。まず準備できる言語と病院を考えました。スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語、タガログ語。この言語には既に活動していて信頼できる人がいたんですね。そして需要のある病院6病院。県の救急補填システムの請求の多い病院で、地域を偏らせず6病院が選ばれました。この制度を運営する団体をつくらうよということでMICがつくられたというわけです。

■MIC誕生  
いわもと  
岩元

放送大学の卒論で神奈川県の外外国人支援団体について書いたんですね。当時はバブルでオーバーステイの問題もありましたが、問題が起こり始めたときだったので、まだ文献はなく、支援団体がたくさん情報を持っていたという状況でした。そのために北村眞佐子さん(MIC初代理事長)にインタビューに行って、たまたま誘われたのが県社協のボラセンがやったシンポジウム。そしてその後MICを立ち上げますという会に参加して、



「事務所必要ですね、専従が要りますよね、お金はどこから出るんですか？」と質問したら、早川さんが「走りながら考えるんですよ。」と答えたのが印象的でした。

まつの  
松野

とりあえず動き出し、3カ月の約束で始めたモデル事業だったんですが、やめられなくなってしまったんですよ。このままやめられたら困ると病院側が言ってきて、その年度の残り5カ月分のお金を県がなんとかひねり出して持ってきてくれました。タイミング良く2003年から県のボランティア活動推進基金をもらったのがラッキーでした。まず病院にわかってもらうために、お試しという感じで使ってもらうことができましたからね。最初、英語は医者が話せるからいらないよね、と思われていたのですが、通訳が必要になるのは診察の場面だけではないということで英語も派遣言語になりました。病院が通訳がいないと治療が進まないということがわかってきたわけですが、ここまで伸びるとは正直考えていませんでした。

ほその  
細野

2002年のモデル事業から登録して、MICに残っている同期はスペイン語では私一人だけです。当時スペイン語は既に先駆者がいました。少しお手伝いできるかなと思って入ったのですが、実際関わってみると医療通訳はなまやさしいものではありませんでした。幸いまわりに志に燃えた人が多く、私のように初めて関わる人間が「助けて」というと、あちこちから手を差し伸べてもらえた状況で、支えてくれる人がたくさんいて恵まれたスタートでした。経験がない分、聞くことすべてを先入観なく吸収できました。自己実現、社会的活動、社会貢献のできる組織に入れたことは嬉しく、そこで十分に活動できる人間でありた

いと思いつつ今にいたっています。



ほその  
細野さん



ふるやま  
古山さん

ふるやま  
古山

同じく2002年のモデル事業から登録して、中国語で残っている同期は他にいません。人を助けるとか深く考えたことはありませんでした。どこかの団体に所属していたわけでもありませんでした。自分の経験から医療通訳がいたらいいなあと思っていました。医者と話すと、自分の口から言うより誰かの口を借りた方が言いやすい時もあったからです。横浜市国際交流協会(YOKE)に通訳として登録していたけれど物足りない感じで、医療では通訳はもっと必要とされるのではないかと思っていました。ワールドカップで知り合った人にモデル事業に誘われた時、時間があつたしチャレンジしたいと思いました。ノウハウ、経験もなく、中国語の医療通訳は基盤がありませんでした。その時スペイン語の通訳たちからヒントをたくさんもらいました。医療通訳は次に何が出てくるのかわからないから毎日が楽しいです。でも、自分の中でのノウハウは蓄積できたけれど、それがいいかどうかはわからないですね。常に自分で見直していかないとはいけません。

いわもと  
岩元

2002年11月からコーディネーター、



2003年10月から英語通訳スタッフとして登録しています。当初コーディネーターブースはひまで、一日中1件も依頼がない日もありました。ある日、暇つぶしにパソコンでゲームをしていたら突然松野さんがブースに現れてあせったのを覚えています。やがて依頼が増え始め、2011年3月の東日本大震災後に一時的に減った以外は一貫して増えてきましたが、最近の激増ぶりはすごいです。今のブースの忙しさは異常ですね。



アンヘルさん

アンヘル 私の場合は、2002年、入院中に面会に来た松延恵さん(初代事務局 長)に誘われて事務局ボランティアになりました。それより前のことですが、症状はだるい、疲れるとかあまり重い症状ではないのに、病院に行ったら、先生の話の中に「死ぬ」ということばが出てきました。日本語がわからない。頭が真っ白になりました。先生が一生懸命話してくれても、もう何も耳に入らなかったですね。1~2週間して、ポリビアに20年くらい住んでいたという看護師さんがスペイン語で話をしてくれました。それは、本当に助かりました。先生は「あなたはこの病気で死にます」と言ったけれど、でもその前に、「透析があります」、その前に、「薬があります」、その前に、「ダイエット」とか。私の理解は「死ぬ」から始まってしまった。自分の経験からMICは絶対必要です。今までずっとそう思っています。

## ■MICと13年間過ごして

松野 本業は病院のソーシャルワーカー (SW)なので、ことばの大切さはよくわかっています。一方、通訳を派遣している NPOにいます。ある意味離れられないという感じかな。活動していると SW の会合でも済生会の松野というより MIC の松野という感じになっていますね。MIC は実績もあるし、誇らしく思います。

アンヘル 日本語がわかるようになりました。会員の交流会とかも楽しい。みな、仲間として、外国人のためにそれぞれの立場で一生懸命やっている。そこが大切ですね。

岩元 こんなに勉強したことはないというくらい勉強しました。コーディネーターとしてブースに入るまでは、自分の医療知識が全く不十分だということすら気づいてなくて、病院からの依頼の電話に「アンギオ※1」「チュウチョウ※2」などという言葉が出てくるんですが、(ハ…?!)でも、知っていて当たり前のように言われると聞き返せない。これを知らなくてそこに座っているの?と思われそうで。

通訳としては、わかるまで聞き返すのが鉄則ですが、まだ通訳になる前だったので、そういう意識もなかったし、とにかく「チュウチョウ」と聞き取ったものを必死で辞書で調べる。それを通訳さんに伝えようとする、「はい、注腸ですね」と、こちらが説明するまでもなく理解しておられるご様子。(コレデハ イカン!!!)と、とにかく一生懸命勉強しました。2002年初年度登録の通訳さんたちは経験がある人が多く、本当にすばしかったです。

※1 アンギオ 血管造影検査

※2 チュウチョウ 注腸検査

古山 自分自身が変わったと感じていないのは、今でも MIC ができた当時の気持ちでやっているからだと思います。通訳の

心得の10カ条はバイブルと同じ。通訳のやり方は当時と変わっていないけれど、今、世の中が変わっていく分、自分も対応していかななくてはいけないですね。

ほその  
細野

私もスタート時の心得の10カ条は守っています。患者さんについて症状などは記憶に残しておくけれど、名前や顔は記憶に残さず、その場で完結するようにしています。医療通訳はプライバシーを守らなくてはいけないので、そこへは入り込まないように気をつけてきました。入念に下調べをした資料をかばんに詰めて、通訳現場に行きますが、通訳中これを取り出す時間はないのですから、できるだけ頭の中に詰めこむべきなのでしょうね。

MICには毎年通訳者必須の現任者研修があります。数年前までは、病理学の名誉教授である故蟹沢先生による基礎医療講座もありました。通訳をするために学ぶことは必要に迫られた私の生涯学習でもあります。命にかかわることですので医療通訳に関連する事柄を学ぶため鋭意努力しています。

患者さんの心に寄り添いつつ、医療スタッフの方たちと良い関係を保ち、中立の立場で通訳を行うのが通訳者の使命です。より良い医療につながれば本当にすばらしいです。

アンヘル

皆、ボランティアの意識が強まっていると思いますね。最初は「試してみようかな」という気持ちだが、時間が経つと、「誰かを助けると自分も気持ちいい」と思うようになる。それでボランティアを続けられていると思います。



ほその  
細野

スペイン語通訳に多いリタイヤ後の人たちは、海外でいろいろな経験をしてきています。その方たちにとってMICかながわは叡知が活かせる場になっているのではないのでしょうか。蓄積された叡知を還元できるいい機会になっていると思います。

スペイン語に限らず、実社会での経験や叡知を活かすことは、少子高齢社会という人口構造に大転換が起こっている現在の社会の重要なファクターではないのでしょうか。報酬が参加者のインセンティブではなくて、MICの理念に賛同した人たちの13年間の活動が残してきた実績がMICの重要性を示しているのだと思います。

■MICの今後  
ふるやま  
古山

MICは13年前から派遣の仕方が全然変わっていないですね。時代が変わってきている中、他団体のやっている方法を採り入れるというのではないけれど、MICも形を変える必要があるかと思います。効率的でないところを改善するとか。

人と人の間のことをするのはサービス業でしょ。ひとりの人をどのように大事にするか、お互い気持ちよくするためにはどうしたら良いか、いろいろなものを利用してやっていくのには今は良い時期ではないのでしょうか。今と同じ形でさらに5年やるのか、今見えてきている無駄な部分を整理するとか、じっくり考える時期だと思います。



いわもと  
岩元

MIC は大きな組織になりましたよね。  
財政基盤は弱いけれど、県や病院とタッグを組んでやっている分、活動基盤は強いです。その分、方向転換するのは容易ではないですが、古山さんのいうことはよくわかります。今後これでいいのか、このまま続いてどうなるのか、考えなくてはいけないと思っています。

ふるやま  
古山

派遣件数も通訳人数も MIC はどんどん大きくなってきて、支えられなくなるのは時間の問題ではないでしょうか。いろいろな事業に手を出しているのでは？ MIC は MIC 現在のやりかたでいいと思いますが、中身の3分の2をレベルアップすればよくて、いろんなところに手をだすのはよくないですよ。結果的に余裕が出るわけでもないし、思った通りにはいかず、結局良くなるわけでもない…。  
先週ブースに入っていて思ったのですが、一般通訳専門のコーディネーターをつかってほしいです。



いわもと  
岩元

そうですね。今の問題は、ベトナム語ですよね。依頼の数に対して、通訳者の人数、しかも動ける人が少ない。「行ける人がいません」と学校に連絡して「はい、そうですか」で終わればいいのですが、学校はどうしても通訳がほしいので、「それでは何日ならよいか？」と聞いてくる。こちらは、ご自分の仕事の合間を縫ってボランティア活動に時間を割いてくれる通訳者の都合を聞く、学校側は保護者の

都合を聞く、これを折り合わせる調整作業が延々と続きます。が、最終的に誰も派遣できなかったとなると、実績はゼロ。あの大変な労力と時間は煙のように・・・です。

ふるやま  
古山

ひとつ提案ですが、MIC の中で、理事会と通訳スタッフはあまりつながっていないですね。MIC は通訳スタッフがいなければ成り立たない団体でしょ。通訳スタッフが理事会に直接意見を言える投書箱みたいなものを置くのはどうでしょう。通訳スタッフがコーディネーターや事務局を介さずに直接理事会にものを言える仕組みをつくったらどうかと思います。理事会のメールアドレスをつかって、通訳さんの思いを把握できますよ。

いわもと  
岩元

例えば自分の言語ではない人からの投書があった場合、結局はその言語のコーディネーターとかに事情を聞くことになるかもしれない。情報を得るためにね。それはOK？

ふるやま  
古山

理事やコーディネーターは言語を超えて考えなければならないと思いますよ。言語ごとに細かく分けることで見えなくなってしまう部分が出てきます。言語ごとに解決を委ねない方がいいかと思います。

いわもと  
岩元

確かに、当初少人数でやっていた時は、全部の通訳さんを相手にしているという感じはありましたね。通訳帰りの人がブースに寄ってこうだったあだったとひとしきり話していくこともあったし。  
当初のマニュアルにはコーディネーターのすべき大事なことの上から何番目かに通訳さんへのフォローがありました。実際にそれに時間を割いていました。今のブースの忙しさではとても対応できません。



## ■MICの将来像

古山 2002年モデル事業のときの説明会では、「先が見えないけれど一応やってみる」と言われました。どこの病院にも通訳が入れる便利さがあっていいですね。一番の理想です。今のMICは覚書を交わしていない病院には入れないところに引っかけます。

松野 今の時点では仕方ない。今すぐはむずかしいですね。

岩元 患者さんが「来て」というどこの病院にも行けるのは理想だけれど、通訳スタッフやコーディネーターなど人的資源は無限ではないので、どこかで妥協も必要かな。

松野 通訳の派遣体制、医療に限らず外国籍住民の生活支援について、最終的には国レベルで支えられるようなシステムができればいいと思います。件数は確かに増えていて、実績にはなっていますが、これからのことを考えると、国・行政レベルで右を向いているのにMICだけ反対を向くのは難しいと思うし、状況に合わせてやらなくてはいけない時もあるのかなと思います。

MICは県内の外国籍住民の支援を残したままやっていきたいけれど、やり方は変わっていくかもしれない。派遣の仕方でも工夫が必要になるでしょうね。

県もこの事業をなくすわけにはいかないというのはわかっています。MICがつぶれたらこの事業もつぶれるでしょう。なんとかやっていかななくてはいけないけれど、限界はあるだろうな。MICの形が変わったとしても、次につなげられる母体ができている事業をつなげていけるということが大切ですね。神奈川県に住んでいる外国籍住民が安心して医療を受けられるような形が、MICを通さなくてもできればいいなあということですね。



座談会を終えて

## ●2015年度MICかながわ定期総会

日時：5月30日(土) 総会 13:30~15:00 交流会 15:30~17:00  
会場：港湾労働者福祉センター（港町診療所2階）

正会員数：79名

直接参加：30名、書面表決：26名、委任状：7名（定足数確認時）

2014年度事業報告、決算報告、監査報告、2015年度事業計画、予算、役員改選、定款の変更の7議案は、特に大きな異議もなく無事承認されました。第6号議案役員改選の議案承認後臨時理事会を開催し、理事長には松野勝民現理事長が再選されました。

引き続き行われた交流会では、持ち寄った料理等を囲んで親睦を深めました。大ヒットした『アナと雪の女王』の主題歌「Let it go」を10カ国語で歌い、MICかながわらしい和やかな会となりました。

## MICのイベント(報告)







ニュースレター No.78 June 2016

MIC かながわ

特定非営利活動法人  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2  
かながわ県民センター内  
Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

ニュースレターは6月・9月・12月・3月発行の季刊紙です。

## 特集：多言語支援センターかながわ

### 多言語支援センターかながわがグランドオープンしました

前回のニュースレターでもご案内した「多言語支援センターかながわ」は、6月20日に開所式が行われ、いよいよ本格的な業務が始まりました。

センターでは、神奈川県に住む外国籍の人や県に立ち寄った外国の方に向け、英語・中国語・ベトナム語・タガログ語・やさしい日本語で、情報提供や通訳支援を行います。

MIC かながわは、かながわ国際交流財団 (KIF) と共同で県から委託を受け、おもにコールセンター「多言語ナビかながわ」の業務を担当します。「保健医療」「子育て支援」「災害」などについて、多言語スタッフが目替わりで電話による情報提供を行います。

開所にあたり、MIC かながわの松野理事長は「2002年のMICの設立から15年目を迎え、昨年度は県との協働事業である医療機関への派遣を中心に、学校・児童相談所などをあわせて計6,923件の派遣実績があった。MICは組織は小さいが、人材は豊富。県・KIFと補完しあいながら、外国籍県民の生活支援を行ってきたい」と挨拶をしました。



(写真左より)  
神奈川県副知事 中島正信氏  
かながわ国際交流財団理事長 高橋忠生氏  
MIC かながわ理事長 松野勝民氏

### 多言語支援センターかながわ 除幕式





English 中国語 Tagalog Tiếng Việt やさしい日本語

4言語及びやさしい日本語で電話による情報提供をします！

Tagengo Navi Kanagawa

# 多言語ナビかながわ

Multilingual Navigation Service

病院に行きたいけど、日本語がわからないから困ったな。通訳を頼むにはどうすればいい？

そろそろ仕事を始めたいけど、子どもを保育園に入れるにはどうしたらよいかしら？

「多言語ナビかながわ」は、「保健医療」「子育て支援」「災害」などの分野について、電話による情報提供をします。英語、中国語、タガログ語、ベトナム語、やさしい日本語でスタッフが対応します。

電話番号 / TEL **045-316-2770**

電話・来所受付時間 ▶ 午前9時から12時 / 午後1時から4時

※ 来所受付時間は午後5時45分まで（日本語のみ）※ 土日・祝日・年末年始及びかながわ県民センター休館日を除く

ことば	月 Mon	火 Tue	水 Wed	木 Thu	金 Fri
英語 English		●		●	●
中国語 中国語	●		●	●	
タガログ語 Tagalog			●		●
ベトナム語 Tiếng Việt	●	●			
やさしい日本語 にほんご	●	●	●	●	●

場所 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 かながわ県民センター13階  
「横浜駅」西口・きた西口を出て、徒歩およそ5分  
※ 通訳は、神奈川県 (K.P.G.) から委託された2団体が行います。  
公益財団法人かながわ国際交流財団 (Kanagawa International Foundation)  
NPO法人多言語社会リソースかながわ (Multi-language Information Center Kanagawa)

URL <http://www.kifjp.org/kmlc>

「多言語ナビかながわ」では、在住外国人などが役所の窓口や病院、学校や幼稚園・保育園など、県内の公共サービスを利用するためのお手伝いをします。

相談窓口ではなく、情報提供を行うことが目的のため、相談を希望される方にはケースに応じて相談窓口を紹介しています。英語は火・木・金曜日、中国語は月・水・木曜日、タガログ語は水・金曜日、ベトナム語は月・火曜日といった形で、1日2言語で対応します。また、やさしい日本語は毎日対応可能です。

「医療通訳を使うためにはどうすればいいか」「〇〇語の通じる病院を教えてください」「子どもを保育園に入れるにはどうしたらよいか」など、困っているお知り合いの方がいらしたら、ぜひお声かけください。

★場所：横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2  
かながわ県民センター13階  
(横浜駅西口/きた西口を出て、徒歩5分)

★電話番号：045-316-2770

★受付時間：月曜日から金曜日  
(土日・祝日・年末年始及びかながわ県民センター休館日は休み)

【電話】午前9時～12時 / 午後1時～4時

【来所】午前9時～12時 / 午後1時～6時

※最終受付時間 午後5時45分  
※来所相談はかながわ国際交流財団内で実施

★対応言語：4言語（英語、中国語、タガログ語、ベトナム語）及びやさしい日本語

英語 ● English

### Multilingual Navigation Service

Provide information about Healthcare, Childcare, and Natural disasters by telephone service.  
English: Tuesday/Thursday/Friday  
(Telephone service / Counter service) 9AM - 12PM / 1PM - 4PM  
※Counter service available until 5:45PM (Japanese only).  
※Closed on Saturday, Sunday, New Year holidays and when Kanagawa Kenmin Center is closed.  
TEL **045-316-2770**  
※Tagengo Navi Kanagawa is operated by two organizations entrusted by Kanagawa Prefectural Government (K.P.G).

中国語 ● 中国語

### 多种语言导向电话神奈川

为不以日语为母语的外国籍居民，包括医疗保健・育儿支援・灾害等方面，提供多种语言的信息。  
中国語：星期一・三・四  
(电话・来访受理时间) 上午9点至12点 / 下午1点至4点  
※ 来访受理时间到下午5点45分止。(仅限日语)  
※ 周末・节假日・年末年初以及神奈川县民中心休馆日除外  
TEL **045-316-2770**  
受托神奈川县 (K.P.G.) 的两个团体经营业务。

タガログ語 ● Tagalog

### Gabay sa Iba't-ibang Wika ng Kanagawa

[Gabay sa Iba't-ibang Wika ng Kanagawa] ay naghahatid ng impormasyon buhat sa pagtawag tungkol sa [Segurong Pang-medikal] [Suporta sa Pagpapalaki ng Bata] at [Kalamidad].  
Tagalog: Mlyerkules/Blyernes.  
Oras ng Tanggapan (Pag-tawag / Pagdalaw) 9:00 - 12:00 / 1:00 - 16:00  
※Oras ng Pag-dalaw: hanggang 17:45 lamang (Nihongo)  
※ Sarado: Sabado, Linggo, Pistang opisyal / Bagong Taon at maibsan sa bakasyon ng Kanagawa Kenmin Center  
Telepono **045-316-2770**  
※Pinamamahalaan, Munisipalidad ng Kanagawa (K.P.G) pinagkatiwala sa 2 samahan.

ベトナム語 ● Tiếng Việt

### Hướng dẫn tổng hợp đa ngôn ngữ Kanagawa

[Hướng dẫn tổng hợp đa ngôn ngữ Kanagawa] cung cấp thông tin liên quan đến các lĩnh vực [Bảo hiểm, y tế, bệnh viện] [Hỗ trợ nuôi dạy trẻ] [Thiên tai] v.v... qua điện thoại  
Ngôn ngữ/Ngày làm việc: Tiếng Việt/ Thứ 2, thứ 3  
(Thời gian nhận điện thoại / Trao đổi tại quầy) Sáng từ 9h đến 12h/ Chiều từ 1h đến 4h  
※ Từ 4h đến 5h45 chỉ nhận trao đổi tại quầy bằng tiếng Nhật  
※ Ngày nghỉ: Thứ 7 / Ngày nghỉ / Tết và những ngày Kanagawa Kenmin Center nghỉ  
Số điện thoại **045-316-2770**  
※ Việc điều hành trung tâm được tiến hành bởi 2 đoàn thể được ủy nhiệm bởi tỉnh Kanagawa (K.P.G)



「多言語支援センターかながわ」は、4月20日にプレオープンし、一日一言語での電話による情報提供を行いながら、県内各地で活動する外国につながる方々の支援団体・自治体・学校の担当者と関係性を結んだり、外国語で受診できるクリニックの情報を集めたりと「つなぎ先」との連携を強化するなど、MICとKIFのスタッフが一緒になって準備をすすめてきました。

今後、外国人支援に携わる行政の職員に対する研修や、通訳が足りない言語のボランティア通訳を養成する研修なども行っていきます。

保健師や社会福祉士の資格を持つ専門職の方や、自身も外国につながる神奈川県民で地域でのボランティア経験が豊富な方など、さまざまなバックグラウンドを持ったKIFのスタッフと、医療・一般通訳の派遣を通して、外国籍の方々の「いのち」と「くらし」を長年支えてきたMICかながわのスタッフが、神奈川県の声かけのもとタッグを組み、在住・来県外国人の皆さんを適切な支援につなげていければと考えています。

行政と財団法人とNPOが協働で、このような機能をもったセンターを運営するのは全国でもあまり例がありません。

MICかながわのこれまでのコミュニティ通訳活動の実績が認められた結果だと嬉しく思うとともに、これからも期待に応えられるよう一層活動を充実させていきたいと考えています。

## 「多言語支援センターかながわ」の業務内容

- 1 外国籍県民等のためのコールセンター(多言語ナビかながわ)等の運営  
2ページ参照

- 2 希少言語等専門人材の確保・育成  
ベトナム語・タガログ語などの通訳者が不足している言語(希少言語)の専門人材を確保し、育成のためのスキルアップ研修等を実施します。

- 3 支援人材育成  
地域において外国籍県民を支援する人材を対象として、外国籍県民を取り巻く環境や支援方法等について研修します。





ニュースレター No.85 March 2018

MIC かながわ

特定非営利活動法人  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
よこはましかながわくつるやちやう  
横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2  
かながわ県民センター内  
Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail  
MICkanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://MICkanagawa.web.fc2.com/

ニュースレターは6月・9月・12月・3月発行の季刊紙です。

## 特集：かながわ一般通訳支援事業



### ～ 一般通訳ってどういう通訳？ ～

医療通訳は医療機関での通訳。では、一般通訳はどのようなところで行われる通訳でしょうか？  
神奈川県では、公共機関で行われる通訳を一般通訳として、登録している一般通訳協力者を派遣しています。

医療通訳は神奈川県とMIC かながわが協働で行っている通訳派遣事業ですが、一般通訳はMIC かながわが神奈川県より受託して行っている事業です。2018年度からは受託の形が変わり、多言語支援センターとしての受託になります。MIC かながわが通訳を登録、コーディネートし、年2回の研修会を行うという形は変わりません。

これまでに派遣実績のある主な機関は次のとおりです。

- ① 県立高校
- ② 県立養護学校
- ③ 児童相談所
- ④ 市町立小中学校
- ⑤ 家庭裁判所※
- ⑥ 認可保育園

※ただし、調停のみ。裁判には派遣できません。

①～④の依頼は、それぞれの公共機関から依頼が来ます。⑤⑥については、外国籍住民から直接依頼の電話が来ることがほとんどです。通訳料は、3時間まで3,240円（税、交通費込み）です。

依頼者	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
県立高校	112	118	132	141
特別支援学校(養護学校)	26	35	54	72
児童相談所	37	35	18	30
外国籍県民	15	8	8	29
その他	21	19	12	43
合計	211	215	224	315

一般通訳の依頼、特に高校からの依頼は増えています。神奈川県教育委員会を通して通訳支援事業について周知されたことも一因ですが、外国につながる生徒が増えてきていることも確かでしょう。また養護学校からの依頼がこの4年間で3倍に増えていることは、外国につながる子どもたちの抱える問題を映し出しているようです。





ニュースレター No.93 June 2020

みっく MIC かながわ

特定非営利活動法人  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
よこはましかながわくつるやちよう  
横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2  
かながわ県民センター内  
Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

2020年よりニュースレターを半期に一度の発行とし、6月末と12月末にホームページに掲載することになりました。

嬉しいお知らせです。昨年11月に認定NPO更新申請を行い、横浜市民活動支援課による実態確認を受け、2020年度から5年間の更新が決定しました。今後とも、ご協力、ご支援、どうぞよろしく願います。

## 特集：新型コロナウイルス禍中でのMICかながわ

### 第1部 第1例目発生は神奈川県

#### 第2部 武漢からの帰国者チャーター便

#### 第3部 禍中で行われた医療通訳スタッフ・コーディネーター現任者研修

#### 第4部 対面通訳から電話通訳へ

#### 第5部 コーディネーター・医療通訳スタッフの感想

### 第1部 第1例目発生は神奈川県

2020年の年明けとともに、中国湖北省武漢市で確認された原因不明の肺炎に関するニュースが毎日流れてくるようになりました。「人から人への感染はない」としていたWHOも、後日「限定的な人から人への感染が起きる可能性がある」と指摘し、1月30日には新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」に当たると宣言しました。

1月15日、神奈川県内で報告された武漢市に滞在歴がある肺炎の患者が日本での感染者1例目として確認されました。1月下旬には、政府がチャーター機を手配し、武漢から日本人およびその家族を帰国させることになりました。

1月31日、MICかながわ事務局は、理事で港町診療所所長の沢田貴志医師に相談し、医療通訳スタッフに対し厚生労働省新型コロナウイルスQ&AおよびWHOのサイトを紹介するとともに、MICかながわの対応を通知しました。新型コロナウイルス感染症の患者さんに対する通訳については、『当面全面的に別室もしくはMICかながわ事務所での遠隔通訳とし、基本的に患者さんや様子観察者との接触はなしとする。』そして、不安があるときは無理をしないでほしいという旨を伝えました。

2月3日、感染者が出たクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号が横浜港接岸。神奈川県は新型コロナウイルス感染症に関してさらに全国的な注目を浴びることになりました。感染者を受け入れたであろう協定医療機関からも「新型コロナで重篤な外国人の患者さんへの説明に通訳を派遣してもらうことはできますか？」という問い合わせがありました。結局、依頼は来ませんでした。MICの対応をお伝えし、「条件が整えば受け付けはできますが、依頼を受けてくれる通訳スタッフがいるかどうかが次の問題になります」と返事をしました。

未知の感染症であるがゆえに情報の混乱もあり、ボランティアの通訳スタッフを医療機関に派遣するNPOとしては、考えなければならないことがたくさんありました。

## ■■ 第2部 武漢からの帰国者チャーター便 ■■

2月5日、内閣官房事態室からMIC かながわ事務局に、武漢からの帰国者支援のための中国語医療通訳派遣を打診する電話があり、理事会および事務局で検討のうえ、派遣を決定しました。

2月7日より、中国語医療通訳4名を交替で派遣することになりました。その後、感染防止の観点から安全性を確保するため、通訳場所を横浜市神奈川区の港湾労働者福祉センター（港町診療所3階）に移し、電話、パソコン、FAX を使っての通訳および翻訳チェックに対応することになりました。3月2日は最終のPCR検査結果通知の日なので現場に来てほしいという要望の下、中国語通訳スタッフは和光市に出向きました。結果として税務大学校寮に入居していた人たちからはひとりも陽性者が出ることはなかったとのことでした。

### 【税務大学校寮通訳体験談】

…草間久美……………

降って湧いたような内閣官房事態室からの通訳依頼に、前日まで半信半疑、どちらかというキャンセルになるだろうと呑気に構えていたのが現実のものとなり、2月7日、武漢からの帰国チャーター第4便が到着した日に、和光市の受け入れ施設に向かいました。

対面通訳はしない、翻訳はしない（簡単なメモ程度のもは構わない）という条件だったので、現場では内線電話での対応、省庁から中国語対応要員として派遣されていた職員の後方支援を担当しました。施設の1階、入口に近い一室が事務局となっていて、MICの通訳も事務局で他の省庁の皆さんと過ごしました。

2月7日は中国人を含む帰国者受け入れの初日だったので、受付の流れのシミュレーションに中国人役で立ち合い、気が付いたことをアドバイスする場面もありました。

施設内では感染防止の配慮もされていたし、沢田先生からのアドバイスに従い気をつけていたので、感染はあり得ないと思っていましたが、到着後各居室に向かう帰国者の人たちが事務局のすりガラスの向こうに見えた時は、さすがに生々しい現実感を覚えました。しかし後タクルーズ船に関する報道などを見ると、武漢帰国者受け入れ施設ではゾーニングなど感染予防によく努めていたことがわかります。

第4便も、2月17日に到着した第5便も、帰国2週間後のPCR検査で入所者全員陰性との報告を受けた時、内線電話で話をしたあの人この人も皆無事に帰宅できるのだという喜びが湧き上がるのと同時に、施設内で感染がなかったことに心底ホッとしました。

内閣官房を中心とする各省庁職員、DMATの医師や感染管理専門の看護師がチームとなり、武漢からの帰国者を生活面、医療面でサポートする現場に関わり、得難い経験をさせていただきました。大変な現場でしたが、雰囲気はフレンドリーで、中国語に興味を持っている人が多かったのも嬉しいことでした。

このような機会をあっという間に整えてくださった理事会、事務局の采配に心より感謝しています。ひとりで和光に行くのは緊張もしましたが、理事や事務局の皆さん、MIC かながわに守られていることは何よりも心強かったです。今回学べたことを何らかの形で役立てられるよう願っております。

……………ふるやま きれい……………

2月上旬、武漢からの帰国チャーター第4便に合わせて、MIC かながわの中国語医療通訳派遣が始まりました。場所は、埼玉県和光市国税庁所管の税務大学校和光校舎内の学生寮でした。通訳として集まった専門家と行政関係者達が立ち上げたばかりの管理センターに大挙し、まるで災害センターのように見えました。



MIC の通訳は運良く、この派遣開始の1週間後に現任者研修で沢田先生より新型コロナウイルス感染症のレクチャーを受けることができました。医療通訳の派遣を希望した内閣官房は、新型コロナウイルス感染症への当初の認識の違いに気づき、急きょ、対面通訳から電話通訳へと切り替えました。私も沢田先生のお話からこの新しい感染症に恐怖を感じ、予防のための工夫を自分なりに真剣に考えました。

和光校舎寮に MIC の通訳が入った時は約130名の中国人入居者がいました。文化の違いから生じるさまざまな問題がありましたが、通訳を介した結果、入居者も管理側も納得して解決できたと思います。

今回、この禍は私にとって初めての経験でした。この感染症で失った物は多かったですが、また、得た物も数え切れないほど多いと感じました。

目に見えないウイルスと戦うには、国を挙げ、各分野の専門家との連携が必要です。今回の通訳派遣では、内閣府をはじめ厚労省、外務省、防衛省など各省が連携してお互いの知恵を出し合い、感染者をできるだけ増やさないように頑張ってきました。私は MIC の通訳として、今まで蓄積した医療通訳の経験と知識を基に、通訳の心得を忘れずに、普段と変わらない通訳ができたと改めて強く思っています。そして、この新型コロナウイルス感染症が早急に収束することを祈っています。

### ◆◆三木紅虹◆◆

私は2月11日初めて和光寮に行きました。まだ第4便が来たばかりのときで、受け入れ側の対応は内閣府、自衛隊、厚労省、さらに自治体それぞれの指揮系統と現場での連携がうまくいっていないようで、落ち着かない状態でした。

未知のウイルスによる感染症だけに、みんなが一抔の不安を抱えていたことは同じだと思います。空気感染はしないと言いつつ、「エアロゾル」という聞き慣れない言葉がちらほらマスメディアに出てきていました。MIC の通訳は帰国者と直接的な接触がないことになっていますが、ほかのメンバーが衣服のまま帰国者の居室とスタッフの詰所の間で行き来していたので、完全な防御とは言えませんでした。

そんな中でも、さすがに各部門のスタッフは優秀な方揃いで、てきぱきと分担を固め、仕事を見つけて積極的に入居者たちへのサポートをしていました。私が参加した2日間は医療に関する通訳はありませんでしたが、メンタルヘルスに関するアンケートの翻訳がありました。DMAT と DPAT という災害派遣システムにも初めて触れることができました。

最初に想定していた医療関係の通訳はありませんでしたが、入居者の生活上の不安やトラブルのサポートをすることができました。例えば、毎日のお弁当に飽きて外から食べ物を注文したものの、生ものため結局持ち込みができなかったとき、自分が食べるのにどうしてダメなのかを説得するには、きちんとした理由が必要です。どう言えば中国人が納得しやすいかというこちらのアドバイスを聞き入れ、お知らせなどの文言を直してくれました。

2回目に行ったときは防御態勢が改善され、スタッフが帰国者と接触するときは防護服を着るようになり、控室に戻るときにはそれを脱いでから入るようになりました。さすがです。



### ◆◆佐藤ペティ◆◆

税務大学校和光寮の事務局は、私が想像していた以上にたくさんのスタッフがいました。通訳班としてMIC かながわの通訳スタッフ以外に外務省の女性職員1名と防衛省の男性2名が来ていました。その3人に対して個別中国語講座のような時間もありました。3人とも中国語で積極的に話しかけてきたり、質問してきいたりしました。とりわけ外務省の女性職員は通訳を目指したいとのこと、一生懸命中国語で会話する姿勢に感心しました。

和光寮での一日を振り返ると、確かに医療に関する通訳サポートは少なく、決まっている業務もなかったのですが、私たちMIC の通訳スタッフの存在は、省庁から来ていた通訳スタッフにとっては、安心につながるものであったと思います。

じっさい とうやくないよう せいかつじょう ようぼう おお ことば つう かんたん  
実際にどのような通訳内容があったかという、生活上の要望が多く、言葉さえ通じればとても簡単なものでした。  
かしつき あたし しよくじ りにゆうしよく こ 子どものためのジュース、絵本、おもちゃ、掃除道具など。それらを通訳班が聞き  
と ぶつし たんとう べつ はん つた まいにちにゆうきよしや はいふ きょう し ほんやく  
取り、物資を担当する別の班に伝えるというものです。また、毎日入居者に配付する「今日のお知らせ」の翻訳  
チェックもしました。

こんかい つうやくはけん わたし てあら い いがい じむきよく あんしんあんぜん かんきょう ぎょうむ  
今回の通訳派遣では、私はお手洗に行くとき以外はずっと事務局におり、安心安全な環境で業務  
おこな おも  
を行うことができましたと思います。

### ■ ■ 第3部 禍中で行われた医療通訳スタッフ・コーディネーター現任者研修 ■ ■

2月15日(土)午後には、2019年度第3回医療通訳スタッフ・コーディネーター現任者研修が予定  
されておりました。

研修前夜のこと。講師から「開催にあたっては参加者のマスク着用と入場時のアルコールによる  
手指消毒の用意をしたほうがよい」「風邪のような症状のある人は参加を見合わせてもらったほうが  
よい」という助言の電話がありました。

いそ じ むきよくちょう ふく たんとうしやかん そうだん さわだせんせい れんらく たいまく きょうぎ しゆし  
急ぎ事務局 長を含め担当者間で相談。沢田先生に連絡をとり対策を協議しました。マスク、手  
しょうどくよう みなとまちしんりようじょ きふ けんしゅうだい ぶ よてい  
消毒用アルコールは港町診療所から寄付してもらえらることになり、研修第2部で予定していたグ  
ループディスカッションを急ぎよ沢田先生からの新型コロナウイルス感染症についての講義に変更  
しました。けんしゅうとうじつ こぜんちゆう きゆう あんない しんがた かんせんしゅう こうぎ へんこう  
研修当日の午前中、急なメールでの案内にもかかわらず、参加者はほぼ全員がマスク着用  
で研修に臨んでおり、さすが！と感動しました。

だいふ こうぎ さわだせんせい しんがた かんせんしゅう さいしんじょうほう くわ  
第2部の講義では、沢田先生より新型コロナウイルス感染症についての最新情報に加え、MIC かな  
がわの基本姿勢をあらためて通訳スタッフの皆さんに伝えました。

『感染者への対面通訳は行わない』

『行うときは院内別室からの電話、あるいは遠隔通訳とする』

げんにんしやけんしゅうご はい じよじよ しちゆう ふしよくふ にゆうしゆ むずか  
現任者研修後、3月に入ると徐々に市中で不織布マスクの入手が難しくなってきました。そのよう  
なとき、通訳スタッフやMIC かながわ手芸部の手作りマスクが事務局に届きました。感激！事務局ス  
タッフやコーディネーターがまず手作りマスクを使わせていただくことになりました。

あつちゆうごくごつうやく し あ べきん ちゆうか およ ちゆうごく こうりゆう  
その後には、中国語通訳スタッフの知り合いの北京にある中華レストラン及び中国と交流がある  
「ノーモア南京の会」からの寄付で、不織布マスク、使い捨てゴム手袋等をいただきました。これらは、  
はけん さいかい つうやく つか かんが ほんとう  
派遣が再開されたときに通訳スタッフに使っていただきたいと考えています。本当にありがとう  
ございました。



えいごつうやく  
英語通訳 Yさんより



しゆげいぶ  
MICかながわ手芸部より



ちゆうごくごつうやく  
中国語通訳 Sさんの  
知り合いの北京の  
中華レストランより



「ノーモア南京の会」より

いま  
今でこそ、さまざまな布マスクの市販品を見か  
けますが、この頃は市中にはまったく出回って  
いない頃でした。



## ■ ■ 第4部 対面通訳から電話通訳へ ■ ■

4月に入ってから、神奈川県国際課と今後の医療通訳派遣について検討が始まりました。

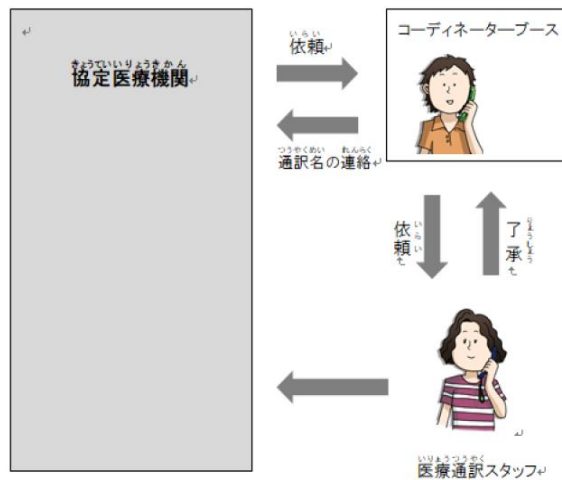
4月7日 緊急事態宣言発令。

4月10日 神奈川県国際課課長名で、『4月13日(月)より8月31日(月)まで派遣を中止し、電話通訳で対応する』旨の文書が県内市町村と各協定医療機関にメールで配信されました。医療通訳スタッフに向けて、派遣が中止になることを伝え、4月13日より県民センター内の『通訳室』から電話通訳対応をするため、協力できる人を募りました。お子さんが家にいるようになり外出が難しい、ご家族に高齢者がいる、ご自身やご家族の健康の問題等、通訳スタッフの皆さんがそれぞれの事情を抱えていました。

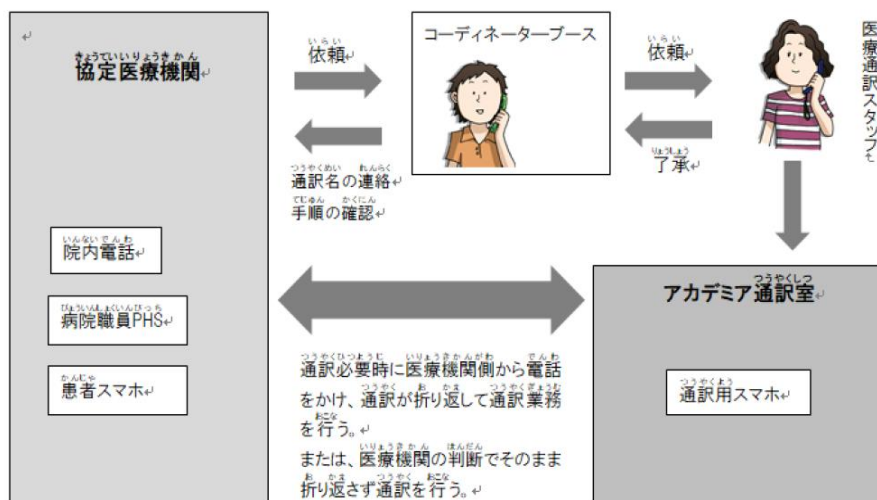
4月13日 医療通訳派遣中止。

通訳活動の完全な休止ではなく、臨時的な措置として電話通訳に切り替えて対応できるものは対応することになりました。電話通訳に必要なスマートフォンの調達、通訳室として使用する場所の確保は国際課が対応することになりましたが、折しも多くの会社がリモートワークになったためか、スマートフォンの調達はことのほか難しかったようです。環境が整うまで県民センター内でMICが用意できたスマホ1台とPHS 2台、計3台でのスタートとなりました。

### 対面通訳派遣の流れ



### 電話通訳の流れ





ニュースレター No.94 December 2020

みっく  
MICかながわ

とくていひえいりかつどうほうじん  
特定非営利活動法人  
たげんごしゆかい  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
よこはましかながわくつるやちやう  
横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2  
かながわ県民センター内  
Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

ぜんせかいがしんがた  
全世界が新型コロナウイルスの影響を受け、年越しの風景は例年とはまったく違う様相になりました。オリンピック・パラリンピックが延期され、全国から来日外国人観光客の姿がなくなり、このような年の瀬を迎えるとはまったく、2020年の年明けには想像できませんでした。

MIC かながわも、まだ何をやるにも試行錯誤の状況です。そのような状況に励ましの声を送ってくださる登録通訳の皆様、関係者の皆様、本当にありがとうございます。2021年が皆さまにとって少しでも良い年になりますように。

2021年、生活様式は with Corona から after Corona に転換できているでしょうか。それともまだ with Corona の真っ只中にいるのでしょうか。人間の知恵や行動がウイルスを上回ることを願います。

MIC かながわ事務局とコーディネーターブースの年末年始の休業日は、12月29日(火)~1月3日(日)です。1月4日(月)午前9時より通常業務となります。どうぞよろしくお願いいたします。

## 特集：新型コロナウイルス禍中でのMICかながわ その2

### ■ 対面通訳から遠隔通訳へ そして対面通訳再開 ■

4月13日(月)から、神奈川県では対面での医療通訳派遣を中止しました。マスクや消毒薬などは既に市場から姿を消し、加えて全国的にリモートでの業務が推奨され始めたため、スマートフォンなどのリモート機器もすぐには手に入らない状況になっていました。

5月11日(月)より、神奈川県国際課が準備したスマートフォン5台と県立国際言語文化アカデミアの通訳室、MIC かながわ提供のパソコン1台による遠隔通訳が始められました。遠隔通訳の流れについては、MIC かながわニュースレター前号に説明がありますのでご覧ください。

遠隔通訳に移行してからは協定医療機関からの依頼も少なくなり、電話での通訳は平均1日3~4件程度という日が続きました。コーディネーターは、横浜駅に近いかながわ県民センターでの勤務と、JR根岸線本郷台駅に近いアカデミアでの勤務という二重体制になりました。

MIC かながわは、週1日あるいは週2日で定例通訳(決まった曜日、決まった時間帯に通訳が医療機関に常駐)を港町診療所と平塚市民病院に派遣しています。その定例通訳も4月13日(月)以降は遠隔通訳あるいは派遣中止という形をとっていましたが、医療機関側からは一日も早い対面通訳再開の希望がありました。医療通訳スタッフが安心して活動できるか感染対策等の状況を把握し、7月より港町診療所、平塚市民病院と順次対面通訳を再開しました。

7月17日(金)、神奈川県国際課から協定医療機関に宛てて、対面通訳再開に向けての感染防止対策等医療機関側の受け入れ態勢を把握するためのアンケートを送りました。それに合わせて、MIC かなが



わも登録医療通訳スタッフに宛てて、対面通訳再開に向けての通訳活動参加の可否を伺うアンケートを送りました。医療通訳スタッフの中にはそれぞれの事情から、今の状況ではまだ対面通訳の通訳活動に参加できない人も多く、活動可能な医療通訳スタッフの数は全体の半数以下となりました。

9月1日(火)からの対面通訳再開が決まり、国際課提供のサージカルマスク4,000枚、フェイスシールド200セット、少し遅れて消毒用アルコールスプレーと除菌ガーゼ、除菌シートがMICかながわ事務局に届き、順次必要な医療通訳スタッフに手渡していきました。また、12月には追加のフェイスシールド(メガネ付き120セット、シールド400枚)が届きました。



## ■ 遠隔通訳と対面通訳を経験して ■

医療通訳スタッフの中から、遠隔通訳を経験した人に感想を寄せてもらいました。MICかながわで行った電話通訳の方法は病院によって異なりますが、多くは患者さんのスマホの番号と通訳用のスマホの番号を交換し、通訳が必要な場面で患者さんから通訳用スマホに連絡が入り、折り返して通訳を行うというしくみです。



「実は昨日当院の研修医からコロナ陽性者が出ました。産婦人科では濃厚接触者はいませんが、それでもこの病院で出産を希望しますか？」

この通訳を終えて帰宅し、ふとテレビを見たら、さっきまでいた病院の前でレポーターが院内感染の取材をしている映像が流れているではありませんか！

4月2日(木)この日を境に対岸の火事であったコロナ禍が急に身近に感じられ、気のせいか頭痛がするようになる気がして、派遣はしばらくお休みさせてもらうことにしました。しかしほぼ同時期に、依頼が派遣から電話通訳に切り替わり、すぐに通訳復帰をしました。

社内会議等で遠隔通訳は経験していましたが、MICの電話通訳は勝手が違っていました。手順マニュアルは作成されていましたが、現場に通訳がいれば起こらないような行き違いや、実際の通訳開始までマニュアル通りにいかないこともありました。ただひたすら電話の前での待機となると、本当に通訳が必要な場面は発生するのだろうかとかやきもきしたことも何度もありました。

そしていざ通訳が始まると、その場の雰囲気がかめない、患者さんの表情がわからない、声がよく聞こえない、患部が見えないなど不利な状況下で通訳をしなければなりません。そのためいつも以上にゆっくりはっきり、そして確認しながら通訳をしました。通常なら通訳時には使わない三人称も使いました。Zoomだと画像が見えるだけでもだいぶストレスは減りました。その一方で、相手から見えないおかげで資料を机の上に広く並べておくことができ、安心材料になりました。

電話通訳に慣れてきた9月、MICの病院派遣が再開されました。体調管理に留意しフェイスシールドをつけての新しいやり方です。ソーシャルディスタンスを保つので少しよそよそしくはなりましたが、それでも電話よりはるかに患者さんに寄り添うことができます。電話通訳を経験したからこそ、対面式の通訳がいかにやりやすいかを再認識することができました。

今後は遠隔と対面のハイブリッドになっていくと思いますが、やはり対面式で医療通訳を頼んで良かった、と思われる世の中に戻ってほしいものです。

2020年がこんな年になるとは、誰が想像できたでしょうか。医療従事者の方々に心より感謝申し上げます。

英語 松尾圭子

対面通訳がベストだと思えます。対面であれば、「次レントゲン検査に行ってください」「血液検査に行ってください」と言われても、通訳が同行しているので移動がスムーズにいきます。でも、患者さんだけでは、どこに行っていかわからない、誰に聞いたらいいかわからないので移動だけで時間がかかってしまいます。電話のこちら側にいるとその部分を手伝えず待つことしかできないため、申し訳ない気持ちになりました。

先生に聞き直すとき電話通訳だと、より遠慮してしまいます。対面通訳再開後の通訳では、手術や麻酔の話で難しいことがたくさんありました。でも、紙で説明してもらえたので通訳できました。これが電話通訳だったら、きつううまくできなかったと思えます。

また、電話通訳だと、ちょっとわからないことがあってもこのくらいのことで電話するのは申し訳ないと思ってしまう患者さんがいます。対面通訳だと、通訳にパッと聞けます。通訳もパッと答えることができます。患者さんとしては、長くて大切なことは電話をしようと思えますが、短いことは電話をするのを遠慮してしまうようなのです。

正直、電話通訳は私にとってはいいところがありませんでした。電話通訳がうまくいかなかった原因は、いくつかあります。病院側も患者さんも電話通訳のやり方がよくわからなかったこと、先生が思ったよりやさしいことばで話してくれたので、通訳がいなくても大丈夫と患者さんが自分で判断して電話をかけてこなかったことなどです。

翻訳アプリは、最初は使えるかなと思っても会話が続いて行けば行くほど変になるので、患者さんも病院側もおかしいとわかると思えます。最初に戻りますが、対面通訳がベストだと思えます。

ベトナム語 ホー・ティ・バン 談

## Youtube MIC かながわ公式チャンネルの案内

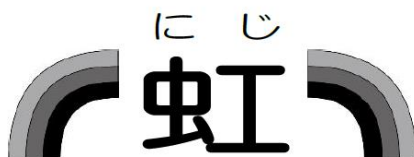
MIC Kanagawa Multilingual Health Information

日本で暮らす外国人に向けて、新型コロナウイルスを感染拡大させないためにはどういうことに気をつけたらよいかを知らせる動画の配信を行います。MIC かながわの人材を活かし、さまざまな言語でさまざまな場面の動画を作成する予定です。

今現在アップされているのはクリスマスバージョンですが、今後、在住外国人に必要な情報を組み込んだ動画を企画していきます。







にじ  
虹  
ニュースレター No.97 June 2022  
みっく  
MICかながわ

とくていひ えいりかつどうほうじん  
特定非営利活動法人  
たげんごしゃかい  
多言語社会リソースかながわ

〒221-0835  
よこはましかながわくつるやちよう  
横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2  
かながわ県民センター内  
Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

MICかながわはニュースレターを半期に一度、6月末と12月末にホームページに掲載しています。

# 特集：MICかながわは設立20周年を迎えました

## ■■ MICかながわの20年間を振り返って ■■■■■■■■■■■■

MICかながわ理事長 松野勝民



早いもので MIC かながわは設立20年という節目を迎えることになりました。これまで多くの方々を支えられてきたことは言うまでもありません。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

この20年を5つのポイントごとに整理してみます。

### ● 1990年 外国人医療問題の社会問題化 ●●●●●●●●●●

1990年代前半に「外国人の医療問題」が社会問題化しました。その頃、私は医療機関のソーシャルワーカーとして勤務をしていました。業務の中で外国人患者に関わることが多くなったのもこのころでした。MICかながわを語るには外せない存在が港町診療所です。この20年だけではなく、30年以上にわたり外国人医療の中核を担ってきました。この間、連携を取りながら色々教えて頂いたことが思い出されます。その中で一番の問題は健康保険未加入の外国人の医療費問題でした。この問題は現在に至っても抜本的な解決はありません。

そのことで医療を受けられない外国人が増加し、前述した「外国人の医療問題」となりました。多くの外国人患者の医療費問題は、全国的な問題に広がりました。しかしある時「確かにお金の問題は大事」「お金がなくても治療は受けられる」「でも言葉が通じないと治療にならない」ことを実感した事例がありました。

### ●● 1999年 外国人医療とことばの問題を考える会 以下、「考える会」 ●●●●●●●●●●

お金の問題は病院内で解決できますが、言葉の問題はどうしようもなく港町診療所を中心に電話で探すしかありませんでした。そんな時に、現監事の高橋元央氏（当時はかながわボランティアセンター）から連絡があり、「医療通訳に特化したボランティア研修を行いたい」「手伝ってもらえないか」との内容でした。即答し、すぐに港町診療所にも話を持ち掛け一緒に手伝えることとなりました。高橋氏とはそれまで面識はありませんでしたが、熱心な話しぶりに圧倒された記憶があります。その時に集まった「考える会」のメンバーがMICかながわの設立に重要な役割を果たしましたし、現在も中核で活躍しています。



●●●● 2000年 第1期外国籍県民かながわ会議報告 ●●●●●●●●●●

2000年10月に神奈川県国際課所管の「第1期外国籍県民かながわ会議」で県知事に出された報告書に「医療通訳制度の確立」が盛り込まれ、それを受けて2001年4月に国際課が検討委員会を立ち上げました。沢田貴志氏（現港町診療所所長・MICかながわ理事）と私も委員として参加しました。医師会をはじめとする三師会や病院協会等が参加しており、2002年8月のモデル事業スタートに至っています。（当初は5言語・6病院）

●●●● 2002年～ MICかながわ設立へ ●●●●●●●●●●

モデル事業を行うにあたり、通訳者の確保と派遣方法については神奈川県ではノウハウがありませんでした。そこで「考える会」を中心に事業者の募集に手を挙げることになりました。「考える会」には、それまで県内ですでに通訳活動や支援活動をされていた方が多く、実績もノウハウもありました。県事業を受けるにあたり、こちらも責任をもって行うために法人格を取ることとし、2002年に設立総会を行いました。初代理事長は北村眞佐子氏でした。多言語社会リソースかながわの命名も北村理事長によるものと記憶しております。

その後北村理事長が急逝され、鶴田光子理事長にバトンが渡されました。鶴田理事長の時代が過渡期で、派遣言語や医療機関の追加や負担金の整理など色々検討が必要になりました。2013年からは私が理事長を担っておりますが、通訳スタッフ・コーディネーター・事務局スタッフ・各理事に支えられてここまで来た感が強くあることは言うまでもありません。

運転資金は県との協働事業の「かながわボランティア活動推進基金21」に毎年応募し、資金獲得をしてきました。最長5年ということですが、何よりいつ却下されるかわからない状況で綱渡り状態でした。幸いに5年間続けることができ、年を追うごとに先を見据えながら少しずつ検討委員会を中心に協議を重ねてきました。

●●●●● 2022年～ これからのMICかながわ ●●●●●●●●●●

コロナ禍で社会生活が大きく変わる中、通訳派遣事業も見直しの時期に来ていると思います。感染の観点から派遣数が激減しましたが、ICT等による通訳もその一因だと思います。対面通訳と遠隔通訳はそれぞれメリット・デメリットがあります。うまく組み合わせることで、外国籍県民の健康を守ることができるのではないのでしょうか。

これからも神奈川県・関係機関・医療機関等や会員の皆様のお力添えを頂きながら、MICかながわも成長していきたいと思っております。皆様のご理解・ご協力をお願い申し上げます。



2002年4月13日  
横浜港を見下ろす産業貿易センタービルで、設立総会が開催されました。

MIC かながわという愛称は、この日提案されたいくつかの案の中から参加者の多数決により決まったものです。

初代理事（写真左より）：沢田貴志さん、豊住マルシアさん、故北村眞佐子さん、まつのかつみさん、早川寛さん



MIC かながわ元理事長・前顧問 鶴田光子

20歳のMIC。小さなカエルがゴジラ！に成長したようで感無量です。

組織としてのきちんとした歩みは他の方が書いてくださることでしょうから、後期高齢者の私は単なる思い出と感想を。

2002年、発足時、松野現理事長のお誘いを受け、ソーシャルワーカーとして医療の場での「ことば」の問題の重さを痛感していた私は喜んで参加しました。第一回総会での感動は忘れません。でもそのわずか2年後、急逝された北村初代理事長の後を受けて理事長になったのは想定外でした。就任後お会いした他団体の方は北村さんへの思慕が強く、私は「だれ？この人？」といった雰囲気でもなかなか受け入れられませんでしたでしたが次第に得難い仲間となりました。ここで私が感じたことは、外国籍住民への支援は熱心な少数の支援者が奔走しているが、日本社会ではまだまだひとつごとだということ。医療通訳をそんな「普通の日本人」に広めなければと思いました。



2005年10月2日(日)  
横浜弁護士会「人権賞」受賞  
於：横浜市開港記念会館

その後、殊に2005年、横浜弁護士会の人権賞をいただいてから、新聞やテレビの取材が増え、この願いは一定程度果たされたかと思えます。忘れられないのは通勤の途中の新幹線の中で、初老の紳士が「日経新聞を拝見しましたよ。すばらしい活動ですね」と声をかけてくださったこと。呑気に餡ドーナツを食べていた私は驚きですぐには言葉もでませんでした。

初期のころは財政のシステムは整ったもののMICには重い負担で、私は出張で飛行機にのるたび「この飛行機が落ちれば補償金をMICに寄付できるのに」と真面目に考えていました。家賃が払えないとか、理事や事務局のみなさん共々苦勞の連続でした。また当時は理事の間でもMICのイメージにばらつきがあり、理事会も調整が困難で夜遅くまで話し合うこともしばしば。またメンバーにも心身の不調をきたす人も出て、沢田先生にお世話になりました。

そのような日々を支えたのは「人」です。初期の国際課の女性担当者が「MICの男性の皆さん、すてきですねえ」と、ぼ～っとしていらっしやいましたが、男性のみならず、知性と人柄に感動する方たちの集団で「なんでこんな人達が集まるのだろう」と妙なところで感心していました。殊に務めを果たしつつ、亡くなられた方々のことは今も思い出します。そして協働事業者の国際課の方々とも次第につながりが持てたと思います。何よりもうれしいのは患者さん、病院スタッフ、ことにソーシャルワーカーに喜んでいただいたことです。

顧みれば2013年の退任まで、私はただ居ただけで、副理事長の早川さん、松野さんはじめ皆さんに支えられるばかりで恥ずかしい限りです。「いざという時矢面に立ち、皆を守ろう」という決心だけはあったのですが。

最近のMICはコロナ禍でも「ピンチはチャンス」と柔軟に活動しています。このように時代は変わっていきます。外国籍の方々の状況も、医療も。そして日本社会も。組織が大きくなっても、安住せず、MICのカリスマを生かしながら、時代の要請に応じてゆくように。何よりも組織を活かしている「人」が、その活動に見合う報酬と社会的評価を得られることを切に願います。20年の間、たびたび殊に財政面で「これは奇跡か」と思うことがありました。何よりもMICが20年の間分裂もなく「志」を守り、成長していたことが何よりの奇跡だと思います。20年たった今あらためて思います。

大体の日本人は、日本語で暮らせるので、ことばで苦勞することについてはまだまだ「ひとごと」です。そのような日本人にことばのわからない不安、特に人生の重大時である医療の場での不安を「じぶんごと」として感じてもらえるよう、それぞれの立場で頑張らしましょう。

病院で通訳を紹介されたとき、医療者とコミュニケーションがとれた時の患者さんの笑顔を宝として！

2002年度に神奈川県と協働で医療通訳活動を開始したMIC かながわ。初年度コーディネーターとして業務を担った岩元陽子さん、同じく初年度医療通訳スタッフとして登録し、現在も継続して活動している中国語通訳スタッフ古山季玲さん、スペイン語通訳スタッフ細野紀代子さん、ポルトガル語通訳スタッフ鈴木クリスティーナさんに、今の思いを寄せていただきました。

### コーディネーター・英語通訳 岩元陽子

私は2002年、医療通訳派遣のモデル事業がスタートした頃にコーディネーターになりました。当時MICは5言語の通訳スタッフ35人というこじんまりした団体で、協定病院は6病院、依頼も1日数件程度、今思えば非常にのんびりしたコーディネーター業務でした。ただ、やはり始まったばかりの事業で“前例”のないことが次々と起こるので、事務局に相談しながらの作業でした。

当時、コーディネーターブースはかながわ県民センター2階の「県民の声・相談室」というフロアの一角にあり、MIC事務所は別の建物でした。コーディネーターは1人体制で、まわりに誰もおらず、かなり心細かったです。ルーチンの通訳依頼電話だけでなく、迷い込んだような相談電話—「保険証を持ってないが〇〇病院に行っても大丈夫か?」「ビザのない外国人の入院の保証人になったら、病院から法外な請求書が来た。払わないと訴えられるか?」など私には答えられない相談が突然入ることもあり、事務局や理事の皆さんに片っ端から電話して教を乞うていました。通訳依頼でも、医療費がらみの案件は、当初かなり多かった印象があります。

この20年で最も著しい変化は、事業規模が何倍にも拡大したことで、これは最前線の通訳のパフォーマンスやそれを支える体制全体が高く評価されたからだと思います。一方で、目立たない変化ですが、いつのまにか「医療費」が以前のように突出した問題ではなくなりました。外国人医療で問題なのは「言葉」と「医療費」だと言われてきましたが、「言葉」の橋渡しできちんとコミュニケーションが取れば「医療費」問題の解決にもつながるという認識が、自然に浸透してきたのだと思います。そういう意味でも、患者さんと医療機関双方の「医療の安全・安心」感をサポートしてあげることができたと言えるでしょう。



初年度コーディネーターブースはかながわ県民センター2階『県民の声・相談室』の中にあつた。



## コーディネーター・中国語通訳 古山季玲

先日、MIC かながわ 10周年記念についてのニュースレター『虹』No. 62に掲載された自分の文章を読みました。10年前の若かった当時と10年後の今現在を比べた時、私自身のMIC かながわに対する思いに大きな変化があることに気付きました。

今年度20周年を迎えるMIC かながわは、人間で言うなら、言わば、晴れて成人（今は18歳で成人になるようですが）となる訳です。果たしてNPO団体として、本当に立派な成人に育ってきたのか？と考えてみました。現在MICに関わるスタッフの中には、立ち上げ当初を知る人はそう多くはいません。それ自体は問題ではありません。世の中は日々変わっていますから…。20周年を目前に私なりに考えた時、避けて通れない重要なポイントに気付いたのです。

それは医療通訳スタッフ、そして運営する側のスタッフの「人材育成」です。これはとても大切なことです。いつの日にも、各人の意識向上と、有能な人材を育成するための教育が求められますが、今、それが急務となっていると思います。運営する側は、事業の協働相手との交渉以外に、MIC自体の方針や目標を達成するための確固たる計画と業務の遂行が必要でしょう。そして、（登録年度の）新しい医療通訳スタッフには、今以上に積極的に通訳の機会を与えることが必要なのではないでしょうか。現場で得られる経験は人材育成への近道だと思います。

この20年間、中国語通訳としてMIC かながわの立ち上げスタッフの一員となった私を支えてきた言葉があります。今は亡き理事長北村真佐子さんの言葉が今でも忘れられません。



「MIC かながわはネイティブが活躍できる場所である」  
「通訳は、自分自身は大丈夫と思う人のほうが危ない」

私は、常に初心を忘れず、MIC かながわを離れるまでこの言葉に添って通訳活動を実践していきたいと思っています。常にボランティア活動にプライドを持って、決して驕ることなく、謙虚な姿勢をもちつつも積極的に立ち向かうことが必要だと思うのです。

20周年の場をお借りして、今まで私のわがままを聞いてくれた事務局、医療通訳スタッフ、コーディネーターの皆様へ感謝いたします。そして、MIC かながわの末永い発展をお祈りいたします。

## スペイン語通訳・元コーディネーター 細野紀代子

2002年発足時に参加したスペイン語通訳者は12名、母語がスペイン語あるいはMIC設立に携わった人や医療通訳経験者が殆どであった。初心者なのにわからないことがあれば、周りから必要な答えを即座にもらえる恵まれた環境であった。が、現場での待ち時間が長かったし、患者の中にはこの時間をよそよそしく見て平然と遅刻してくる強者もいた。派遣された医療機関では、複雑な事情を持つケースはMSWのきめ細かなフォローがあった。込み入った事情があり、出産を前にして事前に話し合っておく必要がある妊婦に対して、MSWが「入院前には必ず相手の男性と一緒に来院する必要があります」と言った。結局男性は一度も現れないまま、その妊婦は救急で入院し、MSWが困っていたことが記憶に残っている。

診療室内では中立的な立場で逐語通訳を行い、どんな状況でも人として尊重して良い医療に結

び付くよう医師と患者の架け橋になるのが医療通訳である。初期の頃は派遣された先で MSW に通訳し、終了の報告を行い、次回の依頼の参考にもされたが、時が経ってからは、通訳依頼の担当部署が多様化され、個人情報保護のためもあるが、命にかかわる厳しい分野であるのにもかかわらず情報がほとんどないかたちで依頼が入ることもあった。

新型コロナウイルスに世界が揺れている 2022年は、45名がスペイン語通訳登録をしている。過去の資料を取りだしてみると感染症に関しては MIC かながわでは定期的に研修が組まれている。1980年 WHO は天然痘撲滅宣言を行ったが、その翌年ロサンゼルスに AIDS/HIV、新興感染症の報告があった。2003年世界を震撼させた SARS。2003年～2006年には H5N1 高病原性鳥インフルエンザ、H1N1 型豚インフルエンザは 2005年に誕生。進化して 2009年にメキシコの 5歳児が発症、パンデミックには至らなかったが瞬く間に国境を越えて感染が拡大した。

グローバル化された昨今、何処かで生まれたウイルスが増殖や変異を繰り返して何時襲ってくるかわからない。基礎をきちんと学び、最新の情報を知るためにも MIC かながわ参加必須の研修のプログラムが充実しているのがとても有り難い。多文化共生社会に向けて MIC の活動に参加していくことができれば嬉しい。

ポルトガル語通訳・元コーディネーター 鈴木クリスティーナ美幸

MIC で活動したこの 20年は、私にとって外国に滞在している期間すべてであり、個人的な成長を成ることができた 20年です。神奈川県外国人コミュニティを守る活動が 20周年を迎えたことを心よりお祝い申し上げます。

MIC がつくられたのは、入管法が変わり日系人が入ってくることが認められて約 13年が経ち、通訳付きの相談窓口が設置され始めたころでした。ニューカマーと言われる外国人たちが、いろいろ問題を抱えて過ごしている時期でもありました。労働、日常生活、学校、育児、精神的な問題、病院へ行ってもことばの問題で自分の健康状態がわからない、国に帰って診てもらうには経済的に難しい、などです。私は日本へ来て 27年。最初の 7年は派遣会社で通訳として働いていましたが、医療通訳は自分の持っている知識だけでやっていました。その時期は、外国人にとってそれ以外の選択肢はなかったのです。

コーディネーターブースでは、最初の頃は一日に 2～3本しか電話はなく、一日に 15本電話が入ったときにはパニックになったことを覚えています。そのころは全ての通訳スタッフが携帯を持っているわけではなかったため、電話を掛けたその日に連絡を取ることもかなり難しく、返事が来るのに 2～3日かかりました。また、コーディネーターは通訳スタッフたちに病気の情報を伝えるために勉強しなければなりません。コーディネーターの中に母国で医師をしていた人が二人いたことが、コーディネーターや通訳スタッフへ学習を促す元になったのではないかと思います。

通訳スタッフを病院へ派遣することもまた、容易な仕事ではありませんでした。病院で働く多くの方たちが、まだ通訳派遣のシステムを知らず、医師も派遣された通訳スタッフの医療的な知識に不安を抱えていたというのが大きな理由です。

今のように病気についての情報を簡単には手に入れることができなかったため、通訳スタッフたちは沢田先生が行ってくれる研修を最大限に活用していました。全ての研修の出席率は、ほぼ 100%



だったように思います。とても興味深かったのは、他国の言語を操る日本人の方たちが通訳として参加していたことです。

患者さんとの関係では、信じられないことも起きました。入院患者さんが週2回のシャワーに我慢できず、シャワーを浴びるために逃げ出したこと。理由がわからず、診察にも来ないので、患者の家まで行き、やっと何が起きたのかがわかったのです。この通訳派遣システムを利用している多くの患者さんはとても感謝しています。通訳を通し自分の健康状態がわかることで、医師の指導などに従おうという努力につながっています。

パンデミックで心配された医療通訳派遣も、できる限りの支援を考え、新しい方法を作り出して患者さんたちに対応していることにとても安心しました。このシステムの成長の理由は、関わってきた全ての人たちが自分の役割の重要性をしっかりと理解し、遂行しているからだと思います。

私が自分の国で生活していれば、このような活動に接する機会はなかったと思います。病気について勉強することもなく、両国の医療制度を知ることも比べることもなかったでしょうし、こんなにたくさんの方と知り合うこともなかったでしょう。私はこのグループを誇りに思います。そしてこのグループに参加できたことに感謝するとともに、これからもグループの一員としていつも手助けできる存在でありたいと思っています。

コロナ禍で迎えるMIC かながわの定期総会も3回目となりました。

### ●2022年度 MIC かながわ定期総会

日時：6月4日(土) 13:00~14:00

場所：かながわ県民センター 15階共用研修室

今年度の定期総会も新型コロナウイルス感染症対策として、オンラインでの開催でした。直接参加は人数を絞り、委任状または書面表決を提出した会員に対しては希望があればZoomでの参加を可能としました。

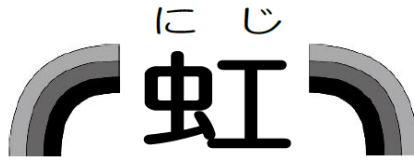
正会員数 52名 直接参加 10名 委任状 6名 書面表決 27名

第1号議案2021年度事業報告、第2号議案2021年度決算報告、第3号議案監査報告、第4号議案2022年度事業計画(案)、第5号議案2022年度活動予算(案)、第6号議案定款の変更(案)、すべての議案について異議なく承認されました。

第6号議案の定款の変更が承認されたことにより、今後の総会においてはオンラインでの参加も直接参加と同じとなり、委任状または書面表決を事前に提出する必要がなくなります。



早川副理事長・佐藤副理事長



ニュースレター No.98 December 2022

みっく  
MICかながわ

とくていひ えいりかつどうほうじん  
特定非営利活動法人  
たげんごしゆかい  
多言語社会リソースかながわ

T221-0835  
よこはましかながわくつるやちやう  
横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2  
かながわ県民センター内  
Tel: 045-314-3368  
Fax: 045-342-7918  
e-mail: mickanagawa@network.email.ne.jp  
URL: http://mickanagawa.web.fc2.com/

MIC かながわはニュースレターを半期に一度、6月末と12月末にホームページに掲載しています。

# 特集：MICかながわは設立20周年を迎えました 数字で見るMICの20年

今号では、項目別の数字を通して MIC かながわが歩んできた道をあらためて皆さまにご紹介したいと思います。MIC かながわが生まれてから、どのように成長してきたのかを振り返ります。

2002年4月13日に設立総会が開催され、愛称『MIC かながわ』が決まりました。そして横浜駅に近いワンルームマンションに事務所を構え、MIC かながわとしての活動が始まりました。法人設立は7月24日、登記完了は8月2日でした。

MIC かながわのロゴができたのは2010年度です。一般公募し、応募総数は34件。一次審査を経て、当時MIC かながわ事務局で非常勤スタッフとして勤務していた鈴木理恵子さんの応募作品が、総会後の投票でMIC かながわのロゴに選ばれました。



2002年8月からは、外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業が始まり、2003年度はかながわボランティア活動推進基金21（以下「基金21」）で、MIC かながわは県との協働事業部門で対象事業（5年間）に選ばれました。医療通訳派遣システム構築事業の始まりです。また、2003年度、2004年度は横浜国際交流基金の国際交流・協力活動助成金でも2年間の助成が決まり、横浜市内の病院に医療通訳を派遣しました。

基金や助成金を財源としている間は、通訳料については医療機関や患者の負担はなしという形で始まりました。医療通訳を使ってもらい、医療を行う上での医療通訳の有用性を医療機関側にも患者側にも体験、実感してもらおうという試用期間を提供したという形です。日本語が母語ではない患者を多く受け入れている医療機関を選び、協定医療機関になってもらえるようお願いをすることになりました。しかし、どこでも喜んで受け入れてくれたわけではありません。神奈川県国際課の担当者として MIC かながわの理事と一緒に足を運び、医療通訳派遣システムの概要や医療通訳の有用性を説明して回り、理解を得ていったという経緯があります。

医療通訳派遣システム構築事業が始まり順調に推移する中、「基金21による5年間の助成が終了した後はどうなるのか」が次の大きな課題となりました。助成終了まで1年というとき、協定医療機関の医療従事者および医療通訳スタッフへ「在住外国人医療サービスに関する調査研究」アンケートを行い、この事業はもうなくてはならないものだということがあらためて認識されました。



## <医療者から>

- この通訳派遣制度がなくなったら困る。(医師・看護師はそれぞれ80%以上、MSW\*は90%以上から回答がありました) \*医療ソーシャルワーカー Medical Social Worker
- 緊急の場合の派遣、電話通訳への対応、病院での常駐に対する希望。

## <医療通訳スタッフから>

- 医師の対応の良さを90%の通訳スタッフが感じている。対応の悪さへの経験頻度は低い。
- レベルの高さを求められる医療分野での活動がボランティアの領域であり続けていいのか。
- 医療従事者の意識改革と社会的認知に関する希望

## <この調査から上がった今後の課題>

1. 財源……基金21終了後の費用拠出先の問題
2. 医療通訳スタッフのレベル維持と向上……「訓練された医療通訳」ということに対する信頼度
3. 医療従事者への働きかけ……医療現場での受け入れはスムーズになっているが、さらなる普及啓発活動の必要性あり。
4. 医療通訳スタッフの身分……ボランティアの域は越えている。しかしプロではない。今後に向けて検討の必要性あり。

## <上記今後の課題にある『1. 財源』の問題について>

基金21最後の1年である2007年度は、医療機関に1件につき1,000円の負担をしてもらったことになりました。依頼は減るかもしれない、あるいはなくなるかもしれないという不安はありましたが、調査の結果でも見えるように医療通訳はなくてはならないものになっていることがわかりました。医療機関側が通訳料を一部負担した2007年度も、派遣依頼は減少することなく実績を増やしました。基金21終了後は、原則として通訳費用の部分は医療機関が負担することになりました。医療機関によっては患者負担もありますが、通訳費用全体の3分の1を超えないこととしています。患者が通訳料を全額負担することはありません。医療通訳が入ることで利益を得るのは患者だけではなく、医療機関も受益者であるという考えが根底にあるからです。

助成金終了とともに縮小あるいは終了してしまう事業も世の中には少なくありません。神奈川県では事業を維持し、さらに実績を伸ばしながら助成金終了後15年が経とうとしています。それぞれの負担の割合など、システムが最初の段階から持続可能な形を作り上げることができていたからなのでしょう。

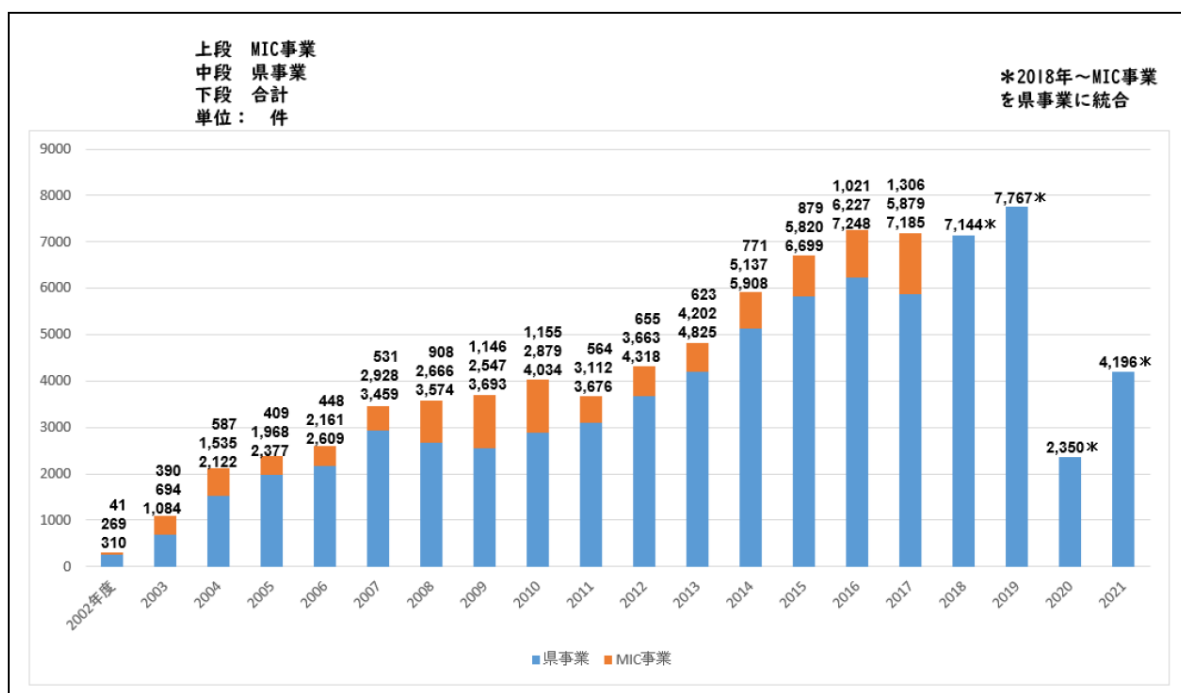
事業を運営していくための経費は、各参加団体が負担しています。県内自治体は当該自治体住民の受診件数に応じて負担金を支払います。医療機関は直接経費である医療通訳スタッフに支払う報酬金(一部患者負担あり)と医療通訳派遣依頼の件数に応じての負担金を支払います。そしてMICかながわも応分の負担をしています。

## ■ 年度別派遣実績

モデル事業、そして5年間の構築事業を経て2008年度からいよいよ医療通訳派遣システム事業が始まりました。医療機関負担1件につき3,000円(一部の医療機関では患者負担もあり)となった2008年度も派遣件数は減少することなく増加しました。この20年間で派遣件数が前年度を下回った年は、2011年度は東日本大震災で外国人住民の多くが帰国したこと、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により受診ができなかったり受診控えが起きたことが原因でした。

2017年度から2018年度にかけて件数が減少しているように見えるのは、派遣依頼の受付方法が変

わったことによるものです。



### ■ ■ 協定医療機関

主に神奈川県内 11 の第二次保健医療圏の中核的な病院／外国人住民が多いところ／県立の専門病院（子ども、感染症、精神科など）／市立病院、総合病院／産婦人科がある病院が中心となっています。

2002年8月	6病院
2004年4月	16病院
2007年4月	17病院
2011年4月	32病院
2012年4月	35病院
2016年4月	37病院
2017年4月	36病院
2018年4月	69病院（県内のMIC独自協定医療病院を医療通訳派遣システムに統合したため倍増）
2020年4月	70病院
2022年4月	71病院

この他に、現在MICかながわとの独自協定による派遣先が14医療機関あります。  
医療通訳派遣システムに加入していない通訳派遣を希望する神奈川県内の医療機関、特定の曜日・時間帯に定例的に通訳を派遣している病院、神奈川県外の病院です。



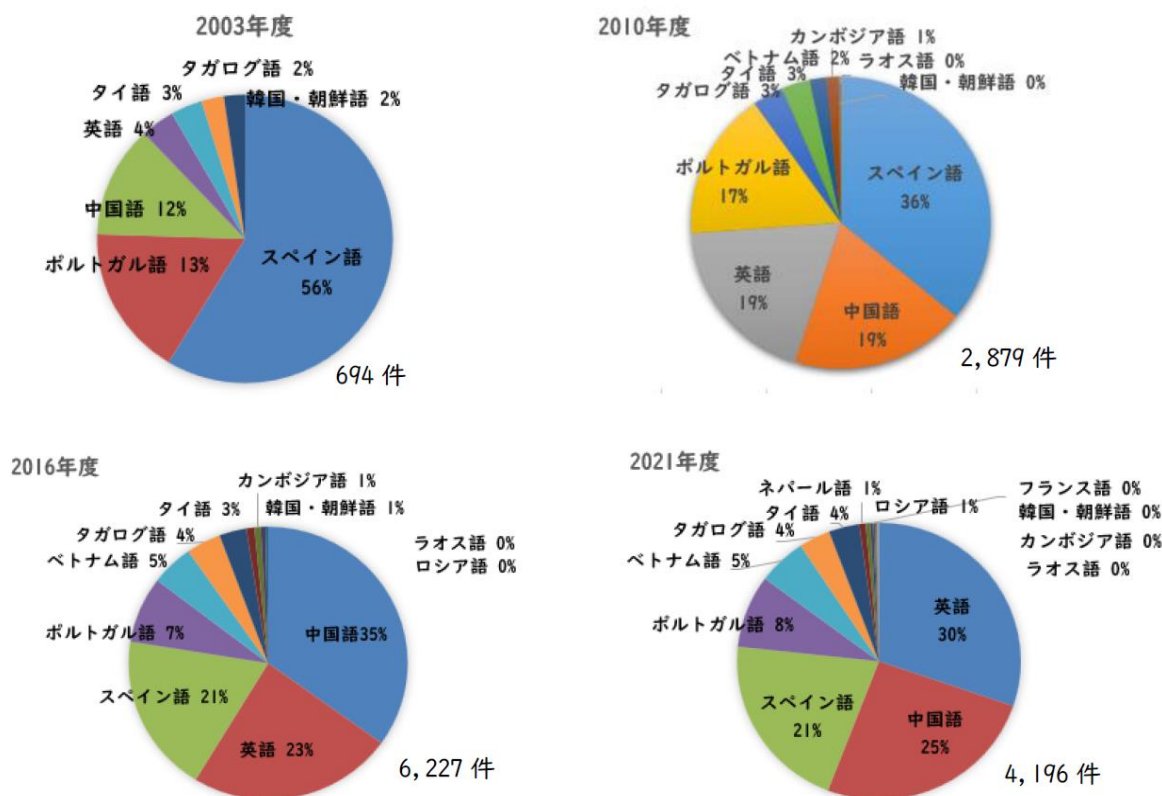
■■■■ 派遣対象言語

2013年度までの派遣依頼件数第1位は常にスペイン語でした。2014年度には中国語がスペイン語を抜き第1位になりました。2016年度は第2位の英語にかなりの差をつけての第1位でした。そして2017年度には英語が中国語を抜き第1位に。その理由は中国語の依頼の多かったある医療機関が中国語通訳を自院で雇用し、依頼が大幅に減少したことです。

現在、派遣に苦慮しているのはタガログ語、ベトナム語、カンボジア語、ネパール語で、特にネパール語はなかなか依頼に応えられない状況が続いています。

2002年度	5言語（中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国・朝鮮語、タガログ語）
2003年度	7言語（中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国・朝鮮語、タガログ語、タイ語、英語）
2005年度	10言語（中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国・朝鮮語、タガログ語、タイ語、英語、ベトナム語、カンボジア語、ラオス語）
2013年度	11言語（中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国・朝鮮語、タガログ語、タイ語、英語、ベトナム語、カンボジア語、ラオス語、ロシア語）
2014年度	12言語（中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国・朝鮮語、タガログ語、タイ語、英語、ベトナム語、カンボジア語、ラオス語、ロシア語、フランス語）
2018年度	13言語（中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国・朝鮮語、タガログ語、タイ語、英語、ベトナム語、カンボジア語、ラオス語、ロシア語、フランス語、ネパール語）

下のグラフは、医療通訳派遣システム事業のみの派遣件数です。



■■■■ げんごべつりようつうやく とうろくすう  
言語別医療通訳スタッフ登録数

神奈川県 医療通訳派遣システムでは、医療通訳スタッフは1年毎の更新による登録制です。年度末が近づくと MIC かながわ事務局から更新 伺いの手紙を登録者に送り、登録者は次年度引き続き通訳活動が可能かどうかを返信します。

前出の「在住外国人医療サービスに関する調査研究」結果から見えた課題 2. 医療通訳スタッフのレベル維持と向上 について、登録スタッフ全員のレベルの均一化というのは、なかなか難しいものがありました。言語による違いもあります。学習するための資料が豊富な言語、資料を探すのが難しい言語。しかし、インターネット等の進化によって20年前よりははるかに知識や情報は手に入れやすくなってきています。

医療通訳派遣システム事業では、登録した医療通訳スタッフに1年に3回の現任者研修への参加を義務付けており、医療に関する知識等を える ば ていきよう じしゅべんきようかい かいさい げんご あります。レベル維持や向上に医療通訳スタッフ 自らの努力が求められています。

かくねんど ようせいけんしゅうご とうろくしゃすう  
各年度、養成研修後の登録者数

言語 年度	中国語	スペイン語	ポルトガル語	韓国・朝鮮語	タガログ語	タイ語	英語	ベトナム語	カンボジア語	ラオス語	ロシア語	フランス語	ネパール語	合計
2002	5	12	7	5	6	-	-	-	-	-	-	-	-	35
2003	15	22	14	8	5	7	7	-	-	-	-	-	-	78
2004	23	33	18	10	6	6	12	-	-	-	-	-	-	113
2005	24	44	22	13	8	8	14	2	4	1	-	-	-	140
2006	23	49	24	11	9	8	12	2	5	2	-	-	-	145
2007	26	53	33	12	9	11	19	4	6	2	-	-	-	175
2008	25	52	28	11	11	10	23	5	5	2	-	-	-	172
2009	29	52	27	11	8	7	24	8	3	2	-	-	-	171
2010	32	53	28	9	14	9	26	10	4	2	-	-	-	187
2011	32	50	29	8	13	9	27	10	3	2	-	-	-	183
2012	32	45	33	7	13	11	26	11	3	2	5	-	-	183
2013	30	41	28	5	9	9	24	7	2	2	5	-	-	157
2014	38	44	27	8	12	13	31	8	2	1	5	1	-	189
2015	37	43	25	8	12	12	33	9	2	1	5	1	-	188
2016	37	47	26	8	15	12	38	14	2	1	8	1	-	209
2017	41	41	22	8	13	13	37	15	2	1	7	4	-	204
2018	38	42	21	7	9	13	41	17	2	1	7	4	2	204
2019	46	42	19	6	9	12	44	17	2	1	6	4	4	212
2020	43	44	24	6	9	12	41	20	2	1	5	4	4	215
2021	38	45	24	5	8	12	38	19	2	1	4	6	4	206
2022	38	41	22	5	7	14	33	18	1	1	5	6	3	194

いりようつうやく ようせいけんしゅう  
＜医療通訳ボランティア養成研修＞

2002年度は、かながわ外国籍県民医療通訳サービス支援モデル事業の開始（2002年8月）にあたって、対象者への研修が行われました。対象言語は、中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国・朝鮮語、タガログ語の5言語で、一般公募はせず、主に既に医療通訳として活動している人々に声をかけ、モデル事業に参加する形でした。

2003年度は、初めて公募による医療通訳ボランティアの研修を行いました。募集言語は、モデル事業の5言語にタイ語と英語を加え7言語でした。応募総数は、なんと、254人。その中から書類選考を行





新型<sup>しんがた</sup>コロナウイルス<sup>かんせんしやうかんせんかくだいぼうし</sup>感染症<sup>かんせんしやうかんせんかくだいぼうし</sup>感染<sup>かんせんしやうかんせんかくだいぼうし</sup>拡大<sup>かんせんしやうかんせんかくだいぼうし</sup>防止<sup>かんせんしやうかんせんかくだいぼうし</sup>のため、  
準備<sup>じゆんびだんかい</sup>段階<sup>じゆんびだんかい</sup>を含<sup>ふく</sup>め多<sup>おほ</sup>くのイ<sup>おほ</sup>ベ<sup>おほ</sup>ント<sup>おほ</sup>はオ<sup>おほ</sup>ン<sup>おほ</sup>ラ<sup>おほ</sup>イ<sup>おほ</sup>ン<sup>おほ</sup>（Zoom）  
に<sup>おほ</sup>よ<sup>おほ</sup>る開<sup>おほ</sup>催<sup>おほ</sup>として<sup>おほ</sup>いま<sup>おほ</sup>し<sup>おほ</sup>た<sup>おほ</sup>が、状<sup>おほ</sup>況<sup>おほ</sup>を見<sup>おほ</sup>な<sup>おほ</sup>が<sup>おほ</sup>ら<sup>おほ</sup>対<sup>おほ</sup>面<sup>おほ</sup>  
で<sup>おほ</sup>の研<sup>おほ</sup>修<sup>おほ</sup>が開<sup>おほ</sup>催<sup>おほ</sup>さ<sup>おほ</sup>れ<sup>おほ</sup>るよ<sup>おほ</sup>うに<sup>おほ</sup>な<sup>おほ</sup>り<sup>おほ</sup>ま<sup>おほ</sup>し<sup>おほ</sup>た。

## MICのイベント(報告)

### ●一般通訳協力者研修(専門) (オンライン) <多言語支援センターかながわ研修>

日時：7月13日(水) 15:00~16:30 <オンライン>

テーマ：生活保護<sup>せいかつほご</sup>について<sup>せいかつほご</sup>役<sup>やく</sup>立<sup>だ</sup>つ<sup>だ</sup>基<sup>き</sup>礎<sup>そ</sup>知<sup>ち</sup>識<sup>し</sup>

講師：神奈川<sup>かながわ</sup>県<sup>けん</sup>福<sup>ふく</sup>祉<sup>し</sup>局<sup>きょく</sup>生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>課<sup>か</sup> 高<sup>たか</sup>橋<sup>はし</sup>亮<sup>りやう</sup>氏<sup>し</sup>

体<sup>たい</sup>験<sup>けん</sup>談<sup>だん</sup>：MIC<sup>かながわ</sup>かな<sup>が</sup>わ<sup>わ</sup>タイ<sup>たい</sup>語<sup>ご</sup>通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>ス<sup>た</sup>ッフ<sup>ふ</sup> 鈴<sup>すず</sup>木<sup>き</sup>久<sup>く</sup>美<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>氏<sup>し</sup>

参加者：59人(13言語)

生活<sup>せい</sup>保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>に<sup>かん</sup>関<sup>かん</sup>する通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>依<sup>い</sup>頼<sup>らい</sup>は<sup>おほ</sup>そ<sup>おほ</sup>れ<sup>おほ</sup>ど<sup>おほ</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>おほ</sup>あ<sup>おほ</sup>り<sup>おほ</sup>ま<sup>おほ</sup>せ<sup>おほ</sup>ん<sup>おほ</sup>が、制<sup>せい</sup>度<sup>ど</sup>が<sup>ふく</sup>複<sup>ふく</sup>雑<sup>ざつ</sup>で<sup>す</sup>。そ<sup>おほ</sup>の<sup>おほ</sup>た<sup>おほ</sup>め、で<sup>おほ</sup>き<sup>おほ</sup>る<sup>おほ</sup>だ<sup>おほ</sup>け<sup>おほ</sup>ス<sup>おほ</sup>ム<sup>おほ</sup>ズ<sup>おほ</sup>に<sup>おほ</sup>通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>が<sup>おほ</sup>で<sup>おほ</sup>き<sup>おほ</sup>る<sup>おほ</sup>よ<sup>おほ</sup>う、基<sup>き</sup>礎<sup>そ</sup>的<sup>てき</sup>な<sup>ち</sup>知<sup>ち</sup>識<sup>し</sup>を<sup>ま</sup>な<sup>ま</sup>き<sup>ま</sup>か<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>す。

生活<sup>せい</sup>保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>を<sup>り</sup>よ<sup>り</sup>う<sup>り</sup>す<sup>り</sup>と<sup>り</sup>き<sup>り</sup>の注<sup>ちゆう</sup>意<sup>い</sup>、保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>利<sup>り</sup>用<sup>りゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>の権<sup>けん</sup>利<sup>り</sup>と<sup>き</sup>義<sup>ぎ</sup>務<sup>む</sup>、病<sup>びやう</sup>院<sup>いん</sup>へ<sup>か</sup>の<sup>か</sup>か<sup>か</sup>り<sup>か</sup>方<sup>かた</sup>、保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>開<sup>かい</sup>始<sup>し</sup>決<sup>けつ</sup>定<sup>てい</sup>時<sup>じ</sup>の<sup>おほ</sup>手<sup>て</sup>続<sup>つづ</sup>き<sup>つづ</sup>等<sup>とう</sup>に<sup>おほ</sup>つ<sup>おほ</sup>づ<sup>おほ</sup>つ<sup>おほ</sup>て、講<sup>こう</sup>師<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>利<sup>り</sup>用<sup>りゆう</sup>す<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>が<sup>も</sup>持<sup>も</sup>つ<sup>も</sup>『生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>の<sup>し</sup>お<sup>し</sup>り』に<sup>おほ</sup>基<sup>き</sup>づ<sup>づ</sup>いた<sup>おほ</sup>わ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>す<sup>す</sup>い<sup>い</sup>説<sup>せつ</sup>明<sup>めい</sup>が<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>た。

通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>体<sup>たい</sup>験<sup>けん</sup>談<sup>だん</sup>で<sup>は</sup>、今<sup>こん</sup>回<sup>かい</sup>の<sup>さん</sup>加<sup>か</sup>者<sup>しゃ</sup>は<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>に<sup>かん</sup>関<sup>かん</sup>する通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>経<sup>けい</sup>験<sup>けん</sup>の<sup>ない</sup>方<sup>かた</sup>が<sup>ほ</sup>と<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>た<sup>た</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>、準<sup>じゆん</sup>備<sup>び</sup>段<sup>だん</sup>階<sup>かい</sup>か<sup>ら</sup>含<sup>ふく</sup>め、具<sup>ぐ</sup>体<sup>たい</sup>的<sup>てき</sup>な<sup>い</sup>メ<sup>め</sup>ー<sup>じ</sup>ジ<sup>じ</sup>を<sup>も</sup>持<sup>も</sup>つ<sup>も</sup>こ<sup>こ</sup>が<sup>おほ</sup>で<sup>おほ</sup>き<sup>おほ</sup>た<sup>た</sup>の<sup>おほ</sup>で<sup>おほ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>と<sup>おほ</sup>思<sup>おも</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。講<sup>こう</sup>師<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>も、通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>の<sup>たい</sup>験<sup>けん</sup>談<sup>だん</sup>は<sup>と</sup>て<sup>も</sup>参<sup>さん</sup>考<sup>こう</sup>に<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>と<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>ば<sup>ば</sup>が<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>た。

参加者<sup>さんかしゃ</sup>か<sup>ら</sup>寄<sup>よ</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>感<sup>かん</sup>想<sup>そう</sup>の<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>を<sup>しやう</sup>紹<sup>しょう</sup>介<sup>かい</sup>し<sup>ま</sup>す。

● 講<sup>こう</sup>師<sup>し</sup>の<sup>お</sup>話<sup>わ</sup>は<sup>な</sup>ソ<sup>そ</sup>フ<sup>ふ</sup>ト<sup>と</sup>な<sup>な</sup>感<sup>かん</sup>じ<sup>じ</sup>で<sup>し</sup>た<sup>た</sup>が、通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>体<sup>たい</sup>験<sup>けん</sup>談<sup>だん</sup>は<sup>わ</sup>た<sup>た</sup>し<sup>し</sup>が<sup>たい</sup>験<sup>けん</sup>し<sup>した</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>近<sup>ちか</sup>く、現<sup>げん</sup>場<sup>ば</sup>は<sup>けつ</sup>構<sup>こう</sup>ハ<sup>は</sup>ー<sup>ド</sup>ド<sup>ド</sup>と<sup>と</sup>感<sup>かん</sup>じ<sup>じ</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

● 講<sup>こう</sup>師<sup>し</sup>の<sup>ご</sup>説<sup>せつ</sup>明<sup>めい</sup>は、と<sup>と</sup>て<sup>も</sup>理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>し<sup>や</sup>す<sup>す</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>で<sup>す</sup>。ま<sup>た</sup>通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>者<sup>しゃ</sup>の<sup>たい</sup>験<sup>けん</sup>談<sup>だん</sup>は、流<sup>なが</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>は</sup>把<sup>は</sup>握<sup>あく</sup>す<sup>る</sup>上<sup>う</sup>で<sup>と</sup>て<sup>も</sup>参<sup>さん</sup>考<sup>こう</sup>に<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

● お<sup>お</sup>話<sup>わ</sup>を<sup>き</sup>い<sup>い</sup>て、生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>が<sup>き</sup>厳<sup>げん</sup>しい<sup>い</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>で<sup>な</sup>く、困<sup>こん</sup>窮<sup>きゆう</sup>し<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>えん</sup>助<sup>じょ</sup>す<sup>る</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>だ<sup>だ</sup>と<sup>と</sup>実<sup>じつ</sup>感<sup>かん</sup>し<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

● 上<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>目<sup>め</sup>線<sup>せん</sup>の<sup>す</sup>タ<sup>た</sup>ンス<sup>ん</sup>で<sup>な</sup>く、公<sup>こう</sup>平<sup>へい</sup>な<sup>な</sup>目<sup>め</sup>線<sup>せん</sup>で<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>ほ<sup>ほ</sup>しい<sup>い</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>講<sup>こう</sup>師<sup>し</sup>の<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>ば<sup>ば</sup>が<sup>いん</sup>象<sup>しょう</sup>に<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

● 出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>ば<sup>ば</sup>が<sup>む</sup>ず<sup>ず</sup>か<sup>か</sup>い<sup>い</sup>で<sup>す</sup>。行<sup>ぎやう</sup>政<sup>せい</sup>用<sup>りゆう</sup>語<sup>ご</sup>を<sup>ま</sup>な<sup>な</sup>ひ<sup>ひ</sup>つ<sup>つ</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>感<sup>かん</sup>じ<sup>じ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

● 生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>の<sup>し</sup>お<sup>し</sup>り<sup>り</sup>に<sup>か</sup>き<sup>き</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>内<sup>ない</sup>容<sup>りゆう</sup>に<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>し、通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>で<sup>き</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>準<sup>じゆん</sup>備<sup>び</sup>す<sup>る</sup>の<sup>ひつ</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>せ<sup>せい</sup>い<sup>い</sup>を<sup>あら</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>に<sup>かん</sup>感<sup>かん</sup>じ<sup>じ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

### ●第1回医療通訳スタッフ・コーディネーター現任者研修(オンライン)

日時：7月23日(土) 13:30~15:30

内容：①麻<sup>ます</sup>酔<sup>すい</sup>科<sup>か</sup>に<sup>つ</sup>いて 講<sup>こう</sup>師<sup>し</sup>：東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>慈<sup>じ</sup>恵<sup>え</sup>会<sup>かい</sup>医<sup>い</sup>科<sup>か</sup>大<sup>だい</sup>学<sup>がく</sup>付<sup>つ</sup>属<sup>りやく</sup>病<sup>びやう</sup>院<sup>いん</sup>麻<sup>ます</sup>酔<sup>すい</sup>科<sup>か</sup>医<sup>い</sup>師<sup>し</sup> 近<sup>おほ</sup>江<sup>え</sup>禎<sup>のぶ</sup>子<sup>こ</sup>氏<sup>し</sup>

②個<sup>こ</sup>人<sup>じん</sup>情<sup>じゆう</sup>報<sup>ほう</sup>に<sup>つ</sup>いて 事<sup>じ</sup>務<sup>む</sup>局<sup>きょく</sup>よ<sup>り</sup>

③事<sup>じ</sup>務<sup>む</sup>局<sup>きょく</sup>か<sup>ら</sup>の<sup>お</sup>知<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>せ

参加者：121人





- とても分かりやすい資料に基づいての説明だったので、理解しやすかった。
- 特定活動についても、いろいろなものがある、実際にはパスポートを確認しなければならないなど、知らなかったことを学ぶことができた。
- 何となく知っていたつもりのことを正しく理解できたので、とてもよかった。

### ●2022 年度医療通訳ボランティア養成研修

今年度は、中国語、タガログ語、ベトナム語、カンボジア語、ネパール語の5言語で募集を行いました。タガログ語、カンボジア語、ネパール語での応募がなく、急きょタイ語とロシア語を追加募集しました。

応募総数33人。書類選考および事前面接選考(中国語のみ)を経て、21人が養成研修に参加しました。最終的な登録者は10人(中国語4人、タイ語3人、ベトナム語2人、ロシア語1人)でした。11月7日(月)のオリエンテーションで神奈川県(かながわ)医療通訳派遣システム自治体推進協議会より委嘱状が交付され、2回の研修派遣を行った後、いよいよ医療通訳スタッフとしての通訳活動が始まりました。

日程	会場	内容
9月8日(木)	神奈川県職員 キャリア開発 支援センター	<b>①開講の挨拶</b> (MIC かながわ理事長 松野勝民氏) <b>②神奈川県医療通訳派遣システム事業の概要</b> (神奈川県国際文化観光局国際課 佐藤敬子氏) <b>③MIC かながわについて</b> (MIC かながわ理事長 松野勝民氏) <b>④医療通訳の心得</b> / <b>⑤医療の基礎知識</b> (MIC かながわ理事・港町診療所医師 沢田貴志氏) <b>⑥通訳技術の基礎</b> (MIC かながわ中国語医療通訳スタッフ 佐藤ペティ氏) <b>⑦多文化共生について</b> (立教大学大学院特任准教授 金迅野氏)
9月16日(金)	かながわ県民 センター 会議室	<b>①病院での個人情報保護と対人援助スキル</b> (県立がんセンターソーシャルワーカー 緒方文子氏) <b>②医療通訳の現場から</b> (MIC かながわ中国語医療通訳スタッフ 篠崎知恵氏・同ベトナム語医療通訳スタッフ 川下ホア氏) <b>③医療機関の仕組み・医療制度</b> (汐見台病院ソーシャルワーカー 岩田靖美氏) <b>④これからの活動のために ~神奈川県に暮らす外国人と役に立つ社会資源~</b> (かながわ国際交流財団 藤分治紀氏) <b>⑤筆記テスト</b>
10月8日(土)	神奈川県職員 キャリア開発 支援センター	<b>言語別通訳演習</b> 各言語に講師、母語話者(患者や家族)役、日本人(医療者)役、 スーパーバイザーを配置。受講者は通訳として参加し、シナリオ に沿ってロールプレイを実施。



4	10月15日(土)	<small>かながわけんしよくいん</small> <b>神奈川県職員</b> <small>かいほう</small> <b>キャリア開発</b> <small>しえん</small> <b>支援センター</b>	<small>げん ごべつつうやくえんしゆう</small> <small>せんこうめんせつ</small> <b>言語別通訳演習、選考面接</b> <small>ぜんかい ひ つづ えんしゆう おこな あと こべつ めんせつ つうやくじつぎ かつどう</small> 前回に引き続き演習を行った後、個別に面接（通訳実技・活動 <small>かのうじようきよう き と とう おこな とうがい とうろく</small> 可能状況の聞き取り等）を行い、当該システムへの登録につ <small>せんこう</small> いて選考。
5	11月7日(月)	<small>かながわけんみん</small> <b>かながわ県民</b> <b>センター</b> <b>研修室</b>	<small>いりようつうやく</small> <small>しん きとうろくしゃたいしゆう</small> <b>オリエンテーション（医療通訳スタッフ新規登録者対象）</b> <small>いしよくじよう なふだ みぶんしょうめいしよ ほけんかにゆうしゃしよ</small> 委嘱状、名札、身分証明書、ボランティア保険加入者証の <small>う と いりようつうやくはけん じぎよう がいよう つうやくかつどう かん</small> 受け取り／医療通訳派遣システム事業の概要や通訳活動に関す <small>ちゆういじこうとう せつめい いけんこうかん</small> る注意事項等の説明／コーディネーターとの意見交換

●第2回医療通訳スタッフ・コーディネーター現任者研修

日時： 11月12日(土) 13:50～16:30

会場： 横浜市 従会館

内容： ① 講義「最近の精神科医療通訳の問題点と課題」  
こうし よつや いんちよう いし あべゆうし  
 講師：四谷ゆいクリニック院長・医師 阿部裕氏  
 ② 事務局からのお知らせ



参加者：112人

今回は会場に集まったの対面の講義。やはり五感すべてを通じて伝わるものがあり、参加者の反応なども含め得られる情報量の違いを感じました。

よく見られる精神科の症状から始まり、日本の精神医療に関連する法律の変遷、またクリニックに外国人患者の多いことから、その特徴、問題点などの説明がありました。言語と文化の問題から精神科医療を受けることが制限的である中、医療通訳の役割は重要であり、また精神科特有の難しさも感じました。

通訳者は、通訳の基本である中立は崩さず、感情移入してはいけないが寄り添う態度も持ち、患者を不安にさせることなく、過不足ない通訳が求められています。しかし、辻褄があつていなくともそのまま訳すということは、意図を把握するために予測をしながら通訳する者としても、不安を感じる一因となります。

最終的には通訳者が安心して医療従事者との意思疎通ができる関係が大事であり、それには三者が安心できる場作りが基本となるのでしょうか。どの場面でも言えることですが、理解できないことがあつたとき、ちょっとしたためらいから聞き返すことなく、それが原因で悲しい結末となることもあり得る世界です。改めて通訳者としての役割の重さを認識させられました。（参加医療通訳スタッフMさん）

●希少言語コミュニティ通訳養成研修 <多言語支援センターかながわ研修>

日時： 第1日目 12月10日(土)

会場： かながわ県民センター 15階 共用研修室

内容：  
 ① 医療通訳の基礎  
こうし みなとまちしんりようじよ じよきんし たけだちひろし  
 講師：港町診療所 助産師 竹田千尋氏  
 ② コミュニティ通訳の基礎  
こうし りじ つうやく いわもとやよいし  
 講師：MIC かながわ理事・ポルトガル語通訳 岩本弥生氏



参加者：12人（カンボジア語5人、タガログ語5人、ベトナム語2人）

多言語支援センターかながわでは、通訳ボランティアの登録者が不足している言語のコミュニティ通訳を養成する研修会を毎年行っています。今年度もMICかながわが企画・運営を担当しています。

前半、助産師の竹田千尋さんに、体の仕組みや日本で医療機関を利用するときに気を付けること、産婦人科での通訳などについてのお話していただきました。竹田さんはふだんから外国人の患者さんとたくさん接しているため、現実的なアドバイスをしていただけたと思います。特に産婦人科の話には、みなさん興味を持ったようでした。

後半は、通訳の基礎的な技術について。コミュニティ通訳とは何か、通訳するときに特に気を付ける基本は「足さない、ひかない、かえない」であること、対人援助などについて、MICかながわポルトガル語通訳スタッフの岩本弥生さんが説明しました。

第2日目の言語別ロールプレイは1月に行います。

### ●医療通訳スタッフフォローアップ研修（オンライン）

日時：12月15日（木）15:00～16:30

参加者：5人

フォローアップ研修は、基本的に医療通訳スタッフとして登録後1年経った人を対象に行っています。通訳活動を通しての困ったことや疑問等を話すことができ、他の人の経験を聞くことができる機会です。今後の通訳活動に活かしてもらえるように、アドバイザーが必要に応じて助言をします。

場数を踏むことで対処できるようになったことへの実感。待ち時間などでの患者さんとの距離の取り方や日頃の勉強法、使用しているアプリについての情報交換。文書への対応の仕方の再確認等、有益な時間となりました。

### ●一般通訳協力者基礎研修（オンライン）

日時：12月20日（火）15:00～16:40

内容：① コミュニティ通訳の基礎、通訳技術

講師：MICかながわ理事・コーディネーター・英語通訳 田中圭氏

② 通訳体験談

発表者：MICかながわタガログ語・英語通訳 薄井次郎氏

③ 派遣システムについて（事務局）

参加者：12人

今年度の新規登録者が参加し、コミュニティ通訳とはどういうものか学びました。通訳体験談を聴いたり、通訳の練習も体験して、限られた時間ですが密度の濃い研修となりました。

参加者からは「とても役に立つ内容」「現場の様子が想像しやすい体験談をシェアしていただき、ありがたい」「講師の先生のような落ち着いたトーンで寄り添ってあげられたら、と思った」等の感想が寄せられました。



## MICかながわの20年 ～そして未来へ

MICかながわ設立20周年記念オンラインイベント

2022年8月20日(土)12:30～15:30  
開催方法:ウェビナー/参加費:無料

MICかながわは今年設立20周年を迎えました。節目の記念事業として、これまでの歩みを振り返り、未来へと繋げていけるようなオンラインイベントを企画しました。たくさんの方々参加をお待ちしております。

### プログラム

◎12:35-13:25: 基調講演「多文化共生社会の中の医療通訳」  
田村太郎さん (ダイバーシティ研究所代表理事)

◎13:25-14:55: 座談会「20年の歩みを振り返る」  
MICかながわに長く関わってこられた方々

◎14:55-15:10: 新型コロナウイルススクイズ  
～沢田貴志先生のワンポイント解説付き～

◎15:10-15:15: 所感「鶴の一声」  
鶴田光子さん (MICかながわ前理事長)





主催: MICかながわ20周年記念事業実行委員会  
問い合わせ: [20th.anniv.p@gmail.com](mailto:20th.anniv.p@gmail.com)  
参加申し込み:  
<https://forms.gle/vHfzP8o7rh3oBQSA>  
またはQRコードから→  
申し込み締め切り: 8月13日(土) 申し込みフォーム





MICかながわ 20周年記念事業実行委員会  
主催のオンラインイベントが8月20日(土)に開催されました。  
実行委員としてイベント開催に労をとってくださった矢島行子さん、岩本弥生さん、草間久美さん、ありがとうございました。

<写真上から>  
司会: 田中圭氏 (MICかながわ理事)  
開会の挨拶: 松野勝民氏 (MICかながわ理事長)  
基調講演: 田村太郎氏  
(ダイバーシティ研究所代表理事)  
座談会司会: 高橋元央氏 (MICかながわ監事)  
座談会参加者:  
豊島勝昭氏 (県立こども医療センター医師)  
手塚順子氏 (川崎市立川崎病院 MSW)  
松野勝民氏 (MICかながわ理事長)  
早川寛氏 (MICかながわ副理事長)  
西村明夫氏 (日本公共通訳支援協会代表理事、元MICかながわプログラムアドバイザー)  
鈴木クリスティーナ氏 (MICかながわポルトガル語通訳)  
内藤まゆみ氏 (MICかながわタイ語通訳)  
クイズコーナー: 沢田貴志氏 (MICかながわ理事)  
鶴の一声: 鶴田光子氏 (MICかながわ前理事長)  
閉会の挨拶: 佐藤ペティー氏 (MICかながわ副理事長)



## 20周年記念イベント

### 【イベント概要】

MIC かながわは 2022 年設立 20 周年を迎えた。これを一つの節目ととらえ、これまでの活動の振り返りとこれからどう進んでいくのかという思いを MIC 内部の方々が持てる機会として、また、外部の方々にこれまでの活動を知ってもらう事を目的とし、継続できたことに対して感謝の気持ちを込めてオンラインイベントを開催することとなった。

### 【開催に至る経緯】

・2/1 今回のイベントは有志による会員活動という位置づけであり、事務局はサポートのみする、という約束で 20 周年記念事業実行委員会が立ち上がった。

・4 月末ごろ 開催形式、イベント内容、資金等 決定

プログラム決定 8 月 20 日（土）実施・参加費無料

### 【開催当日】

申し込み者数 260 名

登録者数 204 名



### 【イベントアンケートより】

みなさまから貴重なご意見をたくさんいただきました。全てを掲載したいところなのですが、全てを掲載すると 20 ページを超してしまいます。非常に残念ではあるのですが、一部を掲載させていただきます。

#### 1. 基調講演—田村太郎氏

- ・国、自治体、NPO の関係性、目指すところについて考えさせられました。
- ・外国人支援という言い方より多文化共生の社会づくりという主旨に大変賛同です。
- ・田村さんのお話はテンポがよく聞きやすかったです。後半部分での「多文化共生を進めていたはずが近年、世の中の分断が進んでしまった。このことについて何かをしていかなければならない」とのお話が大変印象に残りました。私も考えていきたいと思いました。
- ・社会福祉協議会の職員は地域の身近な人たちと近い組織であるが、多文化共生は違う分野のこととして捉えてきたのではないか、この 20 年で改めて地域を見つめ直すことが必要と感じた。
- ・国が多岐に渡る施策を、直接、間接的に行なっていることが良くわかりました。しかし実施には、私達がこれまでの活動で得た知識や経験を基に声を上げていく必要があるということで、日々の活動をこなすことに精一杯にならず、周りを見回す余裕が必要なのですね。
- ・行政からの予算（お金）は必要だが、それだけでは前に進まない。多職種の方の協力とそのコーディネートが大切。
- ・多文化共生について「対等な関係を築こうとする」ことを大事に施策に働きかけてこられたご尽力に頭が下がりました。また「ロードマップ」について重点課題 3 で高齢化も視野に入れたライフステージに応じた支援、切れ目のない支援の大切さがうたわれていることについては、今自身がかかわっていることとも通じ、もっと関係者とも共有していかなければならないと感じました。
- ・現在の問題は、多文化共生の担い手不足、この 20 年間で人材が枯渇しているというのは、現場にいて痛感します。折角、多文化共生の推進指針ができて、行政も動き始めたところなので、より一層の人材育成が課題だと感じました。



- ・私たちソーシャルワーカーは、学生時代から「支援」という言葉を普通に使っています。どのようなことが「支援」と呼べるのか、多文化共生という視点での外国籍、多文化の方たちとのかかわりの中で、今一度振り返る必要があると感じました。
- ・日本社会の事情によって、実態は労働し、日本を支えてくれている外国人の方々の本来保証されるべき安心安全な生活が、長い間、言葉や文化からくる不安の中に置かれたことが、時系列的によくわかりました。引き続き自分のできることを通して、一緒に生活する仲間である外国人住民の不安解消のお役に立ちたいと思いました。
- ・”国や自治体の多文化共生の在り方について”の変遷を示していただき、ありがとうございます。わかりやすく、また田村さんの強い意志も感じられて興味深く拝聴しました。最近ではSDGsも広く知られるようになりました。小学校などでもSDGsの視点で講義を展開することを求められていますので、田村さんの最後のご意見においてもSDGsの柱との関連を示していただくとありがたいです。



## 2. 座談会一声が聞き取りにくいという残念な面もたくさんのお声をいただきました。

- ・これまでのMIC設立に至る経緯、苦労などが異なる立場の方から語られ、大変参考になった。今後も医療通訳界をけん引して行ってほしい。
- ・行政、医師会、様々な方面における理解があって成立していった経緯を考えると自分の地域でそのような認識をもってもらうには今後どうして行ったらいいのか？
- ・対面、遠隔の使い分けが重要になってくること。報酬の問題と共に今後の課題である。
- ・通訳に入る前に医療者から通訳へのブリーフィングを行っている、との話に感銘をうけた。
- ・医療通訳者は神奈川県共有財産であるというマクロ的な視野を持ちたい。またそれに関連して患者の自立ということも考えていくことが必要。
- ・医療通訳講座を通じて受講生がリーダーとなり団体が立ち上がった。これからMICを参考に進んでいきたい。
- ・高齢者の問題（ボランティアや地域の活動の担い手）など医療通訳の問題と重なるところもあるので協働できたらいい。
- ・医療通訳者は言語の支援だけでなく、治療後に日本でどう生活していくか、その後の生活に影響するために、医療者と患者さんをつなぐコーディネートの役割が期待されていること、また、医療者との協働が重要であること。そのような認識をもった医療者を増やしていくためにはどのような方法が有効なのかを知りたいと思いました。
- ・行政からの視点がとても参考になった。かながわの成功は、行政担当者に西村さんのような人がいたからだと思った。3000円からのスタートについて、今となってはたしかにそうですが、当時は3000円でも出すことはとても大変だったと思います。20年の重みを感じてご発言でした。キャッチフレーズの「言葉で支える命と暮らし」は、福祉職の人もメンバーにいるからこそその「深み」だと思います。
- ・医療通訳が神奈川県にとって大事な資源である、とのご発言が大変印象に残った。
- ・時代背景とMICかながわの深い歴史を感じました。通訳はことばと文化的背景のセットであること、改めて感じました。
- ・MICかながわの誕生から現在の課題までそれぞれ活躍されている方々の異なる視点が伺えたのは貴重であった。

・通訳さんの話が参考になった。医師の方との良好な関係がわかった。

・各立場での皆さんのお話を聞きながら、初期の立ち上げの頃は、本当に「医療通訳利用者」としての目線だったと思い返しました。職場や理事としての経験を積み重ねる中で、機関のソーシャルワーカーが患者さんや家族の受診を支えていくことの大切さを感じ、医療通訳の存在の大きさに感謝するばかりです。当院でも外国籍の患者さんが来てあわてず、職員はできるだけのことをしようと考えてくれる人が増えました。

・MIC 発足当初の難しい状況について、印象深く聞きました。皆が携帯を持ち、病気についての情報を入手しやすくなった今とは比べられないような苦労があったのだと思います。病院と MIC、行政との連携が大切だということを再確認するお話でした。貴重なリソースである通訳を神奈川県内の必要なところにちゃんと回す工夫を今後とも MIC と病院と共に見つけていけたらと思いました。

・かながわ会議から外国籍の方々の声を吸い上げ、初期理事長の北村さんの働きかけがあり、県側では医師会の承認を得たり、予算を確保したり、他にも様々な方が尽力なさったおかげで今の MIC があるのだと知り、感慨深かったです。医師のお話では、MIC の通訳が微妙なところを通訳し、一緒に伴走してくれているという認識をしてくださっているとのことであれしかったです。ただ通訳するのではなく、意味を理解するというところは自分にもっと必要なことだと思いました。

・この活動に関わる多様な人材、立場、角度からの視点で、意見が交わされていることがとても参考になりました。

・当初、病院に容易に行けない方は自国から薬を送って対処していたということに驚いた。断片的には聞いていましたが、改めて立ち上げの頃のお話をこれだけ詳しくお伺いできて、とても感銘を受けました。そういえば 20 年前は携帯もあまり普及しておらず、コーディネートの大変さも想像を絶します！

・北村さんは地元の日本語教室や国際交流ラウンジ立ち上げで散々お世話になった方なので、久しぶりにお名前を聞いて懐かしく思うとともに、やはりすごい方だったのだなと改めて思いました。

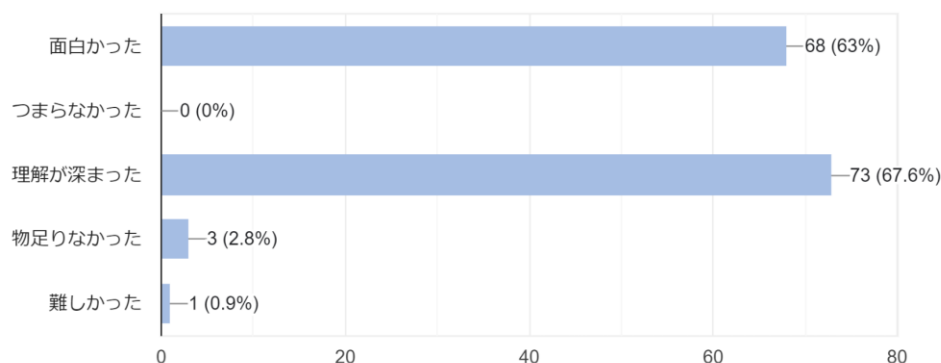
・これだけのメンバーが一堂に会することが素晴らしいと思いました。せっかくの機会だったので、パネルディスカッションのようにもう少しお互いが絡み合うライブ感があれば、より楽しかったと思います。





### 3. コロナクイズはいかがでしたか？（複数回答可）

108件の回答



### 4. 「鶴の一声」—鶴田光子前理事長

- ・お元気な姿を拝見できて本当に嬉しく、思わず画面に近づいてしまった。
- ・さすが元理事長、鶴の声が誰の声なのか、いつもの得た発言で本当に患者さん、外国籍の方のことを考えていらっしゃる姿に感銘を受けた。
- ・原点を思い出させて頂いている。
- ・また30周年でもお会いしたい、元気を頂いた。
- ・大変よかったです。クスっとできる笑いも取られながらさすがの一言です。またお聞きしたいです。
- ・鶴田前理事長の想いと外国人患者の声を聞くことの大切さを痛感しました。タイトルも上手に内容を表していますね。
- ・鶴の逸話の導入とその意味など、そしてその鶴というのは誰の声なのか良かったです。
- ・「人が人である事の尊厳を守る」活動がMICかながわの活動であるの御言葉にいつも胸を打たれる。今回もそのお言葉が聞け、懐かしい姿が見られて嬉しくて涙目になった。
- ・鶴田さんのお言葉は、いつ聞いても心を動かされます。在住外国人のみなさんの生活のために、これからも微力ながら努力を続けていきたいです。

### 5. 全体の印象

- ・長時間という印象をはじめは持ちましたが、あっという間でした。プログラムを工夫されており、クイズや一声や飽きさせない工夫が散りばめられており大変有意義でした。
  - ・20周年にふさわしい内容でした。おめでとうございます。
  - ・各方面からの登壇者、発表者で飽きさせない構成になっていた。
  - ・MICのこれまでの歴史がよくわかり、自分たちに共通する課題もあった。
  - ・基調講演と座談会の連動性が見えにくかった。
  - ・実行委員会の尽力が伝わってきた。
  - ・20周年を振り返り、命と暮らしを守る、というメッセージをしっかりと受け止めた。
  - ・神奈川県の関係者の方々が力を合わせて長年取り組まれていると言うことがよくわかりました。
  - ・多方面から発表者をご参加下さり、それぞれのご意見にこれまで知らなかった気付きがあり、また行政に対する率直なご発言や建設的なご批判も伺い、普段の皆様のコミュニケーションのとり方が伺われてよかった。
  - ・MICかながわにかかわってきた人たちのお話を聞くことができ勉強になりました。
- この20年間を振り返りつつ、これからも1歩1歩時代に合った形で共生社会を実現させてい

くという意思を感じました。

## 6. ご意見、質問

- ・音声に難があったもののウエビナーでの開催は地方から参加できるので大変よかった。
- ・このような企画はまた是非やってほしい。それぞれの発言者の話をもっと聞きたいし、研修会なども開催してほしい。
- ・後継者の育成、職業としての確立など、大きな課題が山積しているが、これまでと同様先駆者として道を切り開いて行ってほしい。
- ・MIC に様々な立場で関わっておられる方々のお話を伺うことができ、大変勉強になりました。何度か通訳報酬に関するお話が出ましたが、通訳スタッフの充実を図るには、報酬引き上げは重要な視点だと考えております。
- ・参加した意義が感じられました。折りにつけ思い出すことと思います。
- ・「多文化共生」について、ぼんやりと理解していた程度でしたので、その背景や歴史、新しく加えた/加えるべき施策、現在の問題点などを興味深く拝聴しました。
- ・座談会では、立ち上げから 20 年を迎えるまでの様々なご奔走やご苦勞を頭の下がる思いで拝聴し、初心忘れるべからず、と心に刻みました。
- ・沢田先生のコロナクイズでは、なぜ地道に感染対策をしている日本が感染者数世界一なのか、とフラストレーションを抱えていましたので、謎が解けてスッキリとしました。
- ・今までの 20 年の歴史の中で、たくさんの苦勞や想いなどがあつた上で、MIC が強固な地盤を築いてここまで続けてきた事を感じました。医療通訳や外国人共生の問題を真摯に受け止め、たくさんの人とのつながり、たくさんの人の知恵や経験を集めての今日。座談会では、それを強く感じました。
- ・20 周年、おめでとうございます。ただ一言、20 周年続けてきた、進んできた、のひとことではとうてい表現できないほどのことがあつたと思います。MIC の活動に関わって来られてきた方たちの多様な人材、力、思い、必要性、続けること、これからのこと、色々と考えながらずっと拝聴させていただきました。これまでを振り返りつつ、これからのことについて皆と考え、思いを重ねる貴重な会であつたと思います。機会をいただきありがとうございました。
- ・初代理事長の北村さんが多言語社会リソースかながわと名付けたように、MIC かながわは医療通訳だけをしているわけではないが、今回は医療通訳に特化した内容だった。20 周年を振り返るということであれば、その分野も視野に入れてほしかった。
- ・私はMIC かながわという団体を応援しています。広島に住んでいますが、広島県でもMIC かながわのような団体を作りたいと本当に思っています。20 年の軌跡を知ることができ、大変有意義で勉強になりました。
- ・私が住んでいる地域でのイベントに MIC かながわの方が講演にいらしていただいたり、SW の協会でお話いただいたことを通して、遠方ではありますが、ときどきつながらせていただいている気持ちであります。自分ができることをもう少し考えてみたいと思いました。
- ・まだ多文化共生が世間に周知される前から、このような活動を続けてこられた MIC かながわに、改めて敬意を感じるイベントでした。最近はビジネス的な電話医療通訳などがメディアに多く露出していますが、だからこそ、MIC かながわならではの対面でのボランティア通訳も必要とされていると思います。文化を繋ぐコミュニティ通訳としてのあり方、その重要性をもっと世の中に知ってもらうことが出来たら、と願います。

## 7. 今後の MIC かながわに期待すること

- ・医療通訳のパイオニアとして多くを学ばせていただいております。今後も引き続きよろしくお祈りします。
- ・様々なツールの使用が広がっているが、研修で具体的場面を想定してそのあり方をしめしてほしい。病院がきめることではあるがもう少し明確に定義されることを望む。



- ・大変ためになる研修が多いので、今後ともぜひいろいろな研修を計画していただきたいと思います。これからも、医療者、患者さん、その他の外国籍の方から、MICかながわに頼めば安心…と常に頼られる存在で居続けていただきたいと思っております。
- ・他地域が参考に出来るような発信を含め 啓発活動をおこなってほしい。
- ・通訳の活動状況や必要なスキルなどを発信し、MICならではの強みを教えてほしい。
- ・まだまだ医療通訳を知らない人が多い中、広報に工夫が必要。
- ・ネイティブさん向けの医療通訳講座を開催する力が今のMICにあるのでは。
- ・通訳がいてよかった例を具体的に示せないか。
- ・続けてこのようなセミナーなどを開催してほしい。
- ・フリートークのような座談会を。
- ・同行の重要性、報酬の改善など、行政や医療機関に働きかけてほしい。
- ・外国つながりの子どもと保護者の関係がうまく築けていない例を多く見ます。MICの趣旨からは外れるかもしれませんが、今後、ペアレンティングに関する研修会など、ご検討いただければありがたく存じます。
- ・ボランティア通訳の様々な問題点を改善できる体制構築に期待する。
- ・今後も新たな主体と出会い、引き続き様々な主体との協働を進めて行かれることを期待している。



## 寄せ書き



MIC かながわ設立 20 周年、おめでとうございます。

私の参加の契機は 2010 年にスタッフの方が職場に訪ねてこられ、参加を勧めて下さったことでした。当時、家庭と仕事と子育てに明け暮れ、ボランティア活動加を躊躇していた私の背中を押して下さったことに今でも感謝しています。私自身は MIC かながわの方々にその熱意で拾い上げていただいた人的資源の一人であると思っています。MIC かながわ皆様の今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

ラオス語通訳 A.T

医療通訳は私の大切な生きがいの一つです。

その活動ができるのは MIC のおかげ。とても感謝しています。

MIC に関わり支えて下さる方々、共に活動する仲間、出会った医療従事者、患者さん、皆様から多くの事を学びました。

20 年を超え、今後も何があるかわかりませんが、行ける所まで頑張りたいです。

スペイン語通訳



皆さま ご存じでしたか？MIC のメンバーが多才なことを！活動の本業以外に先日の研修でも お分かりのように演技派の役者さんがいらっしゃいます。その他にも手芸に秀でてる方、楽しくなるゲームの企画や実行、懇親会で並ぶお料理の品々、学問の追求に励んだりとまだまだありそうです。

そんな一人一人の素晴らしい力が結集して MIC が続いています。

皆さんからのサポートや刺激を頂いてこれからもメンバーの一員としてお役に立てるよう頑張ります♪

タイ語通訳 M.O



20 周年おめでとうございます！

MIC の医療通訳を始めて 18 年、長い間 MIC の活動に携わることができてとても嬉しく思っています。始めたばかりの頃、不妊治療をしていた患者さんの妊娠がわかり、ご夫妻と共に喜んだことを今でも覚えています。近年、遠隔通訳や通訳アプリなどの AI の発展が目まぐるしいですが、私たちが側にいることで患者さんの不安な気持ちが和らいだり、患者さんが医師の説明を理解できていないのではないかと察知して確認するなど、対面通訳だからこそできる患者さんへのサポートがあると考えています。患者さんがいつどの医療機関に行っても安心して納得して医療を受けられるよう、MIC の医療通訳事業がさらに発展し、多くの地域で周知、普及されることを願っています。

英語通訳 谷本陽子



設立 20 周年おめでとうございます。

長年のサラリーマン生活のあと今後をどのように生きるかとの思いの中、出会ったのが MIC でした。その中でこうした活動は、対象相手だけではなく自分の為でもあることにも気づかされ、今では生活の一部として今後とも微力ながら活動継続できればと思っています。

MIC との出会いに感謝です。

ポルトガル語通訳

MIC かながわ 20 周年、誠にありがとうございます。

助けを必要としている外国人のために MIC かながわが提供する継続的なサポートに感謝します。

今後とも MIC かながわの益々のご発展をお祈り申し上げます。

応援しています。

Buong pusong pagbati sa Proyekto ng ika-20 anibersaryo ng Mic Kanagawa.

Maraming salamat sa Diyos sa patuloy na suportang idinudulot ng MIC Kanagawa para sa mga dayuhang nangangailangan ng tulong.

Patuloy na panalangin sa kinabukasang

kaganapan ng MIC Kanagawa. Mabuhay.

タガログ語通訳 Geraldine

MIC の活動では、嬉しい瞬間から辛い場面まで、さまざまな通訳を経験しました。中でも、久しぶりに母国語で話すことができたと言って喜び、かなり厳しい内容だったのにもかかわらず、ずっと笑顔で通訳に耳を傾けていた患者さんのことを忘れることができません。

ロシア語通訳



MIC には、昔頂いた留学用奨学金に対する恩送り (pay it forward) の機会、フランス語を通して様々な文化に触れる機会を与えて頂き、感謝しております。

微力ながらも多文化共生を念頭に置き、毎回しっかり準備して活動したいと思います。

フランス語通訳 M.S

ネパール語医療通訳が、MIC かながわの歴史に時を刻み始めたのは、わずか 4 年半前からのことです。多くの国の中から”日本”を、そしてここ”神奈川”を選んでくれたネパールの人たちのためにも、引き続き微力ながらお手伝いできればと思っています。

कानागावामा बसोबास गर्ने नेपालीहरूलाई हामी सहयोग गर्न जारी राख्छौं ।

〈神奈川で生活をしているネパールの人たちのために、私たちは、これからも手助けをします。〉

ネパール語通訳 かねだ えいこ

皆様に感謝もうしあげます。  
私は2009年11月に MIC のベトナム語通訳となりました。1960年代から日本とベトナムの友好相互理解の活動をはじめ通訳にも参加。現在共生社会実現のため、通訳者の社会的地位向上、処遇改善が切実な課題です。

ベトナム語通訳 本吉 良吉



MIC 設立当初にご尽力された方々のおかげで、ここに二十周年を迎える事が出来ました。医療通訳を通じて自分が日々成長している事を実感し、嬉しく感じると同時にここまで自分を成長させてくれた MIC の存在に感謝しています。医療通訳の現場では大変な事もありますがそれ以上に患者さんの笑顔や回復していく様子を身近に見られる事が今後の活動の原動力になっています。これからも皆さんと共に MIC を必要とされている方々のために頑張っていきたいです。

中国語通訳 清水秋恵

MIC かながわ 20 周年おめでとうございます。  
こうして多くの方と喜びを分かちあい、医療通訳のこれからの思いをはせることができうれしく思います。

「医療通訳は対人援助です」

新任研修で聞いて以来ずっと胸に刻み、噛みしめている言葉です。ことばでサポートをしようと考えていた私ですが、気がつけば人とことばを通じてサポートをいただいていた。

多くの学びと世界を広げてくれた MIC かながわと医療通訳に感謝する日々です。

韓国語通訳 斉田麻衣子

コーディネーターになって以来常々思うことは、通訳と病院を結ぶ架け橋になりたいということです。その結果患者さん方の力になれるとしたらこれほど嬉しいことはありません。このような素晴らしい活動ができるのは MIC あってこそだと思います。今後も MIC かながわの発展を心より願ってやみません。

コーディネーター K.S



私は、1986年に難民として日本にきました。3か月間、南林間難民定住促進センターで日本語の読み書きと、会話の勉強をしました。MIC医療通訳を始めてから10年になりました。MICかながわの医療の仕事に出会えてよかったです。

2013年9月、鶴田理事長から医療通訳の仕事をしませんかと電話がありました。私は、その時に10歳と9歳の子どもを育てながら希望ヶ丘定時制高校の2年生で勉強をしていました。私は、「勉強不足で、医療通訳の資格はありません。私でもできますか」と聞きました。鶴田理事長は、「MICの事務所に来てください」と言いました。一晩、私は、その医療通訳のことを考えました。

翌日、事務所へ行って、試験と面接を受けました。一週間後、電話がありました。手が震えてドキドキしながら受話器をとると合格が告げられました。通訳に行く度に患者さんから、「MICはいいですね」と言われました。「どんなところが良いですか」と私が聞くと、「日本語がわからないと、医師の言っている言葉や意味は分からないからとても不安です。MICが通訳を派遣してくださるおかげで、私の不安や病気のことを気楽に先生に伝えることができるようになりました」それを聞いて、私はとてもうれしく思いました。今後も、医療通訳の勉強に参加してよい通訳さんになりたいです。

優しい理事長と優しい先輩の皆さんと出会えてよかったです。

カンボジア語通訳 M.N

MIC20周年おめでとうございます。

MICにかかわり感心したのは実績がデータ化されていることでした。データ化されるからこそ見えてくるものが多く、改善され続けていく。すばらしい活動でも一世代で終わってしまうのを見てきました。うまく第二世代に引き継がれ40年、50年を迎えられることを願っています。

元コーディネーター K.A



2002年4月のMICかながわ設立時の事務所は、鶴屋町2丁目の日興パレス横浜703号室ワンルームでした。スタッフは初代事務局長の松延恵さんひとり、その後3人になりましたが、国際色豊かなボランティアが集まり、初代理事長北村眞佐子さんを囲んで事務局の仕事を手伝っていました。在住外国人支援に関心を寄せて団体の立ち上げを支えてくださった専門家も多く、税理士の渡辺恭一さんは熱心にNPO会計の指導をしてくださいました。

業務拡充に伴い、2006年3月に事務所は鶴屋町3丁目の農機会館5階3号室に移転しました。引っ越しはボランティアが台車を引いての手作業でした。2011年の東日本大震災でもびくともしない堅固な由緒ある建物で、廊下を挟んで向かい側にガスが使える給湯室があり、時々事務所でエスニック料理パーティーを楽しみました。

2016年4月に多言語支援センターかながわの運営業務をかながわ国際交流財団と共同で受託し、センター開設に伴って事務所もかながわ県民センター13階に移転しました。コーディネーターブースも2階から13階に移転し、事務局と一体になって通訳派遣事業に取り組む体制が整いました。

設立以来、事務所の机や椅子、書棚などはすべて寄附されたもので、今でも大切に使っています。これからも、ボランティアの皆さまの熱意と献身に感謝しつつ、設立当初の志を継承していきます。

MICかながわ事務局スタッフ一同



この度、MIC かながわ設立 20 周年記念誌をこのような形で発行することが出来ました。発行にあたり、ご協力くださったすべての方々に心より感謝申し上げます。過去を振り返り、まとめることで、これからも時代の荒波を超えて進んで行くであろう MIC かながわの力の源になることを願っています。



昨年の 20 周年オンラインイベントから引き続き記念誌に携わり、足掛け2年で MIC の 20 年間を振り返りました。さながら大河ドラマを 1 つ観終えたような達成感と共に、MIC かながわを作り育ててきた方々への敬意で胸がいっぱいです。  
草間久美

MIC かながわの活動は、私にとっては「自己実現」そのものです。自分のためにこそ続けてきた活動が、結果的に人にお役に立っている、という構造。この活動が昨年の 20 周年記念事業と今回の記念誌発行という形で結実し、嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいです  
今後もずっと続けていければなあ、と心から願っています。  
矢島行子



MIC かながわ 20 周年、20 年間の総括をしてこの先に進んでいけるようなイベントがしたい！と強い思いを持ち、皆さんの協力を得て何とか実現できました。記念誌はやるぞ！というのではなく、「う～ん、やっぱり何かを残さねばいけないんだよなあ」とちまちまと取り組ませていただきました。これまた、皆さんのおかげでなんとか日の目をみる事ができました。本当にありがとうございました。  
岩本弥生



2023年8月20日発行

MIC かながわ20周年記念事業実行委員会

20th.anniv.p@gmail.com